



アンテルナシオナ  
ル・シチュアシオ  
ニスト 第7号

シチュアシオニスト・イン  
ターナショナル

# 目次

---

『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』に発表されたすべてのテキストは、出典を明記しなくても、自由に転載、翻訳、翻案できる。

1. 冬眠の地政学
2. 『悪しき日々は終わるだろう』『S Iの役割』『優先的コミュニケーション』 訳者改題
3. 悪しき日々は終わるだろう
4. S Iの役割
5. 優先的コミュニケーション
6. イェーテボリでのS I第5回大会
7. 当たり前の基礎事実1
8. 当たり前の基礎事実2
9. サンセット大通り
10. 次の段階
11. シチュアシオニスト情報
12. 付属資料 ポトラッチ（準備中）
13. 解説 空間の政治学に向けて ——シチュアシオニスト、アウトノミアからレオンカヴァッロへ 伊藤公雄

### 訳者解題

62年のシチュアシオニストの機関誌の冒頭を飾るこの論説「冬眠の地政学」(Geopolitique de l'hivernation)は、60年代初頭に東側でも西側でも爆発的に普及した核シェルターというグロテスクな物体を、単に冷戦下の社会に出現した特異な一事物として捉えるのではなく、現代資本主義が編み出した究極の商品であると同時に現代社会における「居住」の形態の究極の姿として捉えた点で画期的である。

米ソ両陣営間の冷戦は、それが核兵器の開発と配備の果てしない競争の末に地球規模の破滅的戦争を準備するから有害なのではなく、「恐怖の均衡」という論理のもとで、政治から日常生活までのあらゆるレベルでの「屈服」、言い換えれば変革への断念をしいるからこそ有害である。米ソそれぞれの超大国は互いの国家としての永続性という理念に屈服し、それぞれの国民は自国の「運命」というイデオロギーに屈服して、政治的変革も日常的変革も断念してただ「生き残る」ことだけを優先的課題とさせられる。同じ論理で、東西の陣営を問わず、この両陣営のゲームに参加するために発展途上国の人民の変への意志は抑えつけられる。まさに、現実の戦争が問題なのではなく、戦争の「恐怖」をスペクタクル的に演出することによって、既存秩序への住民の「全面的な屈服」を組織化することが、「冷戦」の隠れた意図なのである。

こうした論理に基づいて、S Iはケネディの唱える「民間防衛計画」を批判するが、その批判のしかたにシチュアシオニストの独自性が現れている。すなわち、彼らが「核シェルター」を批判するのは、それが核軍拡のたまものでありかつそれを正当化する道具であるというだけではない。第1に、核シェルターとは「スペクタクルの社会」と化した資本主義社会において人工的に作られた欲求を満たす理想的な「商品」として、自動車や住宅と本質的に同じ役割を果たし、それどころか50年代の耐久消費財の相対的飽和状態のなかで資本が新たに発明した商品、救世主的な商品だった。シチュアシオニストがここで指摘するように、それは、各家庭に対してさらにもう1つの住居を購入させることによって、その中に容れるべきモノをもういちど1から全て買うことを強制するからこそ彼らはそれを批判するのである。第2に、「核シェルター」こそは体制側の都市計画の集約点である。「生き残る」ための最小の効率的な機能に切り縮められたこの住居は、ル・コルビジエの唱える機能主義的な「住むための機械」の理想である。その意味で、ル・コルビジエの設計したマルセユ・アパート(1953年完成のこの巨大なコンクリートの塊は、340家族、1600人を収容し、商店街から幼稚園、屋上庭園まで備えた「垂直都市」だが、それを強制収容所と見るか見ないかは、見る人の感性の問題だ)をまねてニースに作られたフランス最初の団地に核シェルターが設置されたのは偶然ではない。シチュアシオニストは、機能、居住の孤立化、住民の管理・操作などの点で、「団地とは、ただ単に、核シェルターの劣った段階を表しているにすぎない」と明快に主張する。巨大なコンクリートの集塊、強制収容所のように整然と幾何学的に配された居住スペース、権力にとってのみ見通しの良い通路、画一化された内装、眠り、食事をし、セックスをし、テレビを見るだけで社会生活とは切り離され

た生活、外は自動車のための道以外は荒涼とした無人の地帯、それが「団地」というものだが、それを突き詰めると「核シェルター」になるのである。団地という「眠りの壁」も新都市という「建築のメガトン爆弾」も、「最後の審判の爆弾」と同様に、「転覆する」こと、しかもそれを同一の「転覆」として行うこと、その「積極的なプロジェクト」がシチュアショニストの「状況の構築」である。

---

競合する二大国家陣営間の「恐怖の均衡」——現時点での世界政治の本質的所与の内でも最も明白なものであるが——それはまた敵対する陣営それぞれにとっては、相手が永久に存続することへの屈服が均衡していることを意味し、国境内部では、1つの運命に対する人々の屈服が均衡していることを意味する。その運命は、あまりにも完全に人々の手を逃れて行ってしまうので、地球が存在していること自体が、戦略家のうかがい知れぬ巧妙さと慎重さに委ねられた偶然のたまものにすぎないものになってしまっている。それがはっきりと含み持つ意味は、現にあるものに対する全面的な屈服であり、またこの運命を組織する専門家たちの共存能力に対する全面的な屈服である。彼らがこの均衡に補足的な利点を見いだすのは、それぞれのシステムの周辺で、そしてまず発展途上国の現在の運動の中で突発するどんな原基的解放の経験も、この均衡のおかげで速やかに清算することができるからである。コンゴの革命的高揚\*1が国連派遣軍の派遣によって鎮圧された（1960年7月初め、国連派遣軍が上陸してからの2日間に、1番乗りしたガーナ軍はレオポルドヴィルの交通スト破りに貢献する）のは、ある威嚇を別の威嚇によって中和する——機に乗じて利益を得る保護者が誰であれ——同一の悪循環を通じてである。またキューバの革命的高揚\*2が単一の政党の結成によって鎮圧されるのも（1962年3月に、スペイン革命弾圧で重要な役割を果たしたことで知られるリステル将軍\*3が、キューバ軍の副参謀長に任命されたところだ）、同様にしてである。

二大陣営が実際に準備しているのは、戦争ではなく、自分たちの権力の内的安定化を映し出すこの均衡を無限に維持することである。言うまでもなく、これには莫大な資源が結集されることになるだろう。なぜなら起こりうる戦争のスペクタクルのなかで常により高いところへと到達することが至上命令とされるからである。というわけで、バーリー・コモナー\*4——彼は核戦争が約束する破壊の評価を合衆国政府から委託された科学委員会の議長を務めていた——は、核戦争の1時間後に8千万人のアメリカ人が死亡し、生き残った者も、その後通常の生活を送れる見込みは皆無だろうと発表している。参謀本部は、準備段階では、メガボディ（100万人の死体を表す単位）でしか計算を行っていないが、最初の半日以降については計算しても無駄であり、それ以降の計画立案については具体的な情報がまったく欠けていることを認めた。1962年1月5日の『ル・モンド』紙のなかで、ニコラス・ヴィシュネーが述べたところによれば、アメリカ防衛の学説を唱える前衛的潮流は、すでに「最上の抑止手段は、地上に埋め込まれた巨大な核爆弾を持つことにあるだろう。敵が攻撃をしかけてきた時には、その核爆弾を爆破させれば地球

は粉々になるだろう」と考えている。

この「最後の審判のシステム」（ドームズデイ・システム）の理論家たちは、確かに降伏の絶対的兵器を見だし、歴史の拒絶を初めて正確な技術力でもって表現した。しかし、この教条主義者の厳密な論理は、人々の生き延び〔＝余分な生〕（survie）を組織しながら彼らの生を阻害するという確固たる計画を有するこの疎外社会の矛盾した欲求の1側面だけにしか対応していない。（ヴァネーゲームが「当たり前の基礎事実」で書いている、生きること（vie）の概念と生き延びること〔＝余分な生〕（survie）の概念との対立を参照せよ）。生き延びることは、現在と未来の人間労働を搾取する不可欠の条件だが、その生き延びを軽視することでドームズデイ・システムが果たしうる役割は、それゆえ、支配的な官僚制の究極の理性〔＝最終手段〕という役割だけであり、それは逆説的にも、それらの官僚制がいかに真剣かを保証するにすぎない。しかし、概して来るべき戦争のスペクタクルが完全に効力を持つには、今からすでに、われわれの知る平和の状態の形をでっち上げ、それらが根本的に要請するもののために働かなければならない。

この点で、1961年を通じての核シェルターの異常な発達は、確かに冷戦の決定的な展開点であり質的な飛躍ではあり、この秘薬は惑星規模にまでサイバネティクス化された全体主義的社会の形成過程において途轍もなく重要であることがやがて明らかになるだろう。この動きは合衆国で始まったが、そこでは、今年の1月にケネディが『同盟のの状態に関するメッセージ』のなかですでに議会に次のことを請け合えるまでになっていた。「市民の防衛シェルターについての最初の重要なプログラムが実行され、5千万人を収容する用地を特定し、標識をつけて確保しています。学校、病院、それに類する場所での核シェルターの建設に対して連邦当局から与えられた支持に皆さんの同意を求めます」。国家によるこうした生き残りの組織化は、公然、非公然は別にして、二陣営の他の重要諸国へと早急に広がっていった。例えば、西ドイツでは、まず誰よりもアデナウアー首相\*5と彼のスタッフの生き残りに心を砕いたが、この計画の実現を漏洩したミュンヘンの雑誌『クイック』は押収された。スウェーデンとスイスは、山間部を掘った集団シェルターを設置し、その工場とともに埋められた労働者たちが、ドームズデイ・システムのフィナーレまでたゆみなく生産を続行できるようにしてある。だが、市民防衛政策の基盤は合衆国にある。そこでは、テキサスのピース・オーマインド・シェルター・カンパニー、メリーランドのアメリカ・サバイバル。プロダクツ・コーポレーション、カルフォルニアのフォックス・ホールシェルター株式会社、オハイオのビー・セイフ・マニュファクチャリング・カンパニーのような繁盛している多くの企業が、個人用シェルター、つまり各家庭の生き延び設備用の私有資産として建造された無数のシェルターの広告と設備を受け合っている。周知のように、このような流行をめぐって、宗教的モラルや教会についての新解釈が発展している。つまり、それは自分の家族の命を確実に救うためには、たとえ武器を手にしても、シェルターに友人や赤の他人を近づけることを拒否することが明白なる義務だと主張するのである。事実、ここではモラルは、近代資本主義のあらゆる宣伝のなかに潜む同調という名のテロリズムの完成に寄与するにふさわしいものでなければならない。家族や隣人を前にして、あるレベルの給料で分割払いで手に入るタイプの車を持たないと主張するのは、これまでもほとんど困難なことであった（それはアメリカ型の大都市の全体で常に認められることである。というのも居住場所の設定はまさに給料の

レベルに応じて決定されるからである)。市場の景気に応じて入手しうる相応の生き延び手段を家族に保証しないでいることは、それと比べるといっそう困難だろう。

合衆国では、1955年以来、「耐久消費財」の需要の相対的飽和状態は、消費が経済発展に与えるべき刺激の不足を招いていると一般に見なされてきた。確かに、あらゆる種類のガジェット商品の流行の広がり、そうしたものとして理解できる。というのも、ガジェット商品とは、準耐久消費財の部門のまったく思い通りになる余剰生産物の代表だからだ。だが、シェルターの重要性もまた、〔経済の〕拡大に必要な推進力というパースペクティブのなかに十分よく現れている。シェルターの設置と、予測しうるその拡張にともない、すべてを地下でつくり直さねばならない。住居設備の可能性は再考されなければならない。すなわち、2倍の量を考えなければならないのである。実際に、新たな規模で、新たな耐久消費財を設置することが必要となっている。今日まで豊かな社会が未開拓なまま残していた地下の地層へのこうした投資によって、自ずから、すでに地上で使用されている準耐久消費財（例えば、各々のシェルターが大量に備蓄せねばならない缶詰食糧のブーム）や新しい特殊なガジェット商品（例えば、シェルター内で死に、当然そこで生存者とともにとどまり続ける運命にある人々の身体を収容するプラスチック製の袋）の生産が盛んになる。

すでにあらゆる場所にばらまかれた個人用シェルターは——例えば、酸素補給の自給ができないというような粗雑な技術的過失から——まったく役に立たず、また、核戦争が偶然によって実際に起こってしまったなら、どれほど完全な集団シェルターでも生き延びのための非常にがざられた余地しか提供できないだろう。このことは確かに簡単に気が付くことだ。だが、どのような恐喝についても言えることだが、ここでも防衛というのは単なる口実に過ぎない。シェルターの真の用途は、人々の従順さを測り、それゆえそれを補強することであって、支配的な社会に好都合な方向へとこの従順さを操作することである。豊かな社会で消費しうる新食品の創造と同じく、シェルターは、これまでのいかなる商品にもまして、極めて人工的な欲求を満たすために人間を働かせることができるということを示している。この人工的な欲求は、「たえて欲求であったためしがなく、欲求にとどまる」（1960年7月20日の『（統一的革命綱領の定義に向けた）予備作業』を参照せよ）。また欲望になる恐れもないのである。この社会の力、その恐るべき自動性の天性は、この限界状態において測ることができる。この力は、万人にとっての最良の解決策は首を吊ることだと思えるまでに空虚で絶望的な生活を押しつけるのだと乱暴にも主張するまでになるだろう。そして、おまけに、規格化された〔自殺用〕ロープを自ら生産することで、それは事態を安全かつ実りあるかたちで運ぶことにも成功するだろう。しかし、それが持つ資本主義的な富すべての中で、生き延びという概念が意味することは、消耗の果てにまで引き延ばされた自殺、日々生を断念することである。核シェルター網——それは戦争に役立つためにあるのではなく、今ただちに役立つためにある——は完成された官僚主義的資本主義のもとに置かれた生活の極端で戯画的な似姿になっている。ある新キリスト教は、そこに断念という彼らの理想や、産業の建て直しと両立しうる新たな恭順を置き直している。シェルターの世界は、自らを、空調のある涙の谷〔天国に対して苦悩に満ちた現世をいう〕と認識している。すべての経営者と彼らの彼らのさまざまな司祭たちの同盟は、カタレプシー〔＝強硬症、一定の姿勢をとったまま変えようとしぬ症状。分裂病患者などにみられる〕に力を、もっと過剰な消費を、という統一

スローガンで一致できるだろう。

生の対極としての生き延び〔=余分な生〕は、1961年のシェルターの購入者たちによるほど、はっきりと賛意を表明されるのは珍しいが、疎外に反対する闘争のあらゆるレベルに見出される。芸術についての古い考え方は、生を断念することの告白として、言い訳と慰めとして、作品によって生き延びることが強調されている（主として、宗教的背後世界の世俗的代替物である美学が生まれたブルジョワの時代以降）。さらに、最も欲求を切り縮めがたい段階すなわち、食糧や住居における生き延びのための必需品においても、統一的都市計画の『基本綱領』が断罪する「有用性への脅し」を用いて、それは「屋根が必要であるという単純な論拠によって」、環境に対するどのような人間的批判も消し去ってしまうのである。

「団地」という形を取る新しい住居形態は、実際にはシェルター建築と切り離さすことができない。団地とは、単にシェルターの劣った段階を表しているにすぎない。ただ、団地のアパルトマンの1軒1軒は狭く、棟から棟への連続的な移動を可能にする解決策が計画されていないだけだ。フランスでの団地の最初の例は、現在ニースに建てられているブロックである。そのブロックの地下には、そこに住む大量の住民のために、すでに核シェルターが取り付けられている。強制収容所のような地上組織は、形成途上にある社会正常な状態であるが、その社会を地下に縮小して再現したものは、過剰なまでの病理を表している。この病は、この健康の図式をよりうまく暴いている。地上での絶望の都市計画は、合衆国の移民地区だけではなく、それよりはるかに遅れたヨーロッパの国々の移民地区でも、さらには、例えば「コンスタンティーン計画」\*6以来、公然と主張されている新植民地主義時代のアルジェリアにおいてさえ、急激に支配的なものになりつつある。1961年末に、フランス領に関する修正国家プラン第1版——その公式はその後、緩和されたが——は、パリ地方に関する章で、「活気のない住民が、首都の内部に居住することに執着していること」を嘆いている。そして、幸福と可能性の専門家であるそのプランの資格のある執筆者は、「パリ住民は、パリ郊外に移れば、より快適な生活ができる」ということに注意を促している。それゆえ、執筆者らは「この不活発な人々が」パリに「居住することを徹底的に阻むこと」を合法化することで、この耐え難い不条理を除去することを要求している。

価値ある主要な活動は、このような社会を動かす経営者たちの計算を徹底的に阻み、具体的に除去することにあるのは明白だ。そしてそれを実行する覚醒した群衆以上に、都市計画の立案者らは常にそのことを考えているため、地上のあらゆる近代的設備のなかにその防衛策を築くのだ。屋根という普通の形であれ、予防的に作られた家族が住むための墓という「豊かな」形であれ、住民のためのシェルターの計画立案は、実は計画立案者自身の権力を守るのに役立つに違いない。国民を缶詰状態にし、できる限り孤立化することを管理する指導者たちは、この機会を利用して、自らの戦略的目的に専念できる。20世紀のオスマンたちは、都市の古い市街地の碁盤の目のなかに抑圧力を確実に展開できるようにしておく必要はもはやない。彼らは、広大な放射状の上地に、純粹状態の碁盤の目を描くいくつもの新都市（そこでは、武装解除され、コミュニケーション手段を奪われた大衆の劣性は、ますます技術を強化する警察力に比べると、明らかによりひどいものになってゆく）に住民を分散させると同時に、いっそうの安全を期して、指導者官僚だけしか住民になれないような、攻撃の手の及ばぬ首都を建設する。

こうした政府 - 都市の発展の別の段階として、ティラナ\*7の「軍事地帯」を挙げることができる。それは、都市から遮断され軍隊に守られた地区で、そこにはアルバニアの指導者たちの住居や中央委員会の建物、学校と公衆衛生施設、自給生活をするエリートのための商店や娯楽施設が集中している。〔アルジェリアの〕ロシェ・ノワール\*8の行政都市は、フランスの〔植民地政府〕機関を大都市で通常に維持できないことが明らかになった時、アルジェリアの首都の役目を果たすべく1年で建設されたが、それはまさにその機能からしてティラナの「軍事地帯」に対応している。ただ、ロシェ・ノワールは野原の真ん中に突然出現したという違いがあるだけだ。最後に、ブラジリアという最も顕著な例がある。それは、広大な荒野の真ん中に降って湧いた都市であり、その落成は軍によるクワドロス大統領\*9の更迭とブラジルの内戦——それはもう少しで、官僚たちの首都の真新しい壁を拭う〔=新築の住居に入り込む〕ところだった——の前兆に呼応していた。この都市はまた、周知のように、機能主義建築の模範的な成功例でもある。

こうした事態のなかで、不安をかき立てる数々の不条理を告発し始める専門家たちが数多く見られる。彼らがそうするのは、見かけ上の部分的な不条理——彼ら自身の活動も、それに深く貢献している——を操る中心的合理性（首尾一貫した狂気の合理性）を理解しなかったからである。したがって、不条理に対する彼らの告発も、その形式と手段において不条理なものではありえない。ニューヨーク、およびボストン地区のすべての大学と研究機関の900名の教授が、1961年12月30日付けの『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』紙上で、ケネディ大統領とロックフェラー財団統裁に恭しく手紙を宛てて——ケネディがデビューするにあたり、5千万人のシェルターを選んだと自慢した教日前のことだ——、「市民防衛」の発展の不吉な性格を二人に説いていたが、彼らは何を考えてそんなことをしたのだろうか。あるいはまた、社会学者、裁判官、建築家、警官、心理学者、教育学者、衛生学者、精神分析家、ジャーナリストたちの大群が、ありとあらゆる種類の会議、委員会、討論会に押し寄せ、「団地」を人間化するためにみんなで決定的な解決策を研究しているが、彼らも何を考えているのだろうか。団地の人間化は、まさに核戦争の人間化と同じように——同じ理由で——馬鹿げた欺瞞である。核シェルターは、戦争ではなく戦争の脅威を、現代資本主義において人間を定義するもの、すなわち消費者としての義務という意味での「人間的尺度」に引き戻すのである。人間化についてのこうした問いかけは、人々の抵抗を抑圧するのに最も有効な虚偽を広く確立することを率直にめざしている。郊外の団地は、寒冷の地ヴェルホヤンスク\*10と同じくらい直接かつ明白に、退屈と社会生活の完全な不在という特徴を持つので、いくつかの女性雑誌はとうとう、新しい郊外の最新モードに焦点を当てたルポルタージュを行い、これらの地区で自分の雑誌のモデルの写真を撮り、満足した人々にインタビューを行うことまでしている。生活の場（デコール）が人を愚鈍にする力は、子供の知的発達によって測られるため、子供たちは古典的貧困のなかで劣悪な居住条件を不愉快にも代々受け継ぐのだと強調される。改革論者の最新理論は、ある種の文化センターに希望を置いているが、人々を逃げ出させないために、文化センターという言葉は使わない。セーヌ県建築労働者組合の計画では、労働者の仕事をあらゆる場所で人間的なものにするプレハブの「食堂（ビストロ）クラブ」がある（1961年12月22日付け『ル・モンド』紙を見よ）。それは、立方体（28×18×4メートル）の「プラスチック製の小部屋」として示され、その中には、「恒久的なユニットとして食堂（ビストロ）が設置され、そこではタバコや雑誌も売っ

ているがアルコールは提供しない。残りの空間は、ブリコラージュのさまざまな職人的活動に当てられるだろう……。この食堂（ビストロ）クラブは、そこに含まれるあらゆる魅力的な性質を示すショーウィンドーとならねばならない。それゆえ、美の概念と素材の質が、夜も昼も、十分な効果を発揮するよう丹念に研究されることになる。実際、光の働きによって、食堂（ビストロ）クラブの生活についての情報が与えられるはずである」。

それゆえ、ここには、「社会的統合を容易にし、その統合のレベルにおいて小都市の魂が作り出されるようにする」発見が、きわめて示唆的な言葉で示されている。アルコールがないことは、それほど注目されることではないだろう。周知のように、フランスでは、徒党を組んだ若者たちは、すべてを破壊するのに、今もアルコールの助けを必要としない。東のフーリガン\*1 1たちの間ではアルコールの力は今でも非常に重要であるのに、〔フランスの〕黒ジャンパーたちは、フランスでポピュラーなアルコール依存の伝統とは手を切ったようである。また、合衆国の若者のようにマリファナやより強力な麻薬の使用にはまだ達していない。〔フランスの〕若者たちは、明確に区別される2つの歴史的段階の刺激物のあいだで、空虚への移行のなかに深く巻き込まれているが、それでも彼らは、われわれの描く世界や、そこで自分たちの空白を埋めにやって来る恐るべき見方に対するはっきりとした返答として、明確な暴力を示している。反乱の要因を除いて、労働組合の建築家の計画は一貫している。ガラスでできた彼らのクラブは、彼らが追求する名高い統合の一部である生産と消費を高度なやり方で監視するための補足的な管理装置たらんとしている。彼らがショーウィンドーの美に無邪気にも公然と訴えていることは、スペクタクルの理論によって完全に説明できる。つまり、アルコールのないバーのなかでは、消費される事物が他の魅力のないために自ら見せ物的（スペクタキュレール）となるしかないのと同じように、消費者自身が見せ物的（スペクタキュレール）になるのである。完全に物象化された人間は、物象化の望ましいイメージとして、ショーウィンドーのなかに身を置くのである。

システムに内在する欠陥は、システムが人間を完全には物象化しえないということである。それは、人間を行動させ、人間の参加を勝ち取る必要がある。さもなくば、物象化の生産も消費も停止してしまうだろう。したがって、支配的なシステムは、歴史と格闘している。そのシステムの強化の歴史であると同時にそれに対する異議申し立ての歴史でもあるような自らの歴史と格闘しているのである。

今日、ある種の見かけに反して、支配的な世界は、かつてないほど（総体としての異議申し立ての力を代表していた古典的労働運動が1世紀にわたって闘い、そのすべてが、伝統的なあるいは新しいタイプの指導者層によって2つの大戦の間に清算された後に）かけがえのないモデルを充実させ無限に拡張していることを根拠に、自らが決定的なものであると見せかけている。だが、この世界は、異議申し立てに基づいて初めて理解できる。もっとも、その異議申し立ても、全体的な異議申し立てである場合にのみ真理とリアリズムとを手に入れることができるのである。

文化、政治、生の組織化、その他のすべての行為のなかに認められる恐ろしいまでの考えの欠如は、そのことによって説明される。機能都市のモダニスト建築家の弱点は、その特にはっきりと暴露された例にすぎない。知の専門家は、専門家のゲームをする知性しか待ち合わせていない。そこから彼らの小心な順応主義と想像力の根底的な欠如が生まれ、彼らはそれによって、これこれの生産は、有益で、正しく、必要だと認めるのである。実際、欠如を想像する力を待たなけ

れば、すなわち、不在で、禁じられ隠されているが、現代生活においては可能であるものを理解できるようにならなければ、支配的な想像力の欠如の根幹も決して理解することはできない。

このことは、人々が自分の人生を手に入れる仕方と無関係な理論ではない。逆にまだ理論化されていない、人の頭のなかの現実である。ヘーゲル的な意味での「否定的なものとの共存」をかなり拡張して、この欠如を自らの主要な力、自らのプログラムとして明確に認める者が、眠りの壁も、生き延び〔=余分の生〕の策も、最後の審判の爆弾も、建築のメガトン爆弾も転覆できる唯一の積極的なプロジェクトを生み出すことができるだろう。

\*1：コンゴの革命的高揚 コンゴは、1960年6月30日、宗主国のベルギーからの独立を達成し、選挙によってカサヴブ大統領ルムンバ首相体制の共和国となった。独立を勝ち取ったコンゴ人たちは革命意識を高揚させ、首都レオポルドヴィルを中心として全土で、軍隊でのベルギー人将校に対する反乱（7月6日）や、労働組合のストが頻発した。ベルギー政府は一旦はコンゴの独立を認めたが、独立の勢いがベルギー人によるコンゴ全土の植民地支配そのものに向かうや、白人植民者の保護と称して、7月10日には降下部隊1万名を派遣した。ルムンバはこのベルギーによる主権侵害を国連に提訴し、国連安保理は国連軍の派遣とベルギー軍の撤退を決議した。だが、国連軍はコンゴ革命が南部アフリカ全体の革命に向かうことを阻止しようとする欧米諸国の意を受けてコンゴ人の革命運動を押しやる一方で、ベルギー植民地主義とその意を受けた反ルムンバ派の軍部を押しやることはできなかった。その後コンゴでは、ベルギー資本の権益を保護するベルギー軍に後押しされたチョンベによるカタンガ州の分離独立（7月11日）、軍部の反ルムンバ派クーデター（9月14日）、ルムンバの逮捕（12月1日）、殺害（61年2月13日）という経緯で、「コンゴ動乱」と呼ばれる紛争が泥沼のように続いてゆくのである。

\*2：キューバの革命的高揚 1956年12月のグランマ号のキューバ上陸から3年間の武装闘争の果てに、59年1月、革命政府を樹立したフィデル・カストロは、革命直後から米国ケネディ政権による経済的圧迫（禁輸措置）と米国に支援された亡命キューバ人組織の軍事的侵攻の試みに悩まされていた。61年4月には、プラヤ・ヒロンでの反革命軍の軍事侵攻を撃退し、アメリカ帝国主義の侵攻を退けたが、この勝利はキューバとラテンアメリカの革命運動に大きなインパクトを与え、キューバ国内の革命運動を高揚させるとともに、グアテマラ、ベネズエラ、ペルー、コロンビアなどの国での武装ゲリラ闘争を鼓舞した。しかし、一方、アメリカ帝国主義との闘争の過程で、カストロはキューバば社会主義体制化を進め、61年5月のメーデーで社会主義革命宣言を行い、7月にはキューバ国内のあらゆる政治的・軍事的その他の革命組織が結集して単一の統一革命党を結成することを宣言、翌62年3月には統一革命党全国指導部を発表する。

\*3：リステル将軍 エンリケ・リステル。1930年代のスペイン共産党の幹部・軍事指導者で、スペイン革命の際にソ連軍将校を側近に付けて第1旅団、後には第5連隊の最高司令官として戦った。革命初期の共産党によるアナルコサンディカリスト攻撃では、アラゴン防衛評議会解体の主導的役割を務めた。

\*4：バーリー・コモナー（1917-） 米国の植物学者、環境問題研究家。現代科学と巨大産業の発達が生態系を破壊する危険性に警告を発した。著書に『科学と人類の生存』（66年）など。

\*5：コンラッド・アデナウアー首相（1876-1976年） ドイツの政治家。戦後キリスト教民主党を創設し、その党首として、1949年から63年までの14年間ドイツ連邦共和国の首相を務める。その間、ドイツの西欧社会への復帰のための政治活動を行う一方で、ドイツ再軍備、NATO参加など軍事面でのドイツの復活に力を注いだ。

\*6：「コンスタンティーヌ計画」 国民投票によってアルジェリア問題での全権委任を勝ち取ったド・ゴール大統領が

、1958年10月3日、アルジェリアのコンスタンティーヌで発表したアルジェリア工業化のための5ヵ年計画案。40万人の新しい雇用、ムスリム農民への25万ヘクタールの土地の分配、本国並賃金への引き上げ、公務員への採用、ムスリムへの教育機関の新設などを含むこの計画は、それまでのフランス政府の植民地対策案と代わりばえのない宥和的な内容で、アルジェリアのフランス化を推進するものでしかなかった

\*7: ティラナ アルバニアの首都。アルバニアの政治経済の中心地で、17世紀初頭、トルコ軍の将軍スレイマン・パシャが建設。市街にはイタリア風の建築が多い。

\*8: ロシエ・ノワール アルジェから数キロ離れた海岸沿いの町。1960年、フランス政府は危険なアルジェを避けてこの町に新しい総督府を建設した

\*9: ジャニオ・クワドロス大統領 (1917-) サンパウロ市長、州知事を歴任した後、ブラジリア遷都後初の大統領選挙で都市住民の圧倒的な支持を得て1960年10月、大統領に選出される。だが、その左翼民族主義的ポプリズモに拠った近代化政策やキューバなど社会主義圏への接近が地主階級や軍部の反発を招き、61年8月にはクーデタを準備したとの理由で反クワドロス・キャンペーンにさらされ、辞任に追い込まれる。

\*10: ヴェルホヤンスク ロシア北東部極東シベリアのヤナ川に上流にある人口1800人の町。最低気温マイナス69・8度Cを記録し、地球上最も気温の低い町の1つに数えられる。

\*11: フーリガン ソ連や東側諸国で、反体制、反社会的態度をとる非行少年、不良のことを言う。そこから派生した言葉。現在では、サッカーなどの試合で暴れる青年たちを指すことが多い。

ここからの3つの論説——「悪しき日々は終わるだろう」、「S Iの役割」、「優先的コミュニケーション」——は、それぞれが密接に関係しながら、60年代のシチュアシオニストの理論の大衆性と、その運動論・組織論を考えるうえで重要な論点を提出している。

「専門家」や「知識人」のような偏った知ではなく「全知的な批判」を担う「新しいプロレタリアート」としての「大衆」、「情報の量」ではなく「情報の質」を握った者たちの「共同的な行動」としての「優先的コミュニケーション」——シチュアシオニストは、「スペクタクルの社会」を批判する自分たちの理論がそうした回路を通して大衆性を獲得することをこれらの三つの論説で主張する。このシチュアシオニストの理論の大衆性は、メンバーを精選し、メンバーに対して厳しい理論的かつ実践的な規律を課し、脱退と除名をいとわないシチュアシオニストの運動体としての組織論と一見矛盾するかに見える。シチュアシオニストは、後に、自分たちの組織は大衆組織ではないことを明確に表明し、次のように書いている。「S Iは大衆組織ではありえないし、型にはまった芸術的前衛集団のように弟子を受け入れることさえないだろう」。「S Iは〈平等者の陰謀〉〔バブーフの唱えた秘密結社〕、部隊を欲しない参謀部以外のものではありえない。重要なのは、新しい革命に通じる『北西の通路』を見出し、それを開くことである。この革命は大衆的な実行者を有することはないだろうが、これまで革命の衝撃から守られてきたこの中心地の上に、日常生活の征服の事業を嵐のように襲来させるに違いない。われわれは雷管だけを組織していた。自由な爆発は、われわれの手からも、他のどのようなコントロールからも永久に離れて起きるものであるにちがいない」（『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』第8号 「さまざまな国での反シチュアシオニスト作戦」）。

しかし、この組織の非大衆性は、S Iという組織が闘争のなかでスペクタクル的な観照の対象となり、指導し代表するレーニン主義的な前衛党として大衆の前に立ち現れないようにするための不可欠な仕組みである。「革命の教えのスペクタクル的な一方的な伝達は、スペクタクルの社会においてそのチャンスをすべて失った」（悪しき日々は終わるだろう）という認識を突き詰めて行くとき、シチュアシオニストにとって、自らの組織を、レーニン主義的な党派としての「前衛」とすることは決して認められないことだった。かといって、「前衛」の役割を清算するアナキストのような組織論もまた、歴史性を捨象した「絶対自由な個人」という幻想のなかにとどまるがゆえに、運動のダイナミズムのなかで何の力にもなりえない。理論と実践における「前衛」の立場を保持しつつ、それがスペクタクル化される芽をことごとく摘み取ること、それが「〈平等者の陰謀〉」、「部隊を持たない参謀部」という言葉で表されるシチュアシオニストの組織なのである。この組織の運動は、「弟子」を増やすことによって、ボルシェビキ的にその組織を拡大することには何の利点も見出さない。自らはごく少数の者たちの間で理論と実践を深化させつつ、他の場所で自分たちの理論を体現する運動を見出し、そこに自分たちの理論と実践を意識的に伝えること、自らは「雷管だけ」を組織し、「自由な爆発」が自分たちのコントロールも、他のどのようなコントロールも離れて起こることを追求すること、それが、シチュアシオニストのいう「共同的な行動」としての「優先的コミュニケーション」である。



## 悪しき日々は終わるだろう

スペクタクルの世界はその支配を広げるとともに、攻勢の頂点に達しているが、いたるところで新たな抵抗も引き起こしつつある。この抵抗はスペクタクルの攻勢と比べればけるかに知られるところが少ないが、それはまさに支配的スペクタクルの目的が、屈服をあまねく、すべての者を眠り込ませるようにして映し出すことにあるからだ。だが、そのような抵抗は現に存在し、次第に拡大しつつある。

先進工業国での青年の叛逆について、だれもが——大した理解なしに——語っている（本誌 第6号の「無条件の防衛」を参照のこと）。パリの『社会主義か野蛮か』誌や、デトロイトの『コレスポンドンス』誌のような戦闘的な雑誌は、労働における労働者の恒常的な抵抗（この労働の組織化に対する抵抗）や、労働組合主義——それは、労働者を社会に統合するメカニズムと化し、官僚主義的資本主義の経済装置において補完的な道具と化してしまった——からの離反や非政治化に関する多くの事実を集めた資料的成果を発表している。階級対立という古びた定式は不十分であることが明らかになり、あるいはまた、たいていの場合、その定式は既存秩序への参加へと完全に方向転換してしまったことを暴露するだけであることがわかるにつれて、押しとどめることの不可能な不満が地下で広がり、豊かな社会の建物の基盤を掘り崩している。マルクスが『ヨーロッパのプロレタリアートへの祝杯』で語っていた「老いたるモグラ」は相変わらず前進し、幽霊はテレビ化された現代のエルスナー城\*1の隅々に再び姿を現している。この城に立ちこめる政治の霧は、労働者評議会が存在し指揮する一瞬の間だけ晴れるのである。

古典的なプロレタリアートの最初の組織は、18世紀末と19世紀始めに、労働から人々を除去する生産機械を破壊することをめざした孤立した——「犯罪的な」——行動の時代に先立たれていた。それと同様に、今、われわれが眼にしているのは、それに劣らず確実にわれわれを生から除去する消費機械に対する破壊行動（ヴァンダリズム）の波の最初の出現である。当時も今も、もちろん、破壊それ自体に価値があるのではなく、価値は不服従のなかにある。この不服従は、やがて、積極的な企図に変化し、人間の現実的能力を増大させる方向に機械を再転換するまでになるだろう。ここでは青少年の群衆による掠奪については触れず、労働者の行動をいくつか挙げよう。それらは、古典的な要求という観点からはほとんど理解不可能なものである。

1961年2月9日、ナポリで、夕方、工場から出てきた労働者はいつも自分たちを運んでくれている路面電車がなくなること気がついた。運転手——その何人かは解雇されたところだった——が抜き打ちストを始めたのである。労働者らは、ストを行っている運転手に連帯の意を表して鉄道会社の事務所に向かってさまざまな物を投げ、そのうちに火炎瓶まで投げ始めたために路面電車の駅の一部に火がついた。やがて彼らはバスにも火をつけ、警官と消防隊員と衝突し、それを突破した。数千人の労働者が街中にあふれ、ショーウィンドーやネオンサインを壊した。夜には、秩序を回復するために軍隊の出動を要請せねばならなくなり、ナポリの街を装甲車が往き来した。この示威行動は、全体としては即興的に行われ目的も欠いたものであったが、明らかに、余分な〔＝マージナルな〕通勤時間に対する直接的叛逆である。この通勤時間というものは、現代の都市における賃金奴隷の時間をそれほどまでに重苦しく増やしているのである。この暴動は、偶然の出来事に付随して爆発したものだが、やがて（南イタリアの伝統的貧困状態の上に

新しく張り付けられた)消費社会の生活の場(デコール)全体に広がり始めた。そこではショーウィンドーとネオンサインが、野蛮な若者たちの示威行動の際にも見られるように、消費社会の最も象徴的な場であると同時に、最も脆い場でもある。

8月4日、フランスで、ストライキ中のメルルバック\*2の炭鉱労働者たちは、役員事務所の前に停めてあった21台の車を壊した。それらの自動車のほとんどが炭鉱で雇われている者、したがって炭鉱労働者と非常に近い立場の労働者の自動車だったと、誰もが愚かにも主張している。だが、そこに、搾取されている者の攻撃性を常に正当化する多くの理由を見るだけでなく、それに加えて、消費の疎外を引き起こす中心的事物に対して彼らが行った防衛の身振りをなぜ見ないのだろうか。

リエージュのスト参加者が、1961年1月6日、日刊誌『ラ・ムーズ』の印刷機の破壊を試みた時、彼らは敵に握られた情報設備を攻撃することで彼らの運動の意識の1つの頂点に到達した(最も広い意味での情報伝達の手段は、政府機関と社会主義的官僚的組合指導者とのあいだで共有され、完全に独占されていたため、それを攻撃することこそがまさにこの衝突の決定的に重要なポイントだった。それは、かつて1度も取り除かれたことのない障害であり、「自然発生的な(ソヴァージュ)」労働者の闘争が権力の掌握をめざすことを妨げ、それゆえ、そうした闘争が消え去ることを余儀なくさせているものなのである)。去る2月9日に〈フランス国営ラジオ・テレビ局〉のジャーナリスト・技術者組合が出した次のコミュニケは、そのプロパガンダにおけるド・ゴール主義的な不器用な誇張に依拠しているせいで、〔リエージュのストよりも〕興味の点では劣るが、それでも1つの兆候として取り上げるに値する。

「われわれの同志である技術者とレポーターは、水曜日の夜、ルポルタージュを行うためにデモの現場にいたが、RTF〔フランス国営ラジオ・テレビ局〕のマークを見た群衆に襲われた。これは重大なことである。それゆえ、SJRT〔「ラジオテレビジャーナリスト組合」と思われる〕とSUTはここに、われわれの同志である技術者およびレポーターの生活は彼らの報告を尊重することにかかっていると、今一度厳粛に断言する正当な理由のあるものと判断する(……)」。思想操作を行っている勢力に対して具体的な反対を開始している前衛的反応とは別に、非常に戦闘的な労働者の行動の内部にまでこの思想操作が入り込み成功を収めていることもまた、もちろん考慮に入れなければならない。たとえば、今年の始め、ドウカズヴィル\*3の炭鉱労働者は、自分たちの代表として20名を選び、彼らにハンガーストライキを行わせた。彼らは、見せ物という敵の地平に立って演技するこの20名のスターにすべてを任せて、みんなの同情を引こうとしたのである。その結果、彼らはひどい敗北を喫した。というのも、〔彼らが勝利する〕唯一のチャンスは、彼らが生産を阻害しそれを赤字に追い込んでいる部門だけでなくその外にまで、いかなる犠牲を払っても彼らの集団的な介入を拡大することだったからである。資本主義による社会の組織化は、その副産物というべき反対勢力と同様、議会と見せ物の観念をあまりにも広くまき散らしたため、革命的な労働者もしばしば、代表=表象というものは不可欠なもの——些細なことについて、ごくわずかな機会に——だけに常に限らねばならないということ、忘れてしまうこともあったのである。だがまた同時に、無知蒙昧化への抵抗は、労働者だけが行うことではない。ベルリンの俳優のヴォルフガング・ノイスは、何週間にもわたって大衆

の熱狂的になっていたテレビの刑事ドラマで誰が犯人かを、去る1月、『デア・アーベント』紙の短信を通じて暴露し、意味深いサボタージュを行った。

古い世界の組織全休への初期の労働運動の攻撃はもうずっと以前に終わりを告げ、今後、それを活気づかせることのできるものは何もないだろう。その攻撃は失敗したが、巨大な成果を獲得しなかったわけではない。ただ、その成果が当初めざした成果ではないだけだ。確かに、部分的に予期せぬ成果へのこの逸脱は人間の行為の一般的規則ではあるが、その規則からまさに革命的行動の瞬間、全てか無かという質的飛躍の瞬間だけは除外せねばならない。古典的な労働運動の研究を曇りのない眼で再開せねばならない。そして何よりもまず、そのさまざまな種類の政治的、あるいは疑似理論的相続者について曇りのない眼で検討を加えねばならない。というのは、これらの相続者はかつての運動の失敗の遺産しか所有していないからである。この運動の外見的な成功とはその根本的失敗（改良主義や国家的官僚主義による権力の掌握）であり、その失敗（パリ・コムューンやアストゥリアスの叛乱\*4）こそが、今までのところ、われわれのためにも、将来のためにも聞かれている失敗なのである。この問題を時間のなかに明確に位置づけなくてはなるまい。古典的な労働運動は、インターナショナルが公式に設立される20年ほど前、1845年に、マルクスとその友人がブリュッセルから組織したいくつかの国々のコムニスト・グループの最初のネットワーク\*5が生まれたときに始まると考えられる。そして、それは、スペイン革命の失敗の後、すなわち1937年5月のバルセロナでの歴史に残る日々\*6のまさに翌日に完全に終わったと考えられる。

この時間の枠のなかに、あらゆる真理を再び見出し、革命派内のあらゆる対立と無視された可能性を再検討しなければならない。その際に、ある者が別の者より正しく、運動を支配したという事実にはもはや眼を奪われてはならない。なぜなら、彼らが勝利を得たのは全休としての失敗の内部でのことにすぎないことをわれわれは知っているからだ。再発見すべき最初の思想はもちろんマルクスの思想である。このことは、マルクスに関する現存する資料と膨大な量の虚言とを照らし合わせれば依然としてたやすいことである。だが同時に、第1インターナショナル内のアナキストの立場、ブランキ主義、ルクセンブルク主義、ドイツとスペインの評議会運動、クロンシュタット\*7やマフノ主義者\*8なども再考せねばならない。ユートピア社会主義者の実際の影響も無視できない。これらはみな、もちろん、大学特有の折衷主義や銜学趣味の目的で行われるのではなく、新たな革命的運動の形成に資する目的でなされねばならない。この革命的運動の先駆的な兆しはここ数年来われわれが数多く眼にしているが、われわれ自身もまたこの先駆的兆しの1つである。このような革命運動は、従来のものとは根本的に異なるものになるだろう。われわれは、これらの兆しを古典的な革命の企図の研究によって理解するとともに、逆にこれらの兆しの研究を通して古典的な革命の企図を理解せねばならない。そして、これほど見事に隠され歪められてきた歴史の運動そのものの歴史を再発見せねばならない。

そのような試みを通して初めて、そしてまた、その試みに全体的に結びついた芸術的探究グループのいくつかの中でのみ、魅力的な行動——現代社会とそこに込められた可能性に客観的に興味を抱くことを可能にする何か——が姿を現してきたのである。

革命の問題を最も高いレベルで再発明すること以外に、過去のわれわれの同志の行動を裏切らず、それを理解する方法はない。この革命の問題は事実のなかに重々しく提示されているだけ

にいつそう観念の領域からは引き離されてきた。だが、なぜこの再発明がそれほど困難に見えるのだろうか。それは、自由な日常生活の経験（すなわち日常生活における自由の探究）から出発すれば困難ではない。この問いは、今日、若者のあいだにかなり具体的に感じ取れるとわれわれには思える。そして、それを十分な要求とともに感じ取ることによってまた、失われた歴史を訴えとして判断し、救出し、再発見することができるのである。この問いは、既存のあらゆるものを疑問視する役目を負った思考にとっては困難ではない。哲学をほとんどすべての哲学者のように——放棄せず、芸術を——ほとんどすべての芸術家のように——放棄せず、今現に存在する現実への異議申し立てを——ほとんどの活動家のように——放棄しなかったというだけで十分である。その特、これらの問題〔哲学、芸術、異議申し立て〕は相互に関連し合い、同じ一つのものとして乗り越えられるようになるだろう。ただ専門家だけが——その力は専門に基づく社会の力とともに長持ちしているが——、自分たちの機能の積極的な用益権を保持するために自らの専門領域の批判的真理を捨て去ったのだ。だが、現実の探究のすべては、現実の人々が一つに集まり自分たちの前史から今一度脱け出そうとするように、1つの全体性の方に合流しつつある。

プロレタリアートは解体したとか、労働者は今では満足しているとか言って、革命の新たな出発を疑う者もいる。これの言わんとすることは、次の2つのどちらかだ。1つは、彼ら自身が満足しているということであり、その場合、われわれは容赦なく彼らを叩きのめすだろう。もう1つは、彼らが他とは切り離された労働者のカテゴリー（たとえば、芸術家という労働者の）のなかにすっかり収まっているということ、その場合にはわれわれは、新しいプロレタリアートはほとんど誰をも包摂しつつあるということを示して、その幻想を打ち砕くだろう。

同様に、植民地化された、あるいは半植民地化された国々の叛乱の動きに関して黙示録的な不安や希望が語られるが、それらは、革命の企図は先進工業国内部で実現されねばならないという中心的事実を無視している。それが達成されない間は、低開発地域でのすべての運動は中国革命——その誕生には古典的な労働運動の清算が伴っていた——というモデルに従うことを強いられるように思われる。中国革命はその後も生き延びたが、その全過程はそれが彼った変質に支配されてきたのである。被植民地国の運動は、官僚主義的な中国という極に引き寄せられてはいるものの、それでもやはり、そうした運動が存在しているということによって、均衡した二大ブロックの外部での衝突における不均衡が産み出され、それらのブロックを指導し所有する者どうしの間でのいかなる世界分割も不安定にしている。だが、マンチェスターや東ベルリンの工場の中にいまだに存在する内的不均衡もまた、地球を舞台にしたポーカーの賭け金の保証を危うくしているのである。

古典的な労働運動の制圧（この運動の力を国家警察に転倒してしまった歴史の奸計によって）の後、ひっそりと生き残ってきたマイノリティーの叛乱は、その運動の真理を救出したが、それは過去の抽象的な真理としてにすぎなかった。力に対する彼らの称賛すべき抵抗は、中傷にさらされた伝統を今日まで守り続けることができたが、新しい力へと自らを再投資することはできなかったのである。新しい組織を形成できるかどうかは、より深い批判、行為に移される批判をできるかどうかにかかっている。イデオロギーと完全に縁を切らねばならない。というのも、革命集団が自分たちに自らの役割を保証する積極的な資格があると考えるのは、まさにこのイデオロギーというものにおいてであるからだ（つまり、イデオロギーの役割についてのマルクスの批

判をやり直さねばならない)。それゆえ、専門化された革命の活動の場——政治的真剣さという自己瞞着の場——を去らねばならない。なぜなら、この専門的活動を所有することによって、どんなに優れた者も他の問題すべてにおいて愚かな意見を吐くことを助長されるからだ。その結果、彼らは、われわれの社会のそれ以外のグローバルな問題と切り離せない政治的闘争それ自体においても成功のチャンスをすべて失うのである。専門化と擬似的な真剣さこそは、まさに、古い世界の組織が人々の精神のなかに植え付ける第1の防衛策の一つである。新しいタイプの革命的結社はまた、メンバーが闘争参加回数で計ることのできる参加を活動家から与えられるのを待ち受ける——それは労働時間の量的な基準という、支配社会において唯一可能なコントロールを受け継ぐことに等しい——のではなく、メンバーに真の創造的な参加を許し、それを要請するという点でも、古い世界とは縁を切るだろう。万人の情熱的なこの参加の必要は、古典的な政治を行う活動家、すなわち「献身的な」責任者が古典的な政治そのものとともにあらゆる場所で消え去っているという事実に、さらには、献身と犠牲は常に権威（純粋に道徳的な権威であろうと）的に払われるという事実によく示されている。退屈は反革命である。いかなる仕方でもそうなのだ。

かつての政治の、偶然ではなく根本的な失敗を認めるグループは、新しい生活様式——新しい情動——の例を自ら示すことができ初めて、自分たちに恒久的なアヴァンギャルドとして存在する権利があるということを認めねばなるまい。周知のように、この生活様式の規準にはどこもユートピア的なところはない。そのような規準は、古典的な労働運動が出現し、高揚しつつあった時にどこでも眼にすることのできたものである。われわれは、これからの時代に、この規準が19世紀の場合と同程度に進展するだけでなく、それよりずっと深い進展を見るだろうと考えている。それができなければ、これらのグループの活動家は、まったく生彩のないプロパガンダ集団になってしまい、全く正しく全く基本的な概念をただひたすら唱えるだけで、それに耳を貸す者はほとんどいないだろう。組織内部の生活においてであれ、外部へ向けてのその活動においてであれ、革命の教えのスペクタクル的な一方的伝達は、スペクタクルの社会においてそのチャンスをすべて失った。このスペクタクルの社会というものは、〔現実の物とは〕まったく別の物のスペクタクルを大量に組織すると同時に、スペクタクル総体に対する憎悪の念を自ら掻き立ててもいる。したがって、この専門化されたプロパガンダには、大衆が実際の闘争を余儀なくされている時に、折良く行動に移り、それを助ける機会はほとんどないだろう。

貧者の社会的戦争を再び活気づかせるために19世紀の貧者の社会的戦争とはどのようなものであったのかを思い起こさねばならない。貧者というこの言葉はいたるところ、歌のなかにも、古典的な労働運動の目的のために行動した人々の宣言のなかにもあった。S IとS Iに収斂するいくつもの道をいま歩んでいる同志たちの最も緊急の作業の1つは、新しい貧困を定義することである。確かに、ここ数年間のアメリカの社会学者の何人かは、この新たな貧困状態の報告に対して、前世紀の労働者の行動を眼にした最初のユートピア的博愛主義者と同じように振る舞っている。悪は示された。だが、観念論的で人為的なやり方でだ。なぜなら、唯一の理解は実践のなかにある以上、敵と闘うことによってしか敵の本性を真に理解することはできないからだ（例えば、黒ジャンパーの攻撃性を思想の平面にもたらすためのG・ケラーとR・ヴァネーゲームのプ

プロジェクトが位置づけられるのはこの地平においてである）。

新しい貧困の定義は新しい豊かさの定義なしには進まない。支配社会がまき散らしているイメージ——それによれば、社会は利益の経済から欲求の経済に（おのずから、また改良主義が認めうる圧力の下で）進化してきたらしいが——に、欲望の経済を対置せねばならない。この欲望の経済とは、次のように言い表すことができる。すなわち、技術によって何をなしうるかについての想像力を有した技術社会である。欲求の経済は習慣という言い方で改竄されている。習慣とは、欲望が（達成され、実現されることで）欲求にまで墮落する——すなわち、確実なものとなり、客観化され、欲求として普遍的に認められるということでもある——自然の過程である。しかし、今の経済は習慣の偽造に直接取り組み、人々から欲望を取り除くことによって、欲望のない人々を操作している。

世界に対する偽の異議申し立てとの共謀は、その世界の偽の豊かさとの共謀と（それゆえ、新しい貧困の定義からの逃亡と）切り離すことができない。このことは、『レ・タン・モデルヌ』誌\*9第188号のサルトル派のゴルツ\*10において非常に顕著である。彼は（実際、あまりぱっとしないジャーナリストの仕事によって）この社会の財産が自分に奮発されるようになったことは迷惑だと告白している。その社会の財産とは、彼が恭しく言うところでは、タクシーや旅行のことであり、この時代においては、タクシーは誰にとっても義務と化した大量の車の後を走らねばならず、旅行は、この地球のどこに行っても、大量にコピーされた永遠の疎外の同一の退屈なスペクタクルにわれわれを連れて行くだけである。同時に、彼はユーゴスラヴィア、アルジェリア、キューバ、中国、イスラエルといった唯一の「革命的世代」の「青年期」に熱中する——サルトルがかつて「ソ連邦での完全な批判の自由」に熱中したように。他の国は年老いた、とゴルツは述べて自分自身の虚弱さの言い訳をしている。こうしてゴルツは、これらの「青年期」のそれぞれの国の内部において不可欠だけでなく、全員が年寄りでも、誰からも姿を認められるわけでもなく、全ての叛逆がゴルツ的であるわけでもないわれわれの国においても不可欠な革命的選択の責任を放棄しているのである。

今、フージェロラス主義\*11——それは、周知のごとく、マルクス主義を自分のなかに含み持つことによってマルクス主義に取って代わった最後の教義であるが——はマルクスが予告した共産主義社会が存在するとすれば、それは産業的生産社会の後にしかありえないように思っていたが、大きな歴史的発展段階は生産様式の変化によって既にしるされていたのではないかと不安を抱いている。フージェロラスは学校に入り直すべきである。やがて来る次の社会の形態は、産業的生産に基づいたものではない。それは、実現された芸術の社会である。「われわれの社会のなかで胚胎される絶対的に新しい生産のタイプ」（『問題のマルクス主義』84ページ）とは、状況の構築であり、生の出来事のな構築なのである。

\*1：エルスナー城 エルスナー（ヘルシングエーア）はデンマークのコペンハーゲン北方45約キロにある港町。1577年から1585年に建設されたクロンボア城があり、その城をシェイクスピアがハムレットの舞台としたことで有名である

\*2：メルルバック フランス北東部モーゼル県の炭鉱都市。現在は合併してフレミン＝メルルバック市

\*3: ドゥカズヴィル フランス内部アヴェイロン川流域の炭鉱都市。19世紀にこの地方で炭田を発見し鉱山開発を行ったドゥカズ公爵に由来。当時からたびたび炭鉱ストが起こったことで知られる。

\*4: アストゥリアスの叛乱 1934年10月、スペインのアストゥリアスの鉱業地帯での左翼叛乱。10月4日、急進党のアレハンドロ・レラーが組閣した内閣にファシスト的右翼諸党派の連合体であるCEDA（スペイン自治権同盟）が入閣することに抗議して、社会党がゼネストを呼びかけた。スペインの他の地域でのストは失敗したが、アストゥリアス地方だけは例外で、アナキストや共産党も支援する鉱山労働者のストが2週間にわたって戦闘的なストを展開するが、政府によるモロッコ兵部隊と外人部隊の投入によって多大な犠牲（逮捕者数千名、死傷者数百名）を払って、壊滅させられた。この叛乱は、1936年からのスペイン革命と内戦への本稽古と見なされている

\*5: 1845年〔……〕コミュニスト・グループの最初のネットワーク 1845年1月、プロイセンの圧力を受けたフランス・ギゾー内閣によってフランスを追放されたマルクスはベルギーのブリュッセルに行き、1848年2月革命の勃発によって逮捕・追放されるまでの3年間、そこで活動する。この時に彼は、『哲学の貧困』（47年）、『ドイツ・イデオロギー』（45-46年）などを書くとともに、共産主義者同盟に参加してその宣言『共産主義者宣言』（48年）を作成した。「コミュニスト・グループの最初のネットワーク」とは、この共産主義者同盟のことを指す

\*6: 1937年5月のバルセロナでの歴史に残る日々 1936年7月に勃発したスペイン革命の最終局面でおきたバルセロナ5月事件のこと。5月3日、アナルコサンディカリストの全国紙織でスペイン革命の主力であったCNT（全国労働連合）が占有していた中央電話局を、コミンテルンに加盟した共産党主導の社会主義統一組織PSUC（カタルニア統一社会党）の部隊が急襲し、これ以降、数日にわたってバルセロナ中で両者の間に激しい武力衝突が繰り返された

\*7: クロンシュタット クロンシュタットは旧ソ連の軍港。1917年、クロンシュタットの水兵たちは巡洋艦〈オーロラ〉号に支援されて、ケレンスキー内閣への叛乱を行った

\*8: マフノ主義者 ネストル・マフノ（1889-1935年）はパリに生まれたウクライナ人アナキスト。1917年にロシア革命が起こると、ウクライナ南部の農民を組織し、ドイツ・オーストリアの占領軍と白軍に抗して闘ったが、その後、マフノの率いるウクライナ・アナキストはトロツキーから反革命規定され、赤軍に鎮圧された。マフノ自身は1921年、ルーマニア、次いでパリに亡命した。マフノ主義者は、農民の独立した運動、ゲリラ戦の先駆として評価される。

\*9: 『レ・タン・モデルヌ』誌 1945年、サルトルが、メルロ＝ポンティ、ボーヴォワールらと共に創刊した雑誌。実存主義左翼知識人の結集軸としてクロード・ルフオール、フランシス・シャンソン、アンドレ・コルツ、クロード・ブルデラら多数が協力した。

\*10: アンドレ・ゴルツ（本名ジェラルド・オルスト 1923-） オーストリア生まれのフランスの作家・思想家。『レクスプレス』誌（1955年から64年）や『ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』誌などのジャーナリストをしつつ、60年の『レ・タン・モデルヌ』の創刊以来、サルトルとともにその共同編集者として活動。70年代にはエコロジー運動にも関わった。代表的著書に『裏切者』（58年）、『歴史の教訓』（59年）、『エコロジーと政治』（75-79年）など。

\*11: フージェロラス主義 ピエール・フージェロラスは『アルギュマン』派の知識人。1958年11月発行の11号から同誌の編集委員に加わり、それ以降、62年の廃刊まで、「マルクスから我々へ」（第12-13号）、「世界化に関するテーゼ」（第15号）、「官僚主義とテクノクラシー」（第17号）などマルクス主義や官僚主義、テクノロジーの問題などについての論文を頻繁に発表している。著書に、アンリ・ルフェーヴルとの共著で『コスタス・アク

セロスの遊戯』(1973年)などがある。

われわれは完全に大衆的である。われわれが考察の課題とするのは、全大衆のなかで未解決におかれた問題だけである。シチュアシオニストの理論は、さながら水の中の魚のごとく人民の中にある。S I が思弁の砦を構築していると思っている人々には、われわれは、反対に次のように断言しよう。われわれはまさに、刻一刻われわれの計画を身をもって経験している——もちろんそれは、まずもって欠如と抑圧という形態における経験であるが——大衆の中に溶解せんとしているのである。

このことが理解できなかった人々は、われわれのプログラムをあらためて検討しなければならない。『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌は、乗り越え作業の暫定的報告を公表するものであり、どのように第1号を読み始めるべきだったのかが、最新号を読んだあとでわかるという、そうした体の雑誌である。

さまざまな専門家は、それぞれ自分が知や実践の何がしかの領域を掌握しているという錯覚に自惚れているが、われわれの全知的な批判を免れる専門家などいない。われわれは、自分たちにまだどれほど手段が欠けているかを承知している。それはまずもって、われわれの情報不足である（重要な資料があるのにそれを利用できない場合もあれば、われわれの考える最重要問題に関して資料が何1つ存在しない場合もある）。とはいっても、技術官僚支配（テクノクラシー）の屑どもにも情報が欠けていることを忘れてはならない。この屑どもが、彼らなりの基準で最も広範な情報をもっている分野でさえ、それはわれわれを否定するのに必要な情報の10パーセントにも満たない。しかも、彼らがわれわれを否定することは単なる形式的な可能性である。というのも、支配層の官僚たちは、その本性からして、情報の量において大したものを得ることはできないからである（官僚たちは、労働者がどのように働き、人々が現実にとどのように生きているかなど知るよしもない）。というわけで、官僚には、情報の質に追いつくことなど期待できない。逆に、われわれに不足しているのは情報の量だけであり、将来、われわれはこれをも手に入れることだろう。というのも、われわれは情報の質を手にしてからであり、これは今からすでに、われわれの手中にある情報の量に乗ずる冪数として機能するからである。この例は、過去の理解についても拡張することができるだろう。つまり、われわれは、歴史家たちのような学識をほとんど持たなくても、過去のいくつかの時代を掘り下げ、再評価することができるのを自負している。

すべての専門家が知っている生（なま）の事実、現状のかたちでの現実の組織化を否認し（たとえばサルセル\*1の装飾やトニー・アームストロング＝ジョーンズの生活様式）、それにすぐさま手厳しい批判を加える。ずっと以前から金で雇われてきた専門家たちは、あらゆる現実が示しているこうした事実を、誰も表現＝代表しないことに喜んでい。専門家たちよ、慄えるがよい。専門家の時代は過ぎ去った。われわれは彼らを打ち倒し、同時に、彼らを庇護してきたあらゆるヒエラルキーを打ち倒すだろう。

われわれは、さまざまな専門分野のそれぞれに異議をさしはさむことができる。われわれは、いかなる専門家をも、そのただ1つの分野の支配者たるがままにはさせない。われわれには、人々が算定し、計算する際のその諸形式にたいして暫定的な操作を行う準備ができてい。われわ

れにそれができるのは、そうした計算に必然的に含まれている、そ江自体計算可能な誤謬の幅を知っているからである。かくしてわれわれ自身、われわれがその誤りを知っているカテゴリーの使用によって惹き起こされる誤謬のファクターを、われわれの結果から減少させることになる。われわれはそのつど、容易に鬭争の舞台を選ぶことができる。今日、テクノクラシーの思考がそこに収斂する「モデル」（完全なる競争であれ、完全なる計画化であれ）に別の「モデル」で対抗すべきであるとすれば、われわれの「モデル」は、完全なるコミュニケーションである。これをユートピアなどとは言わないでほしい。これはひとつの仮説として認めなければならない。もちろんそれは、現実にそのまま実現されることなどありはしない。それは他の仮説にしても同じことだ。しかし、不可逆的な表現としてのポトラッチの理論によって、われわれはそれを補完するファクターを自ら所有している。もはや「ユートピア」は可能性としてあるのではない。というのも、それを実現するためのすべての条件は、現にすでに存在しているからである。それは現在の秩序を維持するために横領されているのだ。この秩序の不条理さたるや実に甚だしいものなので、人々はその代価のいかにかわからず、まずもってこのユートピアを実現するが、事後的にでさえ、誰一人としてその理論を定式化しようとしないのである。これは抑圧の逆ユートピアである。それはすべての権力を意のままにするが、誰もそんなユートピアなど望んでいない。

われわれは、「疎外の正の極」についても負の極についてと同じばし正確に研究を行っている。富の貧しさに関する診断の帰結として、われわれは貧困についての限りなく豊かな世界地図を作成することができる。新しい地形を雄弁に示すこうした地図こそは、「人間的地理学」の最初の成果となろう。そこには、石油鉱床の代わりに、まだ利用されていないプロレタリア意識の広がりを見取り図が描かれるだろう。

こういうわけであるから、われわれと無力な知識人世代との関係の一般的基調は容易に理解できるだろう。われわれはどんな妥協もしない。われわれと同じように自発的に考える犬衆のなから、知識人のほぼ全員を排除する必要があるのは明らかである。これら知識人とは要するに、今日風の思想を賃借りし、それで自分を思想家だと考えてきつと満足しているような連中である。彼らは、あるがままの自分を、つまり無力なものとしての自分を受け入れ、ついで思想一般の無力を云々する（まさに知識人に捧げられた『アルギュマン』誌第20号\*2の編集委員たちの道化ぶりを見よ）。

共同行動の最初から、われわれの立場は明確であった。しかし、われわれの動きが非常に重要なものとなった今、どうでもよい相手と議論する必要などもはやない。われわれの支持者はいたるところにいる。そして、われわれは、彼らを失望させる気など毛頭ないのだ。われわれがもたらすもの、それは剣である。

意味のある対話者たりうる人々についていえば、彼らには、われわれと無害な関係など持ちようが無いことを承知しておいてもらいたい。われわれは決定的な転回点に立っており、自らの誤謬の率がどれだけかは知っているが、それでも、それら同盟者たる可能性のある人々に包括的な選択を強いることはできる。われわれを全体として受け入れるか、拒絶するかのどちらかを選択せねばなるまい。われわれは細かい議論はしない。

こうした真実を告げたからといって何も驚くことはない。驚くのはむしろ、世論調査の専門家たちが皆、多くの事柄について湧き上がるあの正当な怒りがどれほど近づきつつあるかを知らないことだ。ある日、這築家たちがサルセルの街で追い立てられ縛り首になるのを目にしたら、彼らはまったくびっくりするだろう。

多かれ少なかれ、来るべき異変の必然性を理解した他のグループにみられる欠点は、その肯定性である。これらのグループは、芸街上の前衛あるいは新たな政治組織たらんと試みながらも、皆、古い実践から何かを救わねばならないと考えて、道を外れてしまう。

性急にポジティブな政治組織を目指す人々は、古い政治に全面的に依存したままそれを行ってしまう。同様に、多くの人々がシチュアシオニストにポジティブな芸術となることを促した。われわれの強みは、決してそうしたことをしなかった点にある。現代文化におけるわれわれの支配的な位置をかつてなく適切に示しているのは、イエーテボリの大会で採択された次のような決定である。それは、現在の枠組みの中でS Iのメンバーが製作する一切の芸術作品を、今後は反シチュアシオニスト的なものと呼ぶという決定である。これら芸術作品は、現在の枠組みを破壊することと強化することに、同時に貢献することになるのである。

文化の中でわれわれが擁護する解釈は、単なる仮定のように見なされるかもしれない。われわれはこの解釈の真なることが実際に検証され、早々に乗り越えられることを期待している。だがいずれにせよ、この解釈は、次のような意味で、厳密な科学的検証の本質的諸性格を有している。すなわち、この解釈は、他の者には首尾一貫せず説明不可能な——それゆえ別の諸力によって隠蔽されることさえある——一定数の現象を説明し、秩序づけることができるのであり、また、後々制御可能となるいくつかの事実を予測することを可能ならしめる、ということである。われわれは、文化なり人文科学と呼びならわされている分野で、どんな研究者のものであれ、いわゆる客観性などというものに一瞬も惑わされたりはしない。反対に、客観性は、解答と同じだけの問題を隠蔽するのがお決まりである。S Iは、隠されたものを暴露しなければならないし、敵たちによって「隠された」可能性としてのS Iそのものを暴露しなければならない。われわれは、——他の人々が忘却することを選んださまざまな矛盾を際立たせながら——これを成功裡に成し遂げ、ドゥボール、コターニィ、トロッチ、ヴァネーゲームによって起草された「ハンブルグテーゼ」\*3（1961年）が予見したような実践的な力へと自らを変貌させるだろう。

S Iのプロジェクトは、さまざまな行為、そして想像的なもののなかに完全なる自由を具体化することである。というのも、現存する抑圧のもとで自由は想像するのも容易ではないからだ。というわけで、われわれは、万人の内にある最も奥深い欲望に同一化し、それに最大限の放将さを与えることによって勝利を手にするようになるだろう。現代の広告における「勤機づけの探求者」たちは、人々の潜在意識にモノへの欲望を見いだしている。われわれは、唯一、生を束縛する桎梏を粉碎することへの欲望だけを見いだすだろう。われわれは、圧倒的多数派の中心観念を代表している。われわれの第1原理は、議論の余地なきものでなければならない。

\*1：サルセル パリ郊外北部のニュータウン。1958年から1961年にかけて、パリ周辺では初めての大規模な団

地が建設されたが、多くの批判を巻き起こし、問題のあるベッド・タウンのシンボルとなった。

\*2: 『アルギュマン』誌 第20号 1960年第四四半期に発行された『アルギュマン』誌第20号は「知識人」の総特集号で「思想家と知識人」、「知識人の危機」の小見出しの下にハイデガーの「思考の原理」やロラン・バルトの「作家と書く人」、モランの「知識人——神話の批判と批判の神託」、フージェロラスの「知識人（アンテレクチュエル）」という語」などの論文を掲載している。

\*3: 「ハンブルク・テーゼ」 1961年9月の初め、ドゥボール、コターニィ、ヴァネーゲムが、イエーテボリでのS I第5回大会合の帰路に立ち寄ったハンブルクのとあるバーで行ったS Iの理論と戦略に関する議論の結論のこと（トロッチは、その場に同席せず、後に意見を加えた）。ドゥボールが1989年に発表した「1961年9月のハンブルク・テーゼ（シチュアシオニスト・インターナショナルの歴史に役立てるためのノート）」によると、このテーゼは、S I外への流出に対する危惧から、文書としては残されず、署名もなされなかったが、S Iのその後の方向を決定する重要な役割を果たした。テーゼ自体の内容は豊かで複雑なものだったが、その要点は、「S Iは、今や、哲学を実現しなければならない」という文章に尽きる。

権力の問題は、社会学および文化の諸理論では、とても巧みに隠蔽されているので、この分野の専門家たちは、コミュニケーションあるいは現代社会におけるマス・コミュニケーションの手段について何千ページもくだらないことを書き並べながら、彼らの言うコミュニケーションが、コミュニケーションの消費者が何ら応答することのない一方通行のコミュニケーションであることは決して指摘しない。このいわゆるコミュニケーションなるものには、厳格な職務の分割がある。この分割は、結局のところ、産業社会における時間（この時間こそが労働と余暇の全休を統合し、それに形を与えている）の組織者と消費者との間のより一般的な分割と一致する。このレベルで自分の生に及ぼされている圧政を不快に感じない者は、現代社会を何1つ理解できず、それゆえ、この社会の社会学的大壁画の組描にはうってつけである。一方、地球規模で統一化されたマス・メディアを通じて大衆を訓育し、同時に「高級文化」を「大衆化する」マス・カルチャーを前に、憂えたり驚嘆したりする人々は、およそ文化などというものは、たとえ高級文化であれ、その叛逆や自己破壊の表明まで含めて、いまや博物館に埋葬されてしまったのだということを忘れてにすぎない。そして、大衆はといえば——われわれは皆、結局この大衆に属する——は、生の外に（生への参与の埒外に）、自由な行動の外に留めおかれている。すなわち、スペクタクルの様式の上に転属された状態にあるわけだ。現代の掟は、皆ができるだけ多くの無を消費することにある。元来の意味から完全に切り離された古い文化の莫大な無もそこに含まれる（進歩主義のクレチン病は、ラシーヌ\*1の演劇がテレビで放映されたり、ヤクート人\*2がバルザックを読むのを見るとびに、ほろりとするのだろう。まさしく、彼らには、それ以外のかたちの人類の進歩など考えもできないのだ）。

情報の爆撃という概念は啓示的なものではあるが、この概念は最も広義に理解される必要がある。今日、人民は、たえまない愚劣さの爆撃にさらされているが、それはマス・メディアにはまったく依存していない。そうしたマス・メディアを、人々の現実の問題が真剣に提起される現代の社会生活の他の諸領域と競合するものとして思い描くことほど誤ったことはあるまい。それはいかにも旧態依然たる左翼に相応しいやり方である。大学、教会、伝統的な政治慣習、あるいは建築といったものも、一貫性を欠いたさまざまな俗悪さの入り交じった攪乱電波を同じくらい強力に発信しているのであり、それは無政府的なやり方ではあるが、強制力をもって、人々の日常生活の立居振舞の一切をその鋳型にはめようとするだろう（どんな服を着るべきか、誰に会うべきか、どのように満足すればよいか）。「コミュニケーション」の社会学者たちは皆、馬鹿のひとつ覚えのごとく、芸術家は自分の作品に同一化し、作品によって自分を正当化できるということを挙げて、マス・メディアで働く人間の疎外を芸術家の充足に対置してみせるのだろうが、彼らはこうして、ほかならぬ芸術そのものにおける疎外を理解できない自分たちのお目出度さ加減をたえず曝け出すにすぎない。

情報理論は、言語の中枢をなす能力、すなわちその詩的次元において自らと格闘し、自らを乗り越えてゆく言語の能力について、そもそも何も佃りはしない。空虚に到達したエクリチュール、内容と形式のまったき中性に到達したエクリチュールだけが、数学的な実験にのっとなって展開されうるのだ（たとえば、クノー\*3によって書かれた膨大な白いページの最終地点たる「潜在的

文学」)。いくら「情報の詩学」(アブラハム・モール\*4)に関して見事な仮説を立て、シュヴィッターズ\*5やツアラ\*6に対する誤解をいじらしく請け合っただけでも、言語の技術者たちは技術の言語以外のものを決して理解することはあるまい。彼らには、それらすべてを裁くものが何なのかわからないのである。

コミュニケーションを、パンチカードの使用による郵便振替口座の手続きのスピード・アップならぬ、人間の実践の総体という意味で理解するならば、そのまったき豊かさにおいて捉えられるコミュニケーションは、共同的な行動以外の場所には存在しない。最も極端な無理解は、度を越した非-介入と結び付いている。アルジェリアの民衆蜂起を前にしたフランス左翼の長く惨めな歴史ほどそのあからさまな例はあるまい。フランスにおける古い政治の死は、ほとんど全ての労働者が意志表示を忌避したことばかりでなく、それ以上に、行動への決意を固めた少数派の政治的愚行によって、その証拠を与えられたと言えるだろう。たとえば、極左治動家たちの「人民戦線」に対する幻想は、2等の幻想であるといえる。というのもまず、そのような方式はこの時期にはまったく実行不可能であったからであり、さらにそもそも、1936年以来、それは実に効驗あらたかな反革命の武器であることが広範に実証されているからである。ここでは、古い政治組織のまやかしがその崩壊を明らかにしているにもかかわらず、新しい政治は何ひとつ生まれていない。というのも、現代資本主義の水準への地位向上がフランスの趨勢である以上、アルジェリア問題はフランスの擬古的な古めかしさの現れの1つのように思われていたからである。つまり、フランスの発展に付随する失望や拒否という、いまだ非公式で「野蛮」な諸現象というわけであって、それが低開発のアルジェリア人たちの闘いと結び付いたものとは見られなかった。共同的なラディカルな異議申し立ての現実を未来に向けて見抜くことができない者にとっては、今日、実にさまざまに異なった利害を内包しているかに見える利益共同体は、もはや記憶の命法に基づいて成り立っているにすぎない(これは、植民地の搾取されている人々を支援するためにかつての労働運動が行ったことであり、——より多くの場合、行うべきだったにもかかわらず行わなかったことである)。それゆえ、唯一、連帯への展望をなしていたのは、これまた擬古的な、したがって抽象的なものとなってしまったいくつかの反射的反應だけだった。それは、あの神話的な永遠のフランス左翼、PC-PSU-SFI〔フランス共産党-統一社会党-社会主義労働者インターナショナル・フランス支部〕と、GPR〔アルジェリア共和国臨時政府〕が、(それぞれのさまざまな「不手際」や「裏切り」を考慮した上でなお)第3インターナショナルの2つの支部として行動することを待望することなのであった。しかし、1920年以降に起こったことは、こうした解決策への根本的な批判があらゆる点で不可避であることを示しているだろうし、この批判は、アルジェリア人の側から、今日の彼らの武装闘争によって、否応なしに直接的なかたちで提起されているのだ。国際連帯は、キリスト教急進左派の道德主義に墮すのでなければ、両国の革命派のあいだの連帯以外にはありえない。それにはもちろん次のことが前提となる。すなわち、フランスにあっては、そうした革命派の存在すること、そしてアルジェリアにあっては、現在の民族戦線がその権力の性格にかかわる選択の前に立だされるとき、近未来における自分たちの利害を見分けることである。

この時期にフランスで前衛的な行動をとることを追求した人々は、次の2つのあいだで迷って

いた。すなわち、一方には、かつての政治的な共同体（彼らもそれが深刻な硬直状態にあることを知っていたのだが）ないし、ともあれその言語から完全に切断されてしまうことへの恐怖があり、他方には、さまざまな政治的擬古主義の寄せ集め（反ファシズムでの例外なき行動の統一、等）に与する明らさまな追従のせいで、植民地主義過激派との闘いに関心を示すいくばくかの部分——たとえば学生たち——の現実的な心情に対するある種の侮蔑があったのである。

いかなるグループも、こうした機会を範例的なやり方で利用し、資本主義社会の潜在的叛乱の最大限綱領を植民地彼支配者たちの現実の叛乱の最大限綱領に結合させることはできなかった。もちろんこれは、それらのグループの脆弱さによって説明されることであるが、この脆弱さそのものは決して弁明のごときものとして考えられてはならない。逆にそれは、機能の仕方と厳密さにおける欠陥にほかならない。人々が身をもって生きた異議申し立てを代表＝表現し、それを人々に語りかける術をもっと組織が、脆弱なままであるなどとは考えられない。たとえ、その組織がいかに威しい弾圧に晒されていても事情は変わらない。

フランスとアルジェリアの労働者たちの完全な分離については、それが主として空間における分離ではなく、時間における分離であることを理解しなければならないが、この分離は、「左翼」の報道においてさえ、次のような錯乱を招くにいかつた。警察が8名のフランス人デモ参加者を殺した2月8日\*7の翌日、いくつもの新聞が、1934年以来、パリで起きた最も凄惨な衝突であるとした。わずか4ヵ月足らず前、10月18日のデモ\*8に参加したアルジェリア人たちが、同じパリで何十人という単位で虐殺されたことなど、もうまるで念頭にないのだ。あるいはまた、3月には、「サン・ジェルマン・デ・プレ地区反ファシスト委員会」なるものが、ポスターに「フランス人とアルジェリア人は交渉を命ずる……」などと書いているが、2つの勢力を羅列する、しかもこんな順序で羅列するような馬鹿げたことをやりながら、殺されもしないのだ。

コミュニケーションの現実がこれほど深く腐敗している時に、社会学で、化石化したコミュニケーションの鉱物学的研究が進展するのは驚くにあたらない。芸術でも同じことだ。20年代以来、かくも多くのモダニズム潮流が、ダダから可能なかぎりのことを採り入れてきた後になって、ネオ・ダダイスト\*9のチンピラたちは、ダダの運動の重要性を、まだまだ開拓すべき絶対的な肯定性として再発見するという始末である。彼らはこうして、本来のダダイズムがいかにドイツのダダイズムであり、それがどれほど1918年休戦後のドイツ革命の台頭と結合した部分をもっていたかを忘れさせようと努めているのだ。こうした結合の必然性は、今日、新しい文化状況をもたらそうとする者にとって何も変わってはいない。ただ、この新しさを、芸術と政治において同時に発見する必要がある。

すでに出来上がった虚偽を擁護する者たちのなかでも、その最も反動的な分子は、今日、ダダイズムから単純な反コミュニケーションを借用しているが、実践の最も単純なレベルでも最も複雑なレベルでも、新たなコミュニケーションを創造することこそが急務であるこの時代にあつて、それには何の価値もない。ダダを最も相応しく継承する正統なる後継者、それは1960年夏のコンゴ\*10にこそ認められるべきものである。他のどんな地域にもまして幼年時代に止めおかれたこの民族の自発的叛乱は、他のどんな地域においてよりもその異質さの際立った彼らの搾取の合理性が揺らいだ瞬間、即座に、支配者たちの外部の言語をひとつの詩、ひとつの行動様

式へと転用することができた。この時期のコンゴ人たちの表現は、敬意をもって研究するに値する。そこには、唯一の可能なコミュニケーションの偉大さと有効性——詩人としてのルムンバ\* 11の役割を考えてみる——が認められるだろう。そうしたコミュニケーションは、どんな場合にも、さまざまな事件に介入し世界を変化させることとともに歩んできたのである。

大衆は逆に考えるよう強く促されているが——そしてこれはマス・メディアの影響によるばかりではない——、その前衛が倒されるまでのコンゴ人たちの行動の首尾一貫性と、手中の僅かな手段を使いこなした見事な手並みは、すべての先進国の社会組織の根本的な非一貫性や、その掌中にある技術力に対する容認可能な用法を見いだせない危険な無能力と、まさに好対照をなしている。ザルトルは、その同時代人たちがさまざまな瞞着の1つを選んで騙されていたとき、ただ1人でそれらすべての瞞着にとらえられることに成功した点で、この混迷せる時代のすぐれた代表者であるが、このザルトルはいまや、『メディアシオン』誌の第2号の注のなかで次のように言いきっている。すなわち、解体の時代に対応するような、解体した芸術の言語について語ることはできない。なぜなら「時代は破壊する以上に構築する」から、というわけだ。たしかに食品店の天秤は重い方に傾く。しかしこれは、構築することと生産することとの混同から生まれた見解にすぎない。ザルトルは、今日、世界の海に浮かぶ船の総トン数が、多くの撃沈にもかかわらず、戦争前よりもずっと増えていることに気付くべきである。あるいは、火事や衝突にもかかわらず、建物や自動車の数が増えていることに。また、書籍の数にしても増えたものだ。これはザルトルが生きていたためである。しかし、にもかかわらず、社会における生きる理由は崩壊した。生きる理由にさまざまな作為的な変化を差し出してきた諸々のヴァリエーションは、警察署長の任期程度しか長続きせず、結局は、古い世界の全般的解体のなかに合流してゆく。残された唯一の有効な手だて、それは社会と生を別の土台の土に再構築することである。現代的だの進歩的だのと自称する思想の砂漠の上を、かくも長きにわたって支配してきた人々の、いわゆる新（ネオ）哲学なるものは、こうした土台を知らずにいた。この人々のお偉方は博物館に入ることもあるまい。それは博物館にはあまりにも空疎な時代となろうから。彼らはすべて似通っている。彼らはみな、今世紀の最初の3分の1における、人間解放の運動の巨大な敗北の産物である。彼らはこの敗北を受け入れたのであって、そのことがすでに彼らを定義し尽くしている。そして、誤謬の専門家たちは、どこまでも自分たちの専門化を守ろうとするだろう。しかし、気候が変化した今日、擬似—説明をこととするこの恐竜たちは、もはや餌を見つけることもあるまい。弁証法的理性のまどろみが、怪物たちを生み出していたのである。

コミュニケーションを一方向的にとらえる一切の観念は、明らかに、一方向的なコミュニケーションから生まれた観念であった。それらは、社会学や古い芸術、あるいは政治指導部の首脳たちの世界観や利害に対応するものであった。だが、まさにそれこそが変化しつつある。われわれは「われわれのプログラムが、その表現において、われわれが手にしうる表現および受容の手段と両立不可能であること」（コターニィ）を承知している。コミュニケーションに役立つものと、コミュニケーションがそれに役立つものとを同時に理解することが必要だ。既存のコミュニケーションの諸形態、および現在のその危機は、ただそれらを乗り越える展望によってのみ理解され、また正統化される。芸術やエクリチュールを全面的に放棄することを望むほどまでにそれらを重要視してはならない。逆に、まるで何もなかったかのごとく現代の芸術や哲学の

歴史を継続することを望むほどまでにこれらを軽視してはならない。われわれの判断は、歴史的であるがゆえに醒めたものである。したがって、われわれにとって、可能なさまざまな様式のコミュニケーションの使用は、このコミュニケーションの拒否でなければならないと同時にそうであってはならない。それは、自らの拒否を内包するコミュニケーション、コミュニケーションを内包する拒否、つまり、この拒否を肯定的＝積極的なプロジェクトへと転換することにほかならない。それは何処かへと導くだろう。いまやコミュニケーションは、おのれ自身の批判を内包しようとしているのである。

\*1: ジャン・バチスト・ラシーヌ (1636-99年) フランスの劇詩人。フランス古典主義の代表的作家。代表作に『アンドロマック』(67年)、『フェードル』(70年)など。

\*2: ヤクート人 シベリア東部に住む少数民族

\*3: レイモン・クノー (1903-76年) フランスの作家。1924年から29年にシュルレアリストとして活動した後、第二次大戦期までバタイユらと行動をともにして科学・哲学研究を行いつつ、『はまむぎ』(33年)、『わが友ピエロ』(42年)などの一連の言語実験を交えた小説を発表する。戦後は、言語実験を推し進め、『文体練習』(47, 63年)、『地下鉄のサジ』(59年)などの作品を発表するとともに、〈潜在史学実験室(ウリポ)〉の創設にも加わった。

\*4: アブラハム・モール (1920-) フランスの社会学者、現代音楽理論家。フランス内外の多くの大学で社会学、情報理論、芸術論などを教えながら、音響芸術論などの分野で多くの著作を著し、現代音楽や言語芸術に理論的影響を与えた。代表作に、『騒音の物理学』(1952年)、『情報理論と美的知覚』(58年)、『実験音楽』(60年)、『都市社会の貼り紙』(69年)、『芸術とコンピュータ』(70年)、『空間の心理学』(78年)など。モールは、1963年に社会学者的関心から「シチュアシオニスト集団への公開質問状」なる文章をシチュアシオニストに対して送り、ドゥポールから激しく断罪された。また、1966年以来、ストラスブール大学のコミュニケーション社会心理学研究所の所長を務めたが、その際にはシチュアシオニストらから教室でトマトを投げられて開講講義を開けなくされたという経歴を持つことでも知られる。

\*5: クルト・シュヴィッターズ (1887-1984年) 1919年、釘・紙・布などを寄せ集めた「メルツ絵画」(「メルツ」は「コメルツ Kommerz 商業」からの切り取り)を制作。1921年、ハウスマンらと接触し、翌年ワイマールのダダ会議に参加、ダダの終結後は構成主義に進む。1924年、ハノーヴァーの自宅にメルツ芸術を集大成して建設した「メルツバウ」は、構成詩『原(ウル)ソナタ』とともに彼の代表作となる。1933年ドイツを去り、1940年イギリスに移住。

\*6: トリスタン・ツァラ (1896-1963年) ルーマニア生まれの詩人。ダダの創始者。

\*7: 2月8日 1962年2月7日、ド・ゴールのアルジェリア政策に反対する右翼テロ組織OAS(秘密軍事組織)はパリ市内10カ所に爆弾を仕掛けた(うち1発は文化相アンドレ・マルローの住むアパルトマンに仕掛けられ、1階で遊んでいた少女を失明させた)。これに対して、翌2月8日、パリの左翼はバステューで1万人のデモを行ったが、これに警察が激しい弾圧を加え、メトロの階段に逃げ込んだデモ参加者にまで狂暴化した警察は鉄製の樹木保護柵や大理石製のカフェのテーブルを投げつけ、女性3名と16歳の少年1名を含む8名を虐殺した。

\*8: 10月18日のデモ 1961年10月17日、アルジェリア民族解放戦線フランス同盟の呼びかけで約3万人のアルジェリア人（男性、女性、子供）のデモと集会が行われたが、警察は集会を禁止して参加者を逮捕し、多くのアルジェリア人をセヌ川に突き落として約60名を虐殺した

\*9: ネオ・ダダリスト 1950年代に合衆国で起こった、ロバート・ラウシェンバーグの廃物、印刷物、ぼろ切れなどを用いた「コンバイン・ペインティング」、ジャスパー・ジョーンズの旗や標的を描いた作品など、生活と芸術、芸術と非芸術の境界を破棄する芸術表現を指してこう言われる

\*10: 1960年夏のコンゴ コンゴは、1960年6月30日、宗主国のベルギーからの独立を達成し、選挙によってカサヴブ大統領-ルムンバ首相体制の共和国となった。独立を勝ち取ったコンゴ人たちは革命意識を高揚させ、首都レオポルドヴィルを中心として全土で、軍隊でのベルギー人将校に対する反乱（7月6日）や、労働組合のストが頻発した。ベルギー政府は一旦はコンゴの独立を認めたが、独立の勢いがベルギー人によるコンゴ全土の植民地支配そのものに向かうや、白人植民者の保護と称して、7月10日には降下部隊1万名を派遣した。ルムンバはこのベルギーによる主権侵害を国連に提訴し、国連安保理は国連軍の派遣とベルギー軍の撤退を決議した。だが、国連軍はコンゴ革命が南部アフリカ全体の革命に向かうことを阻止しようとする欧米諸国の意を受けてコンゴ人の革命運動を押さえる一方で、ベルギー植民地主義とその意を受けた反ルムンバ派の軍部を押さえることはできなかった。その後コンゴでは、ベルギー資本の権益を保護するベルギー軍に後押しされたチョンベによるカタンガ州の分離独立（7月11日）、軍部の反ルムンバ派クーデター（9月14日）、ルムンバの逮捕（12月1日）、殺害（61年2月13日）という経緯で、「コンゴ動乱」と呼ばれる紛争が泥沼のように続いてゆくのである。

\*11: パトリス・ルムンバ（1925-61年） コンゴ（現ザイール）の政治家。1958年10月、〈コンゴ民族運動〉を結成、同年12月、ガーナでの第1回今アフリカ人民会議に参加し、その帰国報告会がレオポルドヴィル暴動の口火となったために逮捕されるが、60年1月のブリュッセル円卓会議出席のため釈放。60年の独立選挙で新生コンゴの初代首相に選ばれる。しかし、その後、軍部の反ルムンバ派クーデター（9月14日）によって首相の座を追われ、モブツ将軍によって逮捕され（12月1日）、殺害された（61年2月13日）

### 訳者解題

1961年8月末に、ストックホルムに次ぐスウェーデン第2の都市イエーテボリで開催されたS I 第5回大会は、S I 内部の「芸術」派と「革命」派との対立が公然化し、「革命」派が主導権を奪ううえで重要な大会になった。60年代のS I の運動は、ヨーロッパと第三世界のさまざまな革命運動との結びつきを強め、次第に政治運動へと傾斜してゆくが、その方針が明確に定められたのはイエーテボリでのこの大会の翌年、1962年11月にアントワープで開催されるS I 第6回大会においてである。実際、その大会は、外部の革命潮流との関係を整理し、S I の運動の非合法性・実験性を確認したうえで、それまでの国単位のセクション制を廃止して単一の世界組織へと組織を統一して、S I の組織的・理論的統一を完成させることに成功する。イエーテボリ大会は、いわば、このアントワープでの統一に向けた地ならしであったと言える。この大会では、いまだに「芸術作品」を製作することにシチュアシオニストの活動を一面化しようとする部分との理論闘争が熾烈に行われた。とりわけ、ベルギー・セクションのラウル・ヴァネーゲームとアッティラ・コターニイという2人の新しいシチュアシオニストは、ヨルゲン・ナッシュらのスカンディナヴィア・セクションやクンツェルマンらのドイツ・セクションのメンバーによるシチュアシオニスト理論の曲解に対して、厳しい批判を浴びせかけ、「作品」を重視する活動の不十分さを断罪する。ヴァネーゲームは、「基調報告」のなかで、「問題は拒否のスペクタクルを作り上げるのではなく、スペクタクルを拒否することである。スペクタクルを破壊する諸要素が、S I の定義した新しい真正な意味で芸術的に練り上げられるためには、それらの要素はまさしく芸術作品たることをやめねばならない」と、明確に「作品」の生産を主眼とした運動を拒否する。また、コターニイは、S I の個々のメンバーのこれまでの「作品」は、シチュアシオニストの目指す「真実」に照らせばまだ「形成途上」にある運動のなかで産み出された「作品」にすぎないがゆえに「シチュアシオニスト的作品」と呼ぶことはできず、むしろ「反シチュアシオニスト的」と呼びうるにすぎないとして、シチュアシオニスト的作品という幻想を退ける。

ヴァネーゲームとコターニイのこの批判は、卑俗な例を挙げると、例えば革命闘争において、他人の使う銃の手入れだけに毎日精を出す者や、他人の食べる食事を1日中作っている者などが、革命から疎外されているのと同様に、シチュアシオニストの運動において芸術作品の製作ばかりを優先し、シチュアシオニストの掲げる他の社会批判の行動をサボタージュする者はS I の運動から疎外されているということを言っているのである。人間の全体的活動の分割や分業を批判するS I の運動の内部において、古い社会の分業の考えに基づく「芸術」活動は認められない。S I がいかに「スペクタクルの社会」を転位する方途として、「文化」の領域での批判と闘争を重視するからといって、「革命的实践、そして生の使用法を変える」ことへの意志と結びつけられない「作品」の製作は意味をなさないのである。

ヴァネーゲームとコターニイ、そしてドウボールの共通のこの認識は、この大会において全員から一応の賛成を得る。しかし、「芸術」派のS I への対立は表面上解消したように見えただけで

、後に、スカンディナヴィア・セクションでは、ヨルゲン・ナッシュとアンスガー・エルデがS Iへの反対を表明し、シチュアシオニスト商標の家具を製造販売するという逸脱を行い、ドイツ・セクションでは大会での決定を踏みにじて独自にその雑誌『シュプール』を発行するという分離主義的行動に出ることで、それぞれS Iから除名されるのである（「シチュアシオニスト情報」を参照）。

---

シチュアシオニスト・インターナショナルの第5回大会は、ロンドンでの大会から11ヵ月をへて、1961年8月28日から30日まで、イエーテボリ\*1で開催された。9カ国のシチュアシオニストの代表として以下の者が出席した。アンスガー・エルデ\*2、ドウボール、J・ド・ヨング\*3、コターニィ、D・クンツェルマン、S・ラルソン、J・V・マルティン\*4、ナッシュ、プレム、G・シュタードラー、ハーディ・ストリッド\*5、H・シュトゥルム、R・ヴァネーゲーム、ツィンマー、である。

1回目の会議では、アンスガー＝エルデが議長に選ばれ、S Iのさまざまなセクションの現状と、シチュアシオニストの運動に接近しようとしている人々にたいして取るべき態度について、情報の交換が行われた。共通の見解は、すべての候補を厳しく吟味せねばならないということ、とくにイギリスやドイツでのように既成の芸術家グループが対象となる場合には、なおさらだということである。その際、プレムは、各国のシチュアシオニストの質を見極める判断は当該国のセクションだけに委ねられるべきであり、新参加者の意図の評価についてだけでなく、S Iの既成メンバーの参加状況や期間の評価にあたってもそうあるべきだと提案した。この要求は、シチュアシオニストの統一と国際主義の名による数々の抗議にさらされた。プレムと同傾向のシチュアシオニストたちがこうした法外な管理権を要求しているのは明らかであるが、それは、S Iでは極めて少数意見である（第4回大会の討論を参照）彼らの主張が、ドイツでは長期にわたってもっぱら支配的であったため、今なお同地の多数意見となっているからである。彼らは、S Iの方針を支持する反対派をドイツ・セクションから除名することを企てている。本大会の決定は、すべての国について、メンバーの認可や、ましてや一国内での紛争については、それぞれの個別セクションから提出される情報や正当な意見をもとに、S I全体——大会と大会とあいだの期間はCC〔＝中央評議会〕が判断すべきだということである。

ナッシュは、スカンディナヴィアのメンバーたちが、少なくとも今後1年間、セクションを1つにする決定をしたことを明らかにした。文化状況の似通った4つの国のなかで、地理的に大きく散らばっている（1人は何とアイスランドにいる）からである。次の段階として、彼らはデンマーク・セクションの自立を再建することを展望している。彼らは当初、同セクションを維持しようとしたのであるが、現地での支援態勢があまりにも不足していたのだった。

大会では次にヴァネーゲームの基調報告が行われた。特筆すべき点は以下のとおりである。

「シチュアシオニスト・インターナショナルは、現在の歴史的情勢によって、またその内的進化によって、次のような発展段階にある。すなわち、この官僚化され物象化された世界の中でS Iに展開可能なものと考えられる活動は、いまや、このS I内部にその凝集力として維持できる批判的要求と切り離すことができない、ということである。メンバーの1人1人が、S Iを脅かすものや、自らを脅かすものを明確に意識化するならば、要するに、S Iが何であり、何であろうとしているのかを明確に意識化するならば、来るべき任務や、予想される弾圧を前にしたS Iの弱点も、逆にその潜在力として明確になるばかりだ。各セクションの自立には、以上のような代価が賭けられている。

資本主義世界も、いわゆる反-資本主義世界も、生をスペクタクルの様態の上に組織している……。問題は、拒否のスペクタクルを作り上げるのではなく、スペクタクルを拒否することにばかならない。スペクタクルを破壊する諸要素が、S Iの定義した新しい真正な意味で芸術的に練り上げられるためには、それら諸要素はまさしく芸術作品たることをやめねばならない。シチュアシオニズムなるものも、シチュアシオニスト的芸術作品なるものも存在しない。ましてや、スペクタクル的シチュアシオニストなど存在しない。断じて否である。

こうした展望は、革命的実践（プラクシス）、そして生の使用法を変える（これは、いかなる意味でも、現存する労働の使用者の取りかえには還元されない）ことへの意志と直接に結び付けられないなら、何の意味ももたない。新しいタイプの革命的運動の周辺での批判的行動の可能性は、さらに以下の点に従属している。

というのも、以上は、シチュアシオニストが行動の自由について語ることのできる唯一のコンテキストを定義するものである。それをなし遂げた上で、すべてはまだこれから行われるべく残されている。A——欠陥だらけの世界（あらゆる断片は全体であり、かつ断片的な全体しか存在しない）の中で、全体に接ぎとめられたひとつの総体として自らを把握すること（改良主義の拒否）。B——統一的都市計画と解放された生を準備するシチュアシオニストの基地を建設すること。C——生きた経験にその優位性を取り戻すこと。なべて神話的で、変化がなく、数量化された、もろもろの生活様式に対抗する生のスタイルに与するためである。D——綿密に調査された、現在のさまざまな可能性の領域において、さまざまな新しい欲望を定義すること。E——さまざまな可能性の支配を保証しうるあらゆる技術的手段を奪取すること。

これらの相互作用は、網羅的ではないが、永続革命のプロジェクトを素描している。

われわれの立場は、2つの世界のあいだで闘う者の立場である。1つはわれわれが承認しない世界であり、もう1つは未だ存在しない世界である。重要なのは、両者を激突へと急かすことだ。1つの世界の終焉を、シチュアシオニストがそこで自分たちに属するものを認知するだろう災厄の訪れを急がせることだ。

この演説に対する反対はなかった。これに続いて行われた、近未来的に可能な実現の程度をめぐる討論で、ヴァネーゲームは、短期的には、いくつかの選択された芸術的価値を破壊するポラッチのプロジェクトを、中期的には、ユネスコへの介入とシチュアシオニストの最初の基地（「シーリング城」）の開設を主張した。さまざまな手段の原始的蓄積のために必要となるのは、「自分たちの最良の部分がS Iによって擁護されていることを、芸術家たち仁認識させる

よう導くことである。その最良の部分が、同時に人質として、また敵陣からの脱走者として、芸術家たちを確保することになるだろう。「改良主義の拒否と、無からの（エクス・ニヒロ）創造の不可能性によってその活動領域を限定されている」S Iは、「今日の社会のなかに、その将来の橋頭堡たるべきものを打ち固め、敵の領土の征服への道を用意してくれるような支え」を見つけることを目指している。「われわれは、最も広義におけるショップ・スチュワードでなければならない」。

2回めの会議は、さまざまなセクションからの報告、主としてS Iの文書の出版と翻訳についての報告から始まった。スカンディナヴィア・セクションは、さらに、同セクションの多くのメンバーの共同作業によるスウェーデンでの実験映画製作の問題を提起した。イエーテボリの大会に出席していたスウェーデン人たちは、それらの映画のうちのどれがシチュアシオニスト的段階に到達しているかを彼らどうして議論し、本大会がそれについて証言することを望んだ。ドウボールは、自分自身シチュアシオニスト的映画というものを製作したことがないから、判断はできないと答えた。クンツェルマンは、ヴァネーゲムが考えているようなレベルで活動するためにS Iが結集させる力について、強い疑問を表明した。

コターニィがナッシュとクンツェルマンに答えた。「運動の当初から、S Iのメンバーの芸術作品の標示が問題になっていた。どの作品もシチュアシオニスト的作品などでないことはわかっていたが、ではそれらを何と呼べばよいのか。きわめて簡単なルールを提案しよう。つまり、それらを反シチュアシオニスト的と呼ぶことにするのである。われわれは、芸術上の非一真正さが横行する支配的状況に反対である。これは、誰かが絵を描いたり、書きものをするのを止めるべきだとか、それらに価値がないという意味ではないし、そんなことをせずとも生きていけるという意味でもない。しかし、同時にわれわれは、それらすべてが社会の浸食を受け、われわれに抗して用いられることを知っている。われわれの力は、ある種の真実を練り上げることにある。それらの真実は、人々がそれに与して闘う準備ができてい以上、爆薬のように破壊的な力をもっている。現段階の運動は、これらの本質的な点の練り上げについて、まだ形成途上にあるにすぎない。現代の爆薬の特徴たる純度は、まだ運動全体の特性となるにいたっていない。われわれ全員が、あの純度に、すなわち必要な明晰さの度合いに到達するまでは、日常生活や、日常生活批判へのわれわれのアプローチに爆発的效果を期待することはできない。いま問題となっているのが反シチュアシオニスト的作品であることを忘れないよう、私は諸君に忠告する。この点での明晰さは、さらなる明晰化をはかる上で不可欠なものである。この原則をおろそかにするならば、否定的な意味でクンツェルマンの考えが正しかったことになるだろう。S Iは並みの権力を手にすることさえできなくなってしまう」。

コターニィの提案には一同が同意した。いくつかの国では、S Iとは無関係でありながら、前衛的たらんとして、「シチュアシオニズム」を引き合いに出したり、自分の作品を多少ともシチュアシオニスト的なものとして示す芸術家が現れはじめたのが確認されている。もちろん、こうした傾向はさらに拡がってゆくだろうが、S Iがそれに関わる必要はない。積極的＝肯定的（ポジティブ）な芸術に対する雑多なノスタルジーが、それぞれシチュアシオニスト的たることを自称しているまさにその時、およそシチュアシオニスト的な条件が揃っていない現状においては、反シチュアシオニスト芸術こそが、今日の最良の芸術家、つまりS Iの芸術家たちの印となる

だろう。このように述べてこそシチュアシオニストである。

反シチュアシオニスト芸術の規則を採択することが満場一致で決められた。この規則に照らしてS Iのメンバーが見分けられることになる。ナッシュだけはこの採択に反対した。彼の恨みと憤りは、この議論が続けられている間中いやましに露わになってゆき、ついには激昂、怒り心頭に発するという様を呈した。

3回めの会議では冒頭、ジャックリーヌ・ド・ヨングが、英語の雑誌『サ・シチュアシオニスト・タイムズ\*6』の出版に関する問題を提起した。同誌は、1960年の11月のCC1回会議で決定されながら、その後、まったく準備が進められないままになっていたものである。S Iの財政は、同時に多くの雑誌を維持するには、またわけても、予定された夥しい翻訳の難事業を商業ペースで解決するには、少々不十分であることが確認された。また、S Iの同志たちの翻訳者としての仕事は、セクション同士の日常的コミュニケーションを保証するという観点からみれば、適切な水準に達していないことが確認された。問題の雑誌については、その発行が望ましいことが再度確認された。ただし、こうした雑誌を発行するための健全で無理のない条件を作り出すのは、もっぱらイギリス・セクションの活動の発展である。討論は、シチュアシオニストの基地の実現をめぐる開催された。シュトゥルムは、このプロジェクトの実現というとき、いったいどんな進路のことが語られているのか理解できないと述べた。彼は、コターニの発言に「抽象的な意識、そして純粋さについての独話」を見てとる。またプレムは、同様の観点から彼の仲間の反対意見を取り上げ、さらに長い反論を行った。彼も、われわれの芸術を反シチュアシオニスト的であると呼ぶことや、また、シチュアシオニストの基地を整備することには同意する。しかし、彼はS Iの戦術が良いとは思わない。人々の不満や叛乱が語られているが、プレムの見るところでは、すでに彼の一派がロンドンで表明してきたように、「大多数の人々は、今なお快適さを求めている」。プレムは、S Iは文化における自らの現実的チャンスを組織的に無視している、と考える。S Iは、現存する文化の政治のなかに地歩を占める重要な機会を斥けている。けだしS Iは他の権力をもたず、しかも、明らかにわれわれの手の届くところにあるその権力は、きわめて大きなものたりうるにもかかわらずである。S Iの多数派は、可能なるものの内で実効的な行動のチャンスをないがしろにしている。多数派は、何事かをなしうるかもしれない芸術家たちの邪魔をし、彼らが権力を持ちしめた途端、彼らを外に抛り出してしまふのだ。われわれは皆これに苦しんでいる。そしてプレムはとうとう、「今日の時代においては、理論的権力は不毛であり、物事を実際に変える能力をもたない」と信じるにいたったのである。コターニは、「われわれは、一瞬たりとも、現代についてのかくも特殊な理論を是認することがありえるかのような様子を見せたことはない」と、これに応じ、シチュアシオニスト運動の重要性は、まさにプレムと正反対の原理に存すると述べた。プレムは、少なくともシチュアシオニストの理論は理解しやすいものではない、と付け加えた。ではなぜここにいるのかと、何人かの同志が尋ねた。マヤコフスキー\*7の語った話をドウボールが引き合いに出した。「数学やフランス語を理解できないというだけの理由で頭が良いとは誰も言わない。だが、未来派のことを何1つ理解できないことを証拠に、誰も自分の頭の良さを確認している」。われわれの進歩は次の点にある。すなわち、マヤコフスキーの話がブルジョワの傍観者に関するものであったのに対し、S Iは、

参加者の1人が、2年以上も前から共にあったその理論を理解できぬことを自画自賛する最初の  
前衛となったのである。

ドイツの他のシチュアシオニストたちは、ここでプレムに強く反対し、また何人かは、自分  
たちが与していない立場を、自分たちの名において表明したことでプレムを非難した（しかしむ  
しろ、プレムは、ドイツ・セクションにおける支配的路線を率直に表明したのだと思われる）。  
結局、ドイツ人たちは、誰も実践的結果から切り離された理論など考えていないと断言するに  
いたった。こうして、3回めの会議は真夜中になって幕を閉じた。激しい興奮と喧騒をともなう  
会議であった（一方からは「理論なんて、口から出まかせの思い付きじゃないか!」、他方から  
は「文化の女衛!」などと叫ぶ声が聞かれた）。

4回めの会議は、欠席した2人のシチュアシオニスト、ゲオルグ・ケラーとウーヴェ・ラウゼ  
ン\*8から本大会に送られてきた伝言を読み上げることから始まった。

ラウゼンは、ドイツ・セクションの多くのメンバーに見られる順応主義を告発した。それは生  
活のみならず、いくばくかの伝統的領域に限定された芸術上の実験という考え方に及んでいる。  
ラウゼンは、シチュアシオニスト的な経験が要求する全面的自由を彼らに対置する。それがいか  
に社会との闘いの様態に条件づけられているかを知ってのことである。そして、次のように結論  
する。「ただ日常生活だけが、未来の芸術への可能性である。ラディカルな仲間を求めなければ  
ならない。仲間はとこかにいる。老いた人々は、若い頃にはラディカルだったと言う。そう、た  
しかにラディカルだったのだ。若い頃、彼らはまだ生きていたのである。それから、自分が欲し  
ていたことを忘れ、眠り、ついには死者となる。目の醒めている人々を呼び集め、微睡める人々  
を呼び醒まし、死者たちを埋葬しなければならない。すなわち、始めることだ」。

ケラーは次のように書いて来た。「いかなる新しい発明もシチュアシオニスト的であるとい  
うことは誰も否定できない。新しい発明は、ただわれわれにのみ属する。それは、そうした発明が  
われわれに役立ちうるからだけではない。われわれこそは、そのグローバルな多様性における新  
しい発明そのものであるからにばかならない。われわれの世界とはかくなるものだ」。彼は、「  
すべての遊戯の出発点として、漂流状態にあるダイナミックな統一性を修得することと、真の不  
均衡を作りだすために求められるさまざまな等価物を深く認識すること」を要求する。また彼は  
、S Iの定期刊行物の統一をはかることを提案した。現在、さまざまな刊行物のあいだに見られ  
る分岐は、結局のところ、さまざまなジャンルへの専門化を招いている。フランス語による中央  
機関誌は、絶対的倦怠を求めるまでに理論的であるのに対し、イタリア、スカンディナヴィア、  
ドイツの刊行物は、概して初歩的な遊戯的性格で満足している。このように遊びと真面目が慣習  
的に分離されるのは、S Iの観点からみれば弱点である。

ベルギー・セクションは、ケラーの提案が時宜に適ったものであることは、前日に露呈した、  
長引く見解の相違やごまかしようのない作業の遅滞からも確証されるとして、同提案への支持を  
次のような形で表明した。つまり、ドイツ語、英語、フランス語、スウェーデン語での4つの版  
のある統一された1つの雑誌を編集するということである。『シュプール』誌の責任を担ってい  
るドイツのシチュアシオニストたちは、原則としてこの計画を受け入れたが、機が熟さぬまま近  
い将来それを実行することは、彼ら全員が一致して斥けた。したがって、大会参加者の大多数は  
、最も直接の当事者たるシチュアシオニストたちに却下された問題について投票するのは差し控

えた。ともあれ、このシチュアシオニストたちは、本大会であらためて明らかになったように、その立場や作業を彼ら以外のS Iと統一するための緊急の努力を要することが浮き彫りになった。クンツェルマンは、ヴァネーゲームの報告はドイツではより綿密に検討されなければならないが、それを基礎に議論は速やかに前進するだろう、と述べた。しかしドイツ人たちは、シチュアシオニストの理論を早期に普及させ、推敲するという作業に着手しており、これはすでに『シュプール』誌の第5号、6号から開始されている。彼らの依頼に応じて、本大会は、アッティラ・コターニィ、J・ド・ヨングを『シュプール』誌の編集委員会に加えた。これは、件の統一のためのプロセスを監督するためである（ただし、1月にはこの決定は踏みにじられ、彼らが知らぬまに作られた第7号が発行された。これは、明らかに以前の号に退行した内容である。——これは責任者の除名という事態をもたらすことになる）。

本大会が指名した新しい中央評議会は、アンスガー＝エルデ、ドウボール、コターニィ、クンツェルマン、ラウゼン、ナッシュ、それにヴァネーゲームによって構成される。さらにツインマーが、ブリュッセルの統一的都市計画事務所に派遣される。第6回大会の開催都市を決定する投票では、ワルシャワで秘密裡に開催しようというスカンディナヴィア・セクションの提案を退け、アントワープが選ばれた。その代わり、本大会は、ポーランドに3人のシチュアシオニストからなる代表団を派遣し、同地での接触の機会を増やすことを決定した。

この最後の作業会議が閉会したあと、大会は祝宴とともに幕を閉じた。祝宴ははるかに建設的なものであったが、残念ながらその議事録は取られていない。祝宴は、サウンドを横断後、ほとんど漂流の相を呈し、大勢がフレズレグスハウン港まで流れついた。漂流する祝宴は、一部ではハンブルクまで続けられた。

\*1: イェーテボリ スウェーデン南西部、イェーテボリ・オク・ブーヒュース州の州都。同国第2の都市で、同国最大の貿易港を有し、自動車（ボルボ）、造船、製鉄、機械などの産業が栄える。

\*2: アンスガー＝エルデ S Iスカンディナヴィア・セクションのメンバー。スウェーデン国籍。1962年5月、ヨルゲン・ナッシュらとともに、スウェーデンで「バウハウス・シチュアシオニスト」を結成しS Iの分派活動を行ったため除名

\*3: ジャクリーヌ・ド・ヨング S Iオランダ・セクションのメンバー。オランダ国籍。1962年3月に除名。以後、1963年に「シチュアシオニスト・タイムズ」からアスガー・ヨルンと共同で「迷路」についての資料集（映画、音楽、詩、民俗学、建築）などを出版。

\*4: イェッペセン・ヴィクトール・マルティン S Iスカンディナヴィア・セクションのメンバー。デンマーク国籍。1972年のS I解散まで、除名も脱退もしなかった数少ないメンバーの1人

\*5: ハーディ・ストリッド S Iスカンディナヴィア・セクションのメンバー。スウェーデン国籍。1962年3月に除名

\*6: 『ザ・シチュアシオニスト・タイムズ』 シチュアシオニストの国際版雑誌を名乗っているが、ドウボールらシチ

ユアシオニストは参せず、ヨルン、ドイツの〈シュプール〉派など、シチュアシオニストを除名された者たちや、アレシンスキー、カウロス・サウラ、ボリス・ヴィアン、ロベルト・マッタ、ウィフレド・ラムなどが参加した。ジャックリーヌ・ド・ヨングの編集で、1962年5月から64年9月りまで全6号が出された。

\*7: マヤコフスキー（1893－1930年） ソ連の詩人。ロシア革命に参加し、最初は未来派風の、後に社会主義リアリズムの詩を書いた。代表作に叙事詩『ズボンをはいた雲』（1915年）、『ウラジミル・イリッチ・レーニン』（25年）、戯曲『ミステリヤ・ブッフ』（18年）など。

\*8: ウーヴェエ・ラウゼン S I ドイツ・セクションのメンバー。1965年3月に除名。

### 訳者改題

「当たり前の基礎事実」(Banalite de base)と題されたこの論文は、後にシチュアシオニスト自身によって60年代のS Iに新しい地平を切り開いた画期的な論文として高く評価されるものだが、ここではその著者ラウル・ヴァネーゲムについて簡単に述べておく。

ラウル・ヴァネーゲムは1934年、ベルギー南部ワロン地方エノー(Hainaut)州の小都市でオランダ語とワロン語の言語国境地帯に位置するレシーヌ(Lessines)に生まれた(ヴァネーゲム〈Vaneegem〉)の名は、フランスではヴァネージェムと発音されることもあるが、ここではオランダ語発音を尊重してヴァネーゲムと表記する)。その後、彼は51年から56年までブリュッセル自由大学でロマンス語文献学を学び教授資格を得た後、ブラバント-ワロン州(Brabant-Wallon)の古都ニヴェルの高等師範学校で教えつつ、61年からシチュアシオニストの活動に参加する。最初はブリュッセルの〈統一的都市計画事務局〉を拠点に活動するが、翌年にはS Iの中央評議会のメンバーの1人となり、『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』誌の編集委員として62年の第7号から69年の最終号第12号までの編集に名を連ねる。この間、ヴァネーゲムは『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』誌に発表した多くの論文(第7号と第8号の2回に分けて掲載された長い論文「当たり前の基礎事実」、第10号の覚え書き「問題提起も問題設定もなきいくつかの理論的問題について」、第11号の「実践的真理を目的とすること」、第12号の「一般化した自主管理に問する文明人への意見」などの署名論文のほか、無署名のいくつかの論文)によって60年代初頭のS Iの運動に対して大きな理論的影響を与えるとともに、67年に出版され68年5月にいたる過程の中で爆発的に読まれた著書『若者用処世術概論』によってS Iの理論を外部の者に伝えるのに大きく貢献した。とりわけ、ヴァネーゲムが強く唱えた「快樂」への権利、「犠牲」や「苦痛」あるいは「所有」や「交換」を拒否した「生」の絶対的肯定、「疎外としての労働」を否定して創造的な「遊び」や「祭り」の中に「全体性」を実現するという考えは、その後、S Iの枠を越えて広く普及した。実際、68年5月にフランス中の大学や通りの壁の落書きには、「日常生活の変革を望むことなく革命を語る者は、口の中に屍体をくわえているのだ」とか、「死んだ時間なしに生きること、制限なしに楽しむこと」などのヴァネーゲムの言葉が多く用いられた。また、ヴァネーゲムは、S Iのメンバーとして、67年にはニューヨークにわたりS Iアメリカ・セクションの結成に力を尽くしたり、68年の5月革命の際にはナント・コミューンのメンバーと接触してS Iの理論を伝達したりするなどの活動をしている(もっとも、68年5月には、パリで革命的情勢の煮つまりが誰の目にも明らかだったにも関わらず、彼は5月革命の直前にヴァカンスのためにパリを後にし、革命には参加しえなかった)。しかし、68年以降はS Iの内部で次第に沈黙するようになり、積極的な活動は行わずに、その「待機主義」をドゥボールらによって批判されると、突然、70年11月にS Iへ書簡を送り組織を脱退する。この突然の、だがある意味では予期されたヴァネーゲムの脱退に対して、ドゥボールとジャンフランコ・サンガイネーティらのシチュアシオニストは即座に情け容赦のない文書『ヴァネーゲムについてのS Iのコミュニケ』(『インターナシ

ヨナルにおける真の分裂』エディシオン・ジャン・リーブル、1972年、所収）を發表し、「ヴァネーゲームは、最初を除き、S Iの生を愛したのではなく、その死んだイメージを愛しただけだ。それは彼の取るに足らない生にとっての栄光に満ちたアリバイにすぎず、抽象的な全体性に貰かれた未来の希望にすぎなかったのだ」と、ヴァネーゲームの「全体性」理論の没歴史性、極度の抽象性を徹底的に批判する。

「S Iとは何であるのか、それは何をなすべきかについて、ついにまじめに何らかの正確なことを発言せざるをえなくなって、ラウル・ヴァネーゲームはすぐさまS Iを全てひっくるめて捨て去った。この瞬間まで、彼は常にその全てに賛成してきたのにである」という手厳しい言葉で始まるこの『コミュニケ』は、ヴァネーゲームが初期の数年間（61-64四年）に斬新な理論をシチュアショニストにもたらしながら、その後、いかにして陳腐化し、待機主義者と化していったかを正確に総括している。

ヴァネーゲームはS Iのメンバーであった時期からすでに、生活費を稼ぐために『現代世界百科事典（EDNA）』の編集に匿名で加わるなど、その文才と博識を生かした仕事に携わっていたが、S I脱退後はいかなる遠動からも遠ざかり、エッセイや歴史の著作、百科事典の執筆などの活動に没頭する。S I脱退以降の著書として、『快樂の書』（79年）、『自由精神の運動』（86年）、『生者へのアピール—彼らを支配する死とそれと手を切る好機についての』（90年）、『スキュトネール』（91年、ベルギーのシュルレアリストについての評伝）、『スターリンの手紙—ついに和解した東西の子どもたちへの』（92年）、『キリスト教への抵抗—異端、その起源から18世紀まで』（93年）、『異端』（94年）、『中高生への警告』（95年）などがあるが、それらはいずれも『若者用処世術概論』を焼き直したエッセイか、現代の問題から逃避して歴史を過去のものとして扱った退屈な歴史書にすぎない。

官僚制資本主義はマルクスのなかに自らを合法的に正当化するものを見出してきた。ここで重要なことは、新資本主義の諸構造—今日、これらの構造が再組織化されているということ自体のなかに、ソ連の全休主義に対する賞賛が含まれている—を強化したというあやしげな功績を正統マルクス主義に与えることではなく、疎外に関するマルクスの最も透徹した分析が極めて当たり前の諸事実にまでいかに一般的に当てはまるかをはっきりと強調することである。そうしたごく当たり前の諸事実は、その魔法の甲羅をはぎ取られ、1つ1つの身振りのなかに物質化されて、ただそれだけで、しかも日ごとに、ますます多くの人々の生活を形成するものとなっている。要するに、官僚制資本主義は、疎外という明白な真理を含み持ち、マルクスが期待しえた以上に首尾よくこの真理を誰にもわかるようにし、貧困が軽減して実存の凡庸さがじわじわと浸透するにつれて、それを当たり前の真理へと変えたのである。恒久的貧困（ポペリズム）は必要最小限の生き延び〔=生き残り（survie）〕の面で広がりを見失ったぶんだけ、生活様式の面で深さを取り

もどしているのだ。少なくともこれこそが、満場一致で共有されている感情であって、この感情によってマルクスも、退化したボルシェヴィズムが彼から引きだしていたあらゆる解釈から洗いきよめられることになる。たとえ平和共存の「理論」が、このような自覚を加透すべくちょうどよい時に介入して、疑心暗鬼を押しすすめたあげくに、そうしようと思えば理解しないでもできたはずの人々に向かって、華々しい（スペクタキュラー）意見の対立にもかかわらず、搾取者どうしの間での了解は可能なのだということを暴露するにしても、少なくともこのような感情だけは共有されているのである。

## 2

ミルチャ・エリアーデ\*1は書いている、「いかなる行為も宗教的行為になる資格がある。人間の実存は平行する2つの面において、すなわち、時間的なもの、生成、幻想の面と、永遠、実体、現実の面とにおいて同時に実現される」と。19世紀になってこれら2つの面が乱暴に切り離された〔=離婚させられた〕ことによって、権力にとっては現実を神の超越のなかに浸したままにしておいた方がよかったことが証明される。もっとも、改良主義（レフォルミズム）の正しさは次のようなかたちで認めねばなるまい。すなわち、改良主義は、ボナパルトが失敗した地点に立って、生成を永遠のなかに、現実を幻想のなかに溶け込ませてそれらを一つにしているのである。生成と永遠、現実と幻想とのこのような合一は教会での結婚の秘跡に値するのではなく、単に持続しているだけである。この持続こそ、共存と社会平和にたずさわる管理者たちがそうした合一に対して要請できる最大のものなのだ。このことによってまた、われわれは自らを—誰も逃れることのできない持続という幻想の展望の下で—抽象的時間性の終焉として、また、われわれの行為の物象化された時間の終焉として定義するように仕向けられる。これは次のように言い換えねばならないのだろうか—疎外の陽極において、われわれ自身を社会的疎外の終焉として、人間が社会的に疎外されている段階の終焉として定義する、と。

## 3

原始的な人間集団の社会化には、神秘的で恐るべき自然の力に対してより効果的な闘争を行おうとする意志が示されている。しかし、自然環境のなかで自然と対抗すると同時に自然と一緒に闘争すること、少しでも余計に生き延びる機会を自然からもぎとるために、どれほど非人間的な自然法則にも従うこと、こうしたことは、より進歩したかたちの攻撃的防衛を生み出したただけだ。すなわち、制御されてはいないが、影響力のある自然の力がたえず押しつけてくる諸矛盾を高次のレベルで示すような、より複雑で、より非原始的な態度を生み出したにすぎなかったのである。自然の絶対的支配との闘争は、社会化されることによって、原始的な疎外、つまり、自然的疎外を少しずつ、それも別のかたちで同化するにつれて、勝利をおさめてゆく。自然的疎外との闘争において、疎外は社会的なものとなったのである。技術文明が発達した結果、

自然の最後の抵抗地点——技術力ではこれらの抵抗地点をなくするにいたらなかったが、それは当然である——とぶつかることで、社会的疎外が露呈したが、それは偶然のことなのだろうか。テクノクラートたちは今日、美しくも人道主義的な心の昂りに駆られて、原始的な疎外を終わらせようとわれわれに提案し、技術的手段をさらに発達させようと唆している。そうなれば、こうした手段「それ自体」によって、死、苦痛、不安、生きることへの疲労感と効果的に戦うことができるはずだというのである。しかし、奇跡というものが存在するとすれば、それは死をなくすことにあるよりも、死への羨望と自殺をなくすことにあるといえるだろう。死刑を廃止するといっても、死刑がなくて残念だと思わせるような廃止の仕方がある。今日まで、技術の特殊な使用によって、あるいはまた、より一般的には、人間の活動を規定する経済的・社会的文脈によって、苦痛と死の機会は量的には減少してきたが、その一方で、死は各自の生のなかに不治の病として居座っているのである。

#### 4

先史期の採集時代につづいて狩猟時代が始まると、諸々の氏族が形成され、生き延びの機会を増やすようにと努める。このような時代に貯蔵所と狩猟場が設けられ、その境界が定められたが、それらは当の集団のために開発され、部外者はあくまでもそこから排除されている。この禁止は、当の氏族全体の救済がかかっているだけに絶対的なものである。その結果、自然環境のなかでより快適な定住ができるようになり、またそれとともに、自然環境の厳しさからより効果的に身を守ることができるようになった。まさにそれらのおかげで自由が獲得されたが、今度は、この自由が当の氏族の定めた境界の外に自らを否定するものを産みだし、排除され脅威となった諸集団との関係を組織することでこの集団が自らの合法的な活動を抑えざるをえないようにする。社会的に構成された経済的生き延びは、その出現の瞬間から、互いに矛盾した制限や制約や権利の存在を前提とする。今日まで歴史の生成は、土地、領土、工場、資本の所有から人間に対する権力の「純粹な」行使（位階秩序）にいたるまで、複雑な形式を有する経済的・社会的生き延びに対する一般的権力を1階級、1集団、1カースト、あるいは、1個人が専有する動きに応じて、また、それらを一手に引きうけるに応じて、たえず自らを定義するとともに、われわれ自身をも定義してきた。このことは初歩的事実としてはっきりと押さえておかねばならない。サイバネティックな福祉国家を天国とみなす諸体制との闘争のさらに向こう側に、当初は自然であった根本的な事態との闘争を拡大する必要性が現れる。しかも、この闘争の動きのなかでは、資本主義は逸話的な役割しか演じない。そして、位階秩序化された権力の最後の痕跡、すなわち、言うまでもなく「人類の中の猪の子〔の模様〕\*2」が消えないうちは、この闘いが消え失せることもないだろう。

#### 5

所有者であるということは、他人による享受を排除して財を横取りすることである。それは同時に、抽象的な所有権を誰に対しても認知することでもある。有産者は、人を実際の所有権から排除しつつ、排除された人々（絶対的には無産者たち、相対的には他の有産者たち）——有産者は彼らがいなければ無である——にまで自らの所行権を拡大する。無産者たちの方には、選択の余地はない。有産者は自分自身の権力を生産してくれるものとして彼らを占有〔＝独占的に所有〕し、疎外するのに対して、彼らは、自分の物理的生存を保証する必要性から、わが意に反して自分たち自身の排除に協力し、この排除を生産して、生きることの不可能性という様式に基づいて生き延びることを強られる。彼らは、排除されながらも、有産者を介して所有に参加することになるのだが、この参加は神秘的である。というのも、そもそも、あらゆる氏族関係とあらゆる社会的関係はこうして組織されたのに、不可避的な凝集の原理を少しずつ受け継ぎ、その原理に従って個々の構成員が集団の不可欠な関数となるからである（「有機的な相互依存関係」）。彼らが生き延びられる保証は、専有の枠組みのなかでの自分たちの活動次第であるが、彼らは、自分たちが遠ざけられている所有権を強化する。そして、この両義性によって、彼らの1人1人は自らを所有に参加するものとして、所有する権利の生きた小片として把握することになる。その一方で、この思い込みが強まるにつれて、その思い込みのせいで彼は排除されると同時に所有されたものと定義されるのである（この疎外の極限状態は、忠実な奴隷、警官、ボディー・ガード、百人隊長だ。百人隊長は自分自身の死とのある種の合一を通して、生命力にも等しい力を死に与え、破壊的エネルギーのなかで、疎外の陰極と陽極、すなわち、絶対的に服従する奴隷と絶対的主人を同一視する）。搾取者の利害＝関心においては、外見が維持され洗練されることが重要である。そこから何らかのマキャヴェリズムが当然の帰結として出てくるのではなく、あるのは単に生き延びようとする本能なのだ。外見を組織することは有産者の生き延び——これはこれで彼の諸特権の生き延びに結びついている——と結びつき、それは無産者の物理的生き延び——搾取と人間であることの不可能性のなかであくまでも生きねばならない生き方——にからんでくるのである。私的な目的での独占と支配はこうして元来、1つの実定（ポジティブ）法のように押しつけられ、そのようなものとして感じ取られるが、そのやり方は、否定的な（ネガティブ）普遍性のやり方なのである。専有権は、万人にとって価値のあるものとなり、万人から神の理性ないし自然の理性によって正当化されたものと見られることを通して、1つの一般的な幻想、1つの普遍的な超越、1つの本質的な法則のなかに客観化される。そこでは、各自が個人の資格で、自分の生きる権利と生活条件一般に対して割り当てられた多かれ少なかれ狭苦しい制限に耐えられるだけの快適さを見出すこととされているのである。

このような社会的文脈においては、疎外の機能を 生き延びの条件として理解しなければならない。無産者の労働は私的占有権の場合と同じ矛盾に従っている。そうした労働は無産者を、所有された者、占有を作り出す者、自己を排除する張本人に変えるが、しかしその労働こそが、奴

隷や農奴や労働者にとって生き延びるため唯一のチャンスを表す〔＝代表する〕のである。それゆえ、生存からあらゆる内容を奪い取ることで生存を持続させるこの活動は、ついには、容易に説明の付く不吉なやり方で見方を転倒することによって、積極的な意味を帯びることになる。単に労働が（旧制度（アンシャン・レジーム）における犠牲という形式の下で、また、ブルジョワ・イデオロギーや人民のと自称する民主主義における、人を愚鈍化する様相の下で）価値あるものとされただけではない。主人のために労働すること、良心に恥じることなく同意の上で自己を疎外することもまた、非常に早くからやはり、生き延びるために支払う、ほとんど異議をさしはさむ余地のない名誉ある代償になった。必要最低限の欲求を満たすことは、疎外を擁護する最上の策であることにかわりなく、それによって疎外は非の打ちどころのない要請に基づいて正当化され、最も見事に隠蔽される。疎外によって欲求は数え切れないほど多くなる。なぜなら、疎外によって満たされる欲求など1つもないからだ。今日、満たされない思いは自動車、冷蔵庫、TVの数によって測られる。人間を疎外するモノはもはや超越の狡智も神秘も持ちあわせていない。まさに具体的な貧困の状態でそこにあるのだ。今日、金持ちとは、貧しいモノを最も数多く持っている人のことである。

今までは、生き延びることによって、われわれは生きることができないできた。だからこそ、生き延びの不可能性から多くを期待しなくてはならない。今や、生き延びの条件が快適で、豊かすぎるせいで、われわれには自殺か革命のどちらかの選択しかないだけに、この生き延びの不可能性は、今後、いっそう異論の余地なく明白になってくるだろう。

## 7

疎外に対する闘争までもが神聖なるものによって牛耳られている。神秘の覆いとその横糸をあらわにし、搾取の諸関係とその運動の表現である暴力とを包みこむことをやめるやいなや、疎外に対する闘争が露呈し、電撃の空間、断絶の空間がはっきりと姿を現す。それは、粗暴な力と弱さを突然暴露されてむきだしになった権力——言わば、矢を射かけられればどれもこれもわが身の中するとはいえ、手傷を負うたびごとに当の襲撃者にはヘロストラトス\*3の呪われた評判得させることになる巨人——との、情け容赦のない白兵戦として、姿を現すのだ。権力は生き延び、誰もがそれで得をする。破壊の実践、世界の複雑さが触知しうるもの、結晶したもの、万人の手の届くものになる崇高な瞬間、奴隷叛乱、ジャクリーの乱\*4、偶像破壊者の叛乱、フランス革命時の〈怒れる者たち（アンラジェ）〉\*5やパリ・コミュン時の連盟兵(フェデレ)の叛乱\*6、クロンシュタットの叛乱\*7、アストゥリアスの叛乱\*8といった、鎮めることのできない叛乱、それに、未来を約束するストックホルムの愚連隊(ブルゾン・ノワール)や山猫スト、これらのことをわれわれが忘れられるのは、位階秩序化されたあらゆる権力を破壊することによってだけである。われわれはそれに専念するつもりだ。

神話的諸構造の磨滅とその刷新の遅れは、蜂起の意識化と透徹した批判を可能にしているが、それによってまた、革命の「行き過ぎ」の後に、叛乱を準備する脱神話化作業の延長として疎外に対する闘争を理論面で把握することが可能になる。それは、叛乱がその最も真実な、最も正し

く理解された様相において、理論家—蜂起の当事者たちに向かってその蜂起の意味を説明する役を引きずけた理論家—によって再検討され、船からものを投げ捨てるように、「そんなものを望んでいたのではない」と一言で片づけられる時である。蜂起の当事者にしてみれば、単に言葉によってだけでなく事実によっても脱神話化するつもりでいるのに、理論家たちはそんなことはお構いなしなのだ。

権力に異議申し立てをしているすべての事実には、今日、分析と戦術的展開が必要である。次のような集団と目から多くを期待しなければならない。

a 消費されるものがふんだんにある状態のなかで、自らの貧窮を発見する新しい プロレタリアート（あらゆる近代的な国々での若者の反抗の姿勢と同様、今イギリスで始まっている労働者の闘争の展開を見よ）。

b 細分化され、いかさま行為に堕した革命に不満を抱き、昔の理論家ならびに現在の理論家たちを博物館行きに処している国々（東欧諸国のインテリゲンチヤの役割を見よ）。

c 小作農（コロヌス）同然の警官（ポリ）と傭兵—彼らは超越性をあまりに熱心に信じる最後の闘士であり、その超越性の最上の予防ワクチンであるに対して不信の念を抱いている第三世界。

d リモートコントロールされた叛乱も、「水晶の夜」\*9も、同意の上での反乱も阻止できるS Iの力（「われわれの考えはだれの頭にもある」）。

\*1：ミルチャ・エリアーデ（1907－86） ルーマニアの宗教史家・小説家。第二次大戦後、ルーマニアを離れ、フランスで生活、その後合衆国のシカゴ大学で宗教史を教える。小説に『ベンガリの夜』（1950年）、『禁じられた森』（55年）、評論・論文に『イメージとシンボル』（52年）、『聖と俗』（57年）など多数。

\*2：「人類の中の猪の子〔の模様〕」 猪の子には背中に縞があり、それが成長とともに消えることを念頭に置いた表現。

\*3：ヘロストラトス 自分の名を不滅にしようとして、エフェソスにある有名なアルテミスの神殿に放火した。このため火刑に処される。禁を破って彼の名を言った者は死刑になるとされた。

\*4：ジャクリーの乱 1358年、パリ北部のボーヴェシスの農民層（ジャック）が、貴族・領主層に対して行った叛乱。彼らは、パリの政治家エティエンヌ・マルセルに指導されて、貴族を攻撃しその城館を略奪したが、軍隊によって壊滅させられた。

\*5：〈怒れる者たち(アランジェ)〉 1792年から93年にかけて、ジャック・ルー、ヴァルレらフランス革命の最左派を指してこう呼ばれた。ルーらは、市民的権利の平等だけでなく、社会的・経済的平等を求めて、課税措置、食料品の徴発、貧民への富の再配分など一連の社会主義的政策を掲げた。この〈怒れる者たち〉は、92年末には革命政府から追放されるが、その社会主義的思想は、その後のジャック・エパールらのウルトラ革命派やバブーフに受け継がれた。

\*6：連盟兵(フェデレ)の叛乱 連盟兵(フェデレ)とは、1871年、プロシア軍のパリ侵攻を前にしてパリを逃亡した政府の指示に従わず、パリにとどまりパリ市民とともにコミューンの側に立って戦った国民軍兵士たちのこと。彼

らの多くは、ベルサイユに逃亡した政府軍の攻撃に対して最後まで戦い、ペール・ラシェス墓地の壁の前で銃殺された。

\*7：クロンシュタットの叛乱 1917年、クロンシュタットの水兵たちは巡洋艦〈オーロラ〉号に支援されて、ケレンスキー内閣への叛乱を行った。クロンシュタットは旧ソ連の軍港。

\*8：アストゥリアスの叛乱 1934年10月、スペインのアストゥリアスの鉱業地帯での左翼叛乱。10月4日、急進党のアレハンドロ・レルーが組閣した内閣にファシスト的右翼諸党派の連合体であるCEDA（スペイン自治権同盟）が入閣することに抗議して、社会党がゼネストを呼びかけた。スペインの他の地域でのストは失敗したが、アストゥリアス地方だけは例外で、アナキストや共産党も支援する鉱山労働者のストが2週間にわたって戦闘的なストを展開するが、政府によるモロッコ兵部隊と外人部隊の投入によって多大な犠牲（逮捕者数千名、死傷者数百名）を払って、壊滅させられた。この叛乱は、1936年からのスペイン革命と内戦への本稽古と見なされている。

\*9：「水晶の夜」 1938年11月9日から10日にかけて、ナチスがドイツ各地で一斉にユダヤ人襲撃を行なった事件。

専有〔＝排他的所有〕は特殊と一般の弁証法に結びついている。奴隷制度と封建制度の諸矛盾が1つに溶け合っている神秘のなかで、とりわけ所有権から排除された無産者は自らの労働によって自らの生き延びを確保しようと努める。彼は主人の利害＝関心に同一化しようと努めるだけに、いっそう巧みにそれに成功する。彼が他の無産者たちと知りあえるのは、彼らもまた自分と似たような努力—労働力のやむを得ぬ譲渡（キリスト教は自由意志による譲渡を推奨するだろう。奴隷が「衷心から」自らの労働力を提供するとただちに、奴隷の身分は止むというわけである）、生き延びに最適な条件の追求、そして神秘的な同一化—を行なっているということを通してでしかない。生き延びようとする万人に共通な意志から生じた闘争は、それにもかかわらず、外見のレベルで行われるのであり、そうしたレベルにおいて、この闘争は主人の意志への同一化を活用し、したがって、主人どうしの対抗関係を反映する何らかの個人的な対抗関係を始動させることになる。搾取の関係が神秘的な不透明性のなかに隠蔽されたままであるかぎり、また、こうした不透明性の条件が存続するかぎり、あるいはさらに、奴隷という身分の度合いが生きられた現実の度合いを奴隷の意識において決定するかぎり、生き延びるための競争は、そうした外見の面で展開されるだろう（われわれは常に、対象であるという意識を客観的〔＝対象的〕意識と呼ぶまでになっている）。一方、有産者の方は、ある権利の認知に結びついているが、その権利とは、彼だけがそこから排除されていない唯一の者であるにもかかわらず、外見の面では、個人としての被排除者一人一人にとって価値のある権利である。有産者の特権はこのような思い込みに依存し、他の有産者たちと直面して彼らに楯つくのに不可欠な力もまた、この思い込みに依拠している。それが彼の力なのである。だがやがて、今度は彼がすべてのモノと人の専有を外見上、放棄し、主人としてというよりも公共福祉の奉仕者として、万人の救済の保証人として、身を処すようになれば、威信が力の総仕上げをし、彼は、個人的占有という概念そのものを外見のレベル（壊されたコミュニケーションを行うのに参照しなくてはならない唯一のレベル）で否定する特権を自らの特権のうちに加え、この権利を誰に対しても否認し、他の有産者たちを否定することになる。封建制の見地からすれば、有産者は、無産者、奴隷、兵士、役人、あらゆる種類の奉仕者と同じやり方で外見のなかに統合されるというわけではない。これらの者は非常にみすぼらしい生活を送っているため、その大半にとって、そうした生活を〈主人〉（封建領主、君主、家令、獄吏、大祭司、神、悪魔……）のカリカチュアとして生きる以外に選択の余地はない。しかしながら、主人の方も、このカリカチュアの役割を演じざるをえない。彼はたいした努力もせずにそれを成し遂げることができる。それほど彼は、孤立状態—ただ生き延びるしかない者たちが、彼をこの境遇に繋ぎとめているのだ—のなかで全面的に生きてると自惚れることにおいてすでにカリカチュアなのである。彼は、（過ぎ去りし時代の偉大さ、悲しみに望ましく強い味わいを与えていた過去の偉大さを持ちつつも）すでに今日となってはわれわれの同類なのであり、われわれの誰もと同じように、冒険の機を窺い、それに加わり、その中で自分を

完全に没し去る途上で自己を再発見しようとうずうずしているのである。主人が他の者たちを疎外するまさにその時に、彼らからつかみ取るものは、排除され所有される者としての彼らの本性的なのだろうか。もしそうであれば、主人は自分自身にとっても、搾取者として、純粹に否定的な存在として立ち現れてくるだろう。このような意識はほとんどありえないし、危険でもある。可能なかぎり多くの臣下〔＝主体〕に及ぼす権威と権力を増大させることによって、主人は彼らが生命を維持できるようにするのではないだろうか。彼らにまたとない救済の機会を授けるのではないだろうか（労働者は、自分たちを雇ってくれる管理経営者がいなければ、どうなるのか、とは19世紀の善良なる精神の持ち主たちが好んで繰り返した文句であった）。事実、有産者は自らを専有の要求から公式には排除する。自らの労働によって実際の生活を外見上の生活（この唯一の生活によって無産者は断固として死を選ぶことを阻まれ、主人は無産者に代わって死を選んでやることができる）と交換する無産者の犠牲に対して、有産者は有産者ならびに搾取者としての自らの本性を外見上、犠牲にすることで答える。彼は神話的に自らを排除し、万人と神話のために（たとえば、神とその民のために）奉仕するのである。彼は、余分の身振りを通して、驚異的なアウラで包んでくれる無償の行為を通して、この自己放棄に神話的現実という純粹な形式を与える。共同生活を放棄することによって、彼は幻想的な豊かさのなかにあって貧者なのだ。他の者たちが自分自身のためにしか、自らの生き延びのためにしか自己を犠牲にしないのに対して、万人のために自己を犠牲にする者なのである。そうすることで、彼は自らの置かれている必然性を威信へと変える。彼の犠牲はまったく彼の力に見合っている。彼は幻想としての生活全体の生きた参照点、神話的な諸価値の、触知しうる最高段階となる。並みの人間から「意志的に」遠ざけられることで、彼が目指すのは神々の世界の方であって、神性への彼の参与がどの程度まぎれもなく確かなものであるのかに応じて、彼が他の有産者たちの位階秩序のなかで占める位置も、外見のレベル（通常、容認されている唯一の参照レベル）において公認されることになる。超越を組織するうえで、封建領主は—さらに、相互浸透により、権力あるいは生産財の所有者たちも、程度こそちがえ—主役を演じるようになってゆく。この役は、彼が集団の生き延びを経済的に組織するうえで実際に演じるものである。したがって、集団の生存は、あらゆる面でまさに有産者たちの生存に結びついている。すなわち、あらゆる存在を所有することによって、あらゆるモノを持つ所有者になっただけでなく、同じように、自らの無類の、絶対的な、神的な自己放棄によって万人の自己放棄を強奪する者たちに結びついている（神々によって罰せられたプロメテウス神から人間たちによって罰せられたキリスト神にいたるまで、〈所有者〉の犠牲は通俗化し、神聖さを失って人間化される）。したがって、神話というのは有産者と無産者を統一し、彼らを1つの形式のなかに包みこんでしまい、その形式の下で彼らは、身体的存在としてであれ、特権的存在としてであれ、とにかく生き延びようとする必要性から、外見の様式に基づいて、さらに、現実の生活—日常的実践（プラクシス）の生活—の転倒した印の下で、生きざるをえないのである。われわれは、常にそこにおいて、ある神秘の彼方、あるいはその手前で生きることを待ち受けている。この神秘に、われわれの身振りのそれぞれは、従いながらも、それに対して抗議しているのである。

神話、すなわち、世界の諸矛盾が幻想のなかで解決される統一的絶対者、あるいは、秩序が自らを凝視し、自らを強化する、いつでも心地よい調べを奏でる調和のとれたヴィジョン、それこそが神聖なものの場、超一人間的（エクストラ・ユメース）な地帯であり、そこからは、多くの啓示のなかでも、とりわけ専有〔＝排他的所有〕の運動の啓示が念人りに締め出されている。ニーチェ\*1はこのことをはっきりと見てとり、こう書いている。「あらゆる生成（ドゥヴニール）は永遠な存在（エートル・エテルネル）からの罰すべき脱出であり、それは死でもって償われねばならない」。ブルジョワジーが封建下の純粋な〈存在〉のかわりに〈生成〉を置くことを主張するとき、実際に彼らの行うことは、自分が最大の利益を得るように、存在から神聖さを剥奪し、〈生成〉に神聖さを再付与することにすぎない。ブルジョワジーにとっての生成は、かくして、〈存在〉——もはや絶対的所有権の存在ではなく、相対的占有の存在——にまで高められるのである。つまり、進歩や功績や因果論的継起というブルジョワ的概念を伴った、ちゃちな民主主義的・機械的生成として現れるのである。有産者の生活そのものが、彼ら自身に自己を見せなくさせる。生死を決する契約によって神話に結びつけられた有産者は、ある財を積極的かつ排他的に享受する自分を把握しようと思えば、自分自身の排除を外見のうえで生きなければならない。そして、まさにこのような神話的排除を通してこそ、無産者たちの方は自分が排除されているという現実を把握するのではないだろうか。有産者は1つの集団に対して責任があり、1人の神の重荷を引き受ける。神の祝福と神の復讐に同時にさらされた有産者は、禁止事項を身にまとい、それに精根を使い果たす。神々と英雄のモデルであり主人である有産者は、プロメテウスやキリスト、すなわち、見せ物（スペクタクル）じみた形で犠牲に供されたすべての者——彼らがいるおかげで、「大多数の人間」は極端な少数派である主人たちのために絶えず自己犠牲を強いられることになったのだ——の素顔である（ただし、所有者の犠牲に関してはニュアンスをつけて分析するほうがいいだろう。たとえばキリストの場合、より正確には、所有者の息子の問題だと認めるべきではないだろうか。ところで、所有者は外見上でしか自己を犠牲にしえないのだとすれば、情勢がいや応なく要請する時には、実際にはまさに所有者の息子が生け贄に捧げられる。そのとき、生け費に供される当の息子は、本当は、まったく未完成な所有者、将来の所有を約束する下絵、単なる希望の種でしかないのだ。バレス\*2が1914年の戦争によってやっと自分の願いをかなえられたとき、ジャーナリストとして述べた有名な文章は、まさにこのような神話的次元において理解されねばならない。バレスはこう書いたのである。「われわれの青春は、青春の名にふさわしいように、たっぴりとわれわれの血を流しに行った」）。かなりぞっとするこの遊戯は、しかも、儀式や民間伝承に結びつく前に、英雄的な時代——王と部族の長が自らの「意志」に従い儀式に則って殺された時代——を経験したのだった。歴史家が請け合うように、厳かな殉教者は、たちまち囚人や奴隷、あるいは犯罪者に取って代わられた。苦しみは消え去り、栄光は残ったのである。

有産者と無産者双方の犠牲こそが、共同の運命という概念を根拠づけている。言い換えれば、人間の条件という概念は、一方の神話的犠牲と他方の犠牲的生活とのあいだの還元不可能な対立を解消しようとする、理想的で苦痛にみちたイメージをもとに定義されるのである。神話には、「生きる意志」とその反対物との弁証法を一連の静止的な瞬間のうちに統一し、それを永遠化する機能がある。紛い物でありながらいたるところで支配的なこうした統一性は、コミュニケーション、とりわけ言語において、その最も明瞭かつ具体的な表象〔＝代理〕に到り着く。このレヴェルでは、曖昧さはずっと明らかで、その曖昧さのせいで現実のコミュニケーションが存在しなくなり、分析者は馬鹿げた幽霊、すなわち、永遠でありながらたえず変化する瞬間としての言葉に委ねられてしまう。この言葉というやつは、犠牲の概念と同様、それを発する者に応じて内容を変えるのである。苦難に陥ると、言語は根本的な誤解を隠さぬようになり、参与の危機を引き起こす。一時代の言語のなかに、未完ではあるが常に切迫した全体的革命の痕跡をたどることができる。それらの痕跡は、社会転覆を予測させる胸のときめく恐ろしい徴〔J記号〕である。だが、いったい誰がそんな徴を真に受けるのか。言語を襲っている信用の低下は、人々が強い愛着を感じているにもかかわらず同時に不信の念を抱いている神話の場合と同じく、根の深い、本能的なものである。キーワードを他の言葉で定義することは可能なのか。どのような徴〔＝記号〕が、美辞麗句を弄して外見を組織するものを暴くのかを、文章の助けによって示すなどということが可能なのか。最良のテキストは自らを正当化してくれるものを待っている。マラルメの1篇の詩が反抗の行為を説明する唯」のものとして現れるとき、そのときこそ、何の曖昧さもないかたちで詩と革命の話をするができるだろう。そのような瞬間を待ち、それを準備することは、誰もが重要性を無視している最後の衝撃波としてではなく、まさに来たるべき行為の最初の反響として、情報を操作することである。

制御できない自然の力にうち勝って生き延びようとする人間の意志から生まれた神話は、1つの公安政策である。この公安政策はこれまで必要以上に維持されてきただけでなく、生を生き延びという唯一の次元に還元し、運動と全体性としての生を否定することによって、その僭主的な暴力を強めてきたのである。

神話は、異議を申し立てられると、その異議を統合する。遅かれ早かれそれらを自分の中に組み入れて、消化してしまうのだ。支配的な精神構造を破壊しようとするものイメージであれ概念であれのうちで、神話に抵抗できるものは一つとしてない。神話は事実と体験の表現の上に君臨し、そのような表現に自らの解釈上の構造（劇化）を押しつける。生きられた体験に対する意識は、組織された外見のレヴェルに自己の表現を見出し、それが私的意識を定義する。

償われた犠牲によって神話は養われる。どんな個人的生活にも自己放棄が含まれている以上、体験は犠牲と償いとして定義されねばならない。秘技への参入者（昇格した労働者、専門家、管

理者、すなわち、民主主義的に列聖された新しい殉教者たち)は苦行の代価とひきかえに、外見を組織するもののなかに立派なシェルターを受けとり、疎外のなかに快適に身をおちつける。ところで、集団用のシェルターは統一的な社会とともに姿を消し、残っているのはただ、万人用にそれを具体的に翻案したもの——寺院、教会、王宮といった普遍的な庇護の思い出——だけである。今でも、個人用のシェルターは残っている。その有効性はみんなが疑っているが、値段だけははっきりと知られている。

## 12

「私」生活〔＝「剥奪された」vie <privee>〕は何よりもまず形式上の文脈において定義される。たしかに私生活は専有〔＝排他的占有appropriation privative〕から生まれた社会的関係のなかで誕生するが、それに本質的な形式を与えるのはそれらの社会的関係の表現である。普遍的で異論の余地のないものであるが、常に異議申し立てにさらされているこの形式によって、占有は、万人に認められながら誰もがそこから排除された権利、すなわち放棄することによってしか手に入られない権利となる。どれほど本物の体験であっても、自らが囚われている文脈を打ち破らないかぎりには（その打破は革命という名を持つ）、その体験を意識化し、表現し、伝達するには、その根本的矛盾を隠蔽する徴〔＝記号〕を逆転させる運動によるしかない。言い換えれば、どんなに積極的な計画も、生活条件——そのあらゆる形式において、それは専有の条件にほかならないをラディカルに転覆しようとする実践（プラクシス）の続行を放棄すれば、社会的関係の表現の上に君臨している否定性からめ取られることを逃れるほんのわずかな機会も失ってしまう。鏡に映った像のように、それは逆方向に回収されてしまうのである。占有の運動は、すべてを全体化する見方——そこでは、誰の生活もすべてその運動によって条件付けられ、現実の力も神話の力も区別が付かなくなる（両方が現実で、両方が神話である）——からすれば、体験には否定という表現手段以外の表現手段を残さない。生活がそっくりそのまま否定性のなかに浸され、この否定性が生活を腐食し、その形式を規定する。今日、生活の話をする、首つりのあった家で綱の話をする〔＝差し障りのあることを話す〕ように響く。どの扉も、生きる意志の鍵をなくし、墓に向かって開いている。ところで、われわれの無気力な状態を正当化するには、もはや、さいころの一擲と偶然との対話\*3だけでは充分ではない。くたくたに疲れて家具付きの部屋で生きることをそれでもなお受け入れている者たちは、自らの日常の身振りの1つ1つのなかに絶望をはっきりと〔＝生き生きと〕否認するもの——本来なら、むしろ自分たちの想像力の貧困を絶望することだけを彼らに促したはずの否認——を観察するときよりも、ずっと気楽に自己について無気力なイメージを作り上げている。生きることの忘却とも言えるこうしたイメージのなかでは、選択の幅は、獣のような征服者と獣のような奴隷、聖人と純然たる英雄という両極端の間にしかない。この気楽な場\*4の空気が息のつまりそうなくらい耐えがたいものになってから久しい。世界と表象としての人間\*5は腐肉のような悪臭を放ち、それ以降、死体置き場を鈴蘭\*6の花壇に変えるべく現れる神もない。これまで多くの人間が死んできたのだから、論理的に考えて、人間が死ぬ

のは、死の大きな部分が、非常にはっきりとした理由から、われわれの生の各瞬間のなかに入り込むからではないのかと——神々や〈自然〉や生物学的法則からの解答をほとんどそっくりそのまま受け入れた後で——問うてみてもおかしくはないだろう。

### 13

専有は、存在の占有によるモノの占有と特に定義できる。それは、すべての反映が混じりあって区別のつかないイメージとなる泉であり濁った水である。専有が作用し影響を及ぼす場は歴史全体をカバーし、それはこれまで、行動についての2つの基礎的規定によって特徴づけられてきたように思われる。1つは、自己否定と犠牲（その客観的側面と主観的側面のそれぞれ）に基づく存在論であり、もう1つは、特殊と一般、個人と集団、私と公、理論と実践、精神と物質、知的労働と肉体労働などの間の根本的な二元論ないし分割である。普遍的占有〔appropriation universelle〕と普遍的接収〔expropriation universelle〕との間の矛盾は主人を自明なものにすること、ならびに、彼を孤立無援の立場に立たせることを前提とする。恐怖、必然性そして自己放棄というあの神話的イメージは奴隷、召使、つまり、脱皮と境遇の変化を熱望する者たちすべてに提供される。それは、彼らが所有に参加しているということを映し出す幻想にみちた反映であり、自然な幻想なのである。というのも、彼らは実際には自らのエネルギーを日々犠牲にすること（これを昔の人は苦役とか拷問とかと名づけ、われわれは労苦とか労働とかと呼んでいる）によって所有に参加しているからであり、このような所有によって自分たち自身が排除されるという意味＝方向でそうした所有を作り出しているからである。主人の方は、キリストが十字架と釘にしがみつくとように、犠牲としての労働という概念にしがみつくと以外に選択の余地はない。自分なりに犠牲を本物にし、自らの排他的な享受権を外見上放棄して、純粹に人間的な（すなわち、媒介なしの）暴力の使用による接収をやめることは、主人のすべきことなのだ。身振りの崇高さは始源の暴力をぼかし、犠牲の高貴さは特別の集団の人間が犯した罪を赦し、征服者の粗暴さは内在的に君臨する超越のなかに分散する。神々は諸権利の非妥協的な受託者であり、「〈所有者であること〉と、〈所有者であろうと意志すること〉」において平和を愛し平穩に暮らす羊の群れを引き連れた、飽くなき羊飼いなのである。超越への賭けとその賭けに含まれている犠牲は、主人の最も見事な征服の賜物であり、征服の必然性に対する彼の最も見事な服従の賜物である。何らかの権力を持つとやっきになりながら自己放棄の純化を拒否する者（ならず者あるいは小暴君）は、遅かれ早かれ獣のように窮地に追い込まれるだろう。あるいは、より悪いことに、そのような人間は、自分の目的以外の目的を追求せず、他人の精神の平穩に少しも譲歩せずに「労働」を考える者のように窮地に追い込まれるのだ。たとえばトロップマン\*7、ランドリュ\*8、プチヨ\*9がそうだが、彼らは、自由世界とかキリスト教的西洋とか国家とか人間的価値などの擁護を掲げずに帳尻を合わせようとしたために、最初から敗北を約束されていたのである。海賊やギャングや無法者たちはゲームの規則を拒否することによって〔主人の〕良心（神話の反映としての意識）を悩ませるが、主人たちはこの密猟者を殺すことによって、あるいは、彼らを憲兵にすることによって、「永遠の真理」——自分の身体で支払わぬ者は生き延びることさえで

きず、借金をして支払う者は支払った生の権利を得る、という真理——にその全能を返すのである。主人の犠牲とは、ヒューマニズムにその輪郭を与えるものであり、しかも——このことはきっぱりと了解しておいてもらいたい——人間的（ヒューマン）なものを滑稽なまでに否定するものこそをヒューマニズムとするものなのである。ヒューマニズムとは、外見上の犠牲のなかに、すなわち、自分たちの実際の犠牲をカリカチュアとして映しだすあの反映のなかに救済の希望の理由を見出す者たちが、主人自身の遊戯を真に受けて圧倒的多数で選出した主人のことなのだ。正義、威厳、偉大さ、自由……わめきたて、うめき声をあげるこれらの言葉は、アパルトマンで飼われる子犬にすぎないのではないだろうか。その子犬たちの主人は、子犬の首に綱をつけて通りを勝手に連れ歩く権利を英雄的な下男に奪い取られてからずっと、その帰りをじっと待っているのである。これらの語を使うことは、そうした語が実は権力を高め手の届かぬところに迫りやるのに不可欠なバラストであることを忘れることだ。そして、ある体制が、主人たちの神話的な犠牲がこんなにもありふれた形になって通俗化するのはいくなくと判断し、それらの形を破壊し執拗に追い回すのに懸命になったならば、それと闘う左翼にできることは、くどくどと同じことを繰り返す言葉遊びだけかもしれない。そのことに不安を抱くのも当然である。この左翼の言葉遊びでは、1つ1つの語が昔の主人の「犠牲」を喚起しつつ、新たな主人（左翼の主人、プロレタリアートの名のもとに労働者を銃殺する権力）の以前に劣らず神話的な犠牲を訴えるのである。犠牲という概念に結びつくことによって、ヒューマニズムは主人と奴隷双方の恐怖によって定義される。それは糞まみれの〔=びくついた〕人間性のなかの連帯にすぎなくなってしまう。しかし、どんな語も、位階秩序化されたあらゆる権力を拒否する誰かの行動の1つ1つを明確に説明するのに役立つようになるやいなや、武器としての価値をおびる。ロートレアモンと非合法のアナキストたちはこのことをすでに理解していたし、ダダイストたちもしかりである。

したがって、占有者は、存在とモノの所有を神あるいは普遍的な超越者の手に託す瞬間から有産者になるが、そのとき神の全能は、占有者のどれほど些細な身振りも聖化する恩寵として当の占有者にはね返ってくる。こうして聖別された所有者に、異議を申し立てることは、神や自然、祖国や人民を非難することになる。要するに、物質的かつ精神的世界から自己を排除することになるのである。「統治することも、まして統治されることもしてはならない」と、マルセル・アヴレンヌは巧みにもそう書いた。このユーモアに暴力をつけ加える者には、救済も地獄墮ちもない。事柄の普遍的な把握のなかにも、信者たちの偉大な回収者である悪魔のところにも、いかなる神話のなかにも、自分の占めるべき場所はないのである。というのも、彼はこれらすべての無益さを生きながらに体現しているからである。彼らはまだこれから発明せねばならない生活のために生まれた。彼らが生きてきたかぎりでは、彼らはこうした希望を持ちつつ、結局お互いを殺しあったのである。

超越における特異性から次の2つの帰結が派生する。

a 存在論に超越が含まれる場合、いかなる存在論も主人の存在と位階秩序化された権力をア prioriに正当化するのは明らかであり、主人はこの権力のもとで多かれ少なかれ忠実な、ぼけた〔…墮落した〕イメージとして映し出される。

b 肉体労働と知的労働、実践と理論との問の区別に重なるようにして、現実の犠牲としての労働と、それを外見上の犠牲の様式に従って組織したものとの問の区別が付け加わる。

ファシズムを説明するのに、それは—様々な理由のなかでも—神の殺害と神聖な大スペクタクルの破壊にとり憑かれ、悪魔に対して、転倒された神秘に対して、特有の儀式とホロコーストを伴った黒い神秘に対してわが身を捧げる一部のブルジョワジーの、信仰の表明（アクト・ド・フォア）、火刑（アウト・ダ・フェ）なのだとするのはかなり誘惑的なことだろう。神秘と大資本。

位階秩序化された権力は、超越なしには、イデオロギーなしには、神話なしには考えられないということも忘れてはならない。そのうえ、脱神話化〔＝迷妄打破〕それ自体もいつでも神話に取って代わられるのであり、そのためには、行為による脱神話化を非常に哲学的に「怠る」だけでよい。そうすれば、文字どおり雷管をはずされた脱神話化はすべて、痛みを伴わず、安楽死を待つだけのもの、要するに、人道的なものになってしまうのである。ただし、脱神話化に携わってきた当人たちを、最後には脱神話化することになる脱神話化の運動だけは別である。

ラウル・ヴァネーゲム

## 次号につづく

- ☆ 統一的な社会—この統一性のブルジョワ的廃棄と格闘している社会—に固有な全体性はどうなるのか。
- ☆ 統一性の欺瞞的な再構成は、消費において疎外される労働者を欺くに到るのか。
- ☆ 一方、細分化された社会において、全体性の未来とはいったいいかなるものとなるのか。
- ☆ この社会とこの社会に組織された外見のすべてを乗り越える、いったいいかなる予期せぬ手段によって、われわれは幸福な結末に導かれるのだろうか。

これらは、諸君が知っておくべきであったことだが、それはこの研究の第2部で述べられるだろう！

\*1：ニーチェ 引用は「ギリシア人の悲劇時代における哲学」第4節から。邦訳『ニーチェ全集2 悲劇の誕生』塩屋竹男訳、ちくま学芸文庫、327ページ。

\*2：モーリス・バレス（1862－1913年） フランス右翼の作家・政治家。『野蛮人の目の下で』（88年）、『自由人』（89年）、『ベレニスの園』（91年）からなる小説3部作『自我礼讃』によって「エゴチスト」の概念を徹底させつつナショナリストとしての政治的行動に積極的に関わる。89年には右翼陣営のイデオログとして代議士となり、パナマ事件やドレフュス事件で国家主義者としての主張を繰り返し、青年層に影響を与えた。その他の作品に、『根こぎにされた人々』（97年）、『兵士への呼びかけ』（1900年）等からなる3部作『民族的エネルギーの物語』や、『ドイツに仕えて』（05年）、『ラインの聖霊』（21年）等からなる3部作『東方の砦』。ここにある「1914年の戦争」の記述は、バレスの「大地と死者への崇拜」というナショナリスト的理想が第一次大戦で開花したことを指す。

\*3：さいころの一擲と偶然との対話 マラルメの有名な詩『さいころの一擲は決して偶然を廃棄しないだろう』を踏ま

えている。

\*4：気楽な場 原語はlieu d'aisance。しかし、これが複数形をとってlieux d'aisancesとなると、「便所」の意味になる。

\*5：世界と表象としての人間 ショウペンハウアーの名著『意志と表象としての世界』を転用したもの。

\*6：鈴蘭 5月1日のメーデーには、フランスでは鈴蘭を家族や友達などに贈るのがしきたりとなっている。なお、この日が祝日となったのは1947年のこと。

\*7：シャン＝バチスト・トロップマン（1849－1870年） フランスの犯罪者。カンク夫妻とその6人の子を殺害したとして70年に処刑された。

\*8：アンリ＝テジレ・ランドリュ（1869－1923年） フランスの有名な犯罪者。1919年、詐欺と背信の容疑で逮捕されたが、やがて1人の少年と財産のある中年女性や未亡人など10人の女性を殺害したとして起訴される。殺害の手口は、巧みに誘惑した後、首を絞めて殺害し、台所で焼いたとされ、どの死体も発見されていない。ランドリュは殺害を最後まで否認したが、有罪になり、ギロチン刑に処せられた。

\*9：マルセル・プチヨ（1897－1946年） フランスの犯罪者。ヴィルヌーヴ・シュル・ヨンヌ市の元市長であったプチヨは、ドイツによるフランス占領期の1942年から44年のあいだに27名を殺害した罪で起訴される。訴えでは犠牲者から財産を巻き上げた後、殺害したとされているが、プチヨは彼らを南米に行かせたと主張。その後の裁判では、プチヨはゲシュタポのスパイ60名以上の殺害を企て、うち19名を殺したが、それはレジスタンスの手段であると言って無罪を主張したが、結局、有罪となり、ギロチン刑に処される。

### 訳者改題

シチュアシオニストは、『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』誌第3号の論文「アラン・レネ以降の映画」のなかで、アラン・レネの初期の2作品、すなわちアウシュヴィッツのドキュメンタリー映画『夜と霧』と長編第1作『ヒロシマ、わが愛』（1959年、邦題『24時間の情事』）を高く評価していた。『夜と霧』については「見事な才能」によるすぐれた短編映画とだけ指摘していたにすぎないが、『ヒロシマ、わが愛』については「レネの作品の発展の上でも、また世界の興業（スペクタクル）映画史の発展の上でも、質的な飛躍をもった画期をしるすもの」であり、シャン・ルーシュのシネマ・ヴェリテの作品やレトリストの実験的映画を別にすれば「『ヒロシマ』は、おそらくトーキー映画の確立期このかた、もっともオリジナルな作品であり、またもっとも大きな革新をなした作品」であると、シチュアシオニストとしては最大限の賛辞を贈っていた。この肯定的な評価は、レネの作品が、映像と音声の分解、正確には、映像に対する音声の優位と、登場人物の動きと言葉によるのではなく彼らの「叙唱（レチタティーヴォ）」による作品展開を行うことによって、映像と音声の同調によってスペクタクルのフィクションを維持する既存の映画を解体し、真に新しい映画表現の可能性を開いたことに由来する。スペクタクルのフィクションの破壊という点では何一つ革新的な試みを行わなかった「作家の映画」や「ヌーヴェル・ヴァーグ」の映画監督たちとは異なり、レネのこうした手法は、ドゥボールの『サドのための叫び』（52年）や『比較的短い時間単位内の幾人かの人物の通過について』（59年）などの映画と多くの共通点を持っていた。それは、映像と非同調的な圧倒的な音声と言葉によって映像を異化し、映画を「状況の構築」のための一手段として利用するというシチュアシオニストの方法論にそったものだったのである。

しかし、レネの長編第2作『去年マリエンバートで』はこうした方法論を放棄し、人工的な映像と、登場人物の様式化された衣装と身ぶり、そして、ロブ＝グリエの陳腐で空虚な言葉によって「まがい物の神秘、コクトーの亜流」を組み立てたにすぎないと、シチュアシオニストはレネの「退行と欺瞞」を断罪する。『マリエンバート』によって、レネは『夜と霧』、『ヒロシマ、わが愛』の音と映像の異化的効果に基づいた批判的ドキュメンタリーの映画から物語映画へと移行したが、その際、レネはそれまでの手法を、物語映画のなかに取り込み、新しい映画の表現方法を発明するのではなく、むしろ、登場人物のわざとらしい大仰な身振りと人工的なセットに支えられた1920年代の無声映画に回帰した。その点で、レネの『マリエンバート』は、ビリー・ワイルダー監督が『サンセット大通り』\*1で描いたサイレント映画時代の女優ノーマ・ Desmondの時代錯誤的な身振りと同類の映画の退行なのである。

アスト)の最新映画を見るべきです。そうすれば、この秋の夜長の会話にも話題が尽きて困ることはなく、深い物思いに耽ることができるでしょう」—プルーストやカフカやジョイスが『エル』誌\*2のこの一節を読んでいたら、たいそう満足したことだろう。なぜなら、彼ら3人がそこで一役買っているからである。ほかならぬ映画の作者たちが映画館の入口で無料配布されたパンフレットのなかでそう断言している。「他の芸術領域—たとえば、プルースト、ジョイス、カフカ、フォークナー、その他多くの作家たちの小説—において観察されてきたことになって、ここでは、映画もまた、時代遅れになってしまった伝統的な語り的手法から解放されようとしているぞ」。そして、『パリ・プレス』誌\*3専属の映画愛好家(シネフィル)ミシェル・オブリヤンはきっとこのパンフレットを読んだにちがいでなく、自らすすんでこう明言している。「多くの観客が協力を拒むかもしれない……彼らは、〔レネを〕大嫌いな者たちの仲間入りをするかもしれない。ジョイスやフォークナーにも批判者はいたのだ」。

よくお分かりだろうが、もしロブ=グリエ\*4を好きでないなら、あなたはジョイスもその他の作家たちもはや読むに値せず、逆に、あなたがこれらの作者を高く評価するなら(あるいは、それは趣味がよいという話を耳にしたことがあるなら)、きっとあなたは『マリエンバート』\*5を好きになるにちがいない。こうしたテロリズム的宣伝があらゆる傾向の新聞、映画館の窓口のまわりの掲示板、それにももちろん、たいした資格もない馬鹿者たちのこだまによってばらまかれてきたのである。

事実、『マリエンバート』は様々に批評されてきたが、どんな批評もみな十把一絡げにしてよいわけではない(この問題は現代芸術に関するいかなる議論にも見いだされる)。たしかに、反対する者もいる。彼らは〔この映画の〕手前にいるのである。だが、『マリエンバート』という特殊なケースでは、そのような反対者はそう多くはなかった。むしろ、強圧的なあの宣伝全体のせいで、彼らはあえて反対意見を表明しようとはほとんどしなかったのである。だが、それができる者もいる。彼らは自分たちがその向こう側にいることを知っているのである(ジョイスは死後に代父の役を背負いこまされた\*6が、彼らはジョイス自身にその責任があるとはみなしてはいない)。

自らがこの種の映画と同時代の人間でありそれと関係があることを決して望まぬなら、できることは過去か未来のどちらかを支持することだ。政治的進歩主義の語彙を踏襲して言えば、この種の映画について「右翼」批評か「左翼」批評のどちらかを行うことである。もちろん、この欄の批評は「左翼」批評である。したがって、この映画を愛したり、恐れずに採用できる大人しい前衛をそこに認めた気になったり、「金獅子」像を与えたりした者たちは、きっぱりと捨ててやることにする。われわれには『マリエンバート』のなかに退行と欺瞞しか見出せない。しかもこのことは、レネの前作『ヒロシマ、わが愛』〔邦題『24時間の情事』〕をじかに参照してみても言えることである。

シチュアシオニストが現代芸術の真偽の裁き手であるのは、実際の参加者として彼らが現代芸術を知りつくしているからだ。シチュアシオニストは現代芸術はどうなるべきかを知っており、現代芸術をその未来によって、その後を継ぐより完成されたより複雑な—形式によって判断しているからである。高慢になった者も多い。彼らは、ここ数年来、ピカソの絵を前にしてもはや「自分の妹は6歳だが、これぐらいの絵は描ける」と言うだけだ。だが、そのために彼らは敬意を

表すに際しても、軽率な混同をしでかしてしまうのだ。現代的たらんとする作品にどのような意義があるのかを十分に識別できるのは、本物の前衛だけである。

映画作家が草案の段階で美しい映像を作るのを拒否することは、容易に想像できる。たとえば、彼がその映像を当たり障りのないものにしようとするのも理解できるだろう。だが、今の場合はそうではない。『マリエンバート』の映像は美しいものであるように望まれ、セットも突飛なものであるように望まれていたのだ。しかしながら、形式としての映像について確認できるのは虚無と、それからもちろん、自惚れだけなのである。凝固したように静止したままの身振り、衣装、まがい物の神秘、コクトー\*7の垂流振りを見るがいい。それは明らかに無声映画への回帰であり、1925年の審美主義である。そこに欠けているのは雪の玉だけである。誠実なドキュメンタリー映画作家レネを彷彿とさせるような断片もたしかにいくつか残っており、不幸な城が移動撮影で眺め回されている。しかし、それが何だというのか。ピストルを発砲する場面で凝固したように静止したままのところや、セーリグ嬢\*8のかぶったヴェールが風になびく場面が露出過剰や露出不足でスクリーンに映しだされるのだが、それらはまるで、とりわけこれだけはしてはならないと、ユーモアたっぷりの講義をうけているようなものだ。そのうえ、この同じ虚無が、サウンドトラックの特徴——愚かさ<sup>と</sup>無意味と醜さ——にもなっている。レネは、『モデラート・カンタービレ』\*9を作った外国の模倣者だちよりもさらに複雑に自らの『ヒロシマ』での実験〔＝経験〕を模倣する。そのあげくに、ヒロシマに立ち寄ったフランス人女性にフランス語で話しかける日本人の声を、サウンドトラックで巧みに用いたのを剽窃するため、レネはそこにイタリア語なまりを付けてしまっているほどだ。これだけでも、すでに突飛さは減少し、むしろ滑稽味を醸し出してさえいる。しかし、内的独白が突然現れ、その後ほとんどの時間、それが続くことを考えれば、滑稽味は昇華されている。それゆえここに、イタリア語なまりでものを考える世界初の人間が出現したわけである！

映画の宣伝はこう言っていた。「これらの映像に意味を与えたいとお望みなら、1つは見つかるでしょう」。いいだろう。それにこの際よい機会なので、これらの映像についてのコメントにも意味を与えてやろう。反対するのは、アプリアに私だとはかぎらない。不幸にも、観客がそこに見出せるさまざまな意味も、かなり物悲しい陳腐な内容に要約される。というのも結局、それらが言わんとすることは、明らかに次のようなことだからである。

—愛は盲目。

—1つの鐘しか聞かぬ者は1つの音しか聞かない\*10。

—生と死は2つの神秘。

—泉よと、言ってはならない\*11。

—女はよく気が変わる。

—自然の中にはどんな好みもある。

—その他いろいろ〔＝私は何を知っているだろうか〕。

『去年マリエンバートで』は多くの意味を付与することのできる映画だが、そこには興味深い意味は1つもない。この映画の内容——内容という語を使えるとしての話だが——は、無意味で無時間的であり、指人形芝居の上演よりもずっと、歴史や現実や生計から切り離されている。これは『ヒロシマ』の場合と正反対で、『ヒロシマ』は、正確には革命的とは言えないまでも、人々

の現在の行動に対してかなり共感的な立場をとっていた。映画の作者たちは「愛についての省察」に耽ったことを自慢にしている。だが、彼らの反省はその表現手段と同じように空虚なため、それは失語症についての省察になってしまっている。だからこそ、君たちの映画は無言〔＝無声〕なのだ！ ぞのことはマルセル・レルビエ\*12と『アール』誌\*13の1読者がまさしく指摘したとおりだ。マルセル・レルビエは、明らかに賞賛の意図をもって書いている。「これは異例の映画にとっての印象的な勝利であって、無声映画時代の印象主義が超越されて蘇っている」。

『アール』誌の読者の方も、匿名だが、マルセル・レルビエに劣らず熱狂的な賛辞を送っている。「ヌーヴェル・ヴァーグの代表者の多くが自分たちの先駆者に対して嘲りと同情しか抱いていないのに、1人の若い映画監督が、われわれの時代のための芸術を手探りで創造してきた人たちから、どのような恩恵をこうむり、何を受け継いでゆくことができるかを、ちゃんと認めて感謝しているのを目にするのは、励みになる（「『マリエンバート』あるいは無声映画への感謝」）。実際、この映画は、冷静に判断しても、また原則上からも、何も言うべきことのない映画である。『マリエンバート』は、芸術の疑似コミュニケーションに対する批判—あらゆる本物の現代芸術家が行う批判のなかにある肯定的なもの（われわれが常に指摘してきたこと）の対蹠地にある。この映画にはコミュニケーションなどないのに、作者たちは激しいコミュニケーションとやらを再現しているのだと愚かにも信じ、平気でそのことを強調しているのである。例の、王様は自分が裸であるの知らない、というやつで、仰々しい無を高慢にも見せびらかしているのだ。王様の真似も警察の流儀でなされる。「われわれの映画はいったい何故こんなにも美しいのかを独力で考えて、自分が知的で事情に精通していることを、自ら証明せよ！」と、こう言って人々は恐怖に陥れられるのである。

しかしながら、社会学的には注目すべき点がある。映画の宣伝の文句が、観客の数と同じだけ意味があると漏らしていたことである。SIが使い慣れている語彙を用いれば、これは専門家のデマゴグ的な任務放棄と言い表せる。彼ら専門家は、もはや自分自身の仕事をコントロールすることもできず、どのような宗派的—党派的—約束事から自分たちの閉ざされた言説を理解すべきかも、もはや思い出せないのである。誰もが好きなことを考えて良いではないか、というわけだ。そして、みんながこの映画を見て満足するのはまるで当然であるかのように仕向けるのである。このような卑屈さ—おまけに間違っ理解されている—は、あの精神のプジャード主義\*14というものに行きつく。それに、ロブ＝グリエが、自分で引き合いに出す重要で難解な諸々の作品（カフカ、ジョイス、フォークナー、以下続く。前の箇所を参照）をまさにこのような展望の下で常に読んできたということも大いにありうる。それらを読みながら、これらすべての作品には意味はないが、自分は意地が悪いので、自分には理解できなかったものにひとつ意味を与えてやったと、彼は、考えたかもしれない。選択は彼に任されていたのだ。

以来、ミシェル・ビュートル\*15は、幕間に観客に投票させて、いくつかの可能な結末部から選ばせる仕組みのオペラの計画を持ちだしてきた。それは、現代芸術の真の必要と展望にとって、造形分野で、ティンゲリー\*16の機械やそれと同種の日曜大作家のモビール絵画（これらの作品によって、彼らは美学的環境の古い諸条件を「乗り越える」のだと自慢している）が果たしている役割と同じ役割を果たしている。2回めの上演のときに、ミシェル・ビュートルが初演の

際に見つかった結末部を上演させることで満足し、どんな出だしが相応しいかを当日の観客に想像してもらうようにすれば、段階をもう1つ乗り越えられるだろう（もちろん、私はそのように想像する）。

『マリエンバート』——見ての通り、誰もがこの映画について自分なりに最も重要な真理を引きださねばならないわけだから、この映画の野望たるや、取るにたらないどころではなかった——の方はたとえば、それは実に空虚な映画だが、空虚と言っても、それはこの映画に内容を詰めこむことができるという意味ではない。このように〔作者に〕才能も想像力も欠けてているのは、それに呼応して、観客の側にも、めったにないほど興味や楽しみが欠けているからである。このような虚無は、ただ批評にとってのみ重みを持ったのであり、批評はそこに再び自分の場所を見出した〔＝儲けた〕のである。

『マリエンバート』の作者たちはバロック様式というレッテルを追求した。そう望んだからバロック的になれるというわけではない。とりわけ、ロココ様式の削形の映像に、あれほど貧相で曖昧な言葉（これと逆に、シュルレアリスムの詩や、ダダイズムの詩でさえもが全休として持っている豊かさ、ジョイスの豊かさなどを参照せよ）をかぶせることでバロック的になるわけではないのだ！ しかしながら、映画自体には偉大なバロックの伝統が存在する。スターンバーグ\*17やウエルズ\*18のような映画監督がそのことをすでに示している。彼らは廊下を通る術くらいは知っていた。ところで、惨めな羽毛の衣装を身にまとったデルフィーヌ・セーリグを見ても、多くの鳥女（ルイズ・ブルックス\*19や『上海ジェスチュアー』\*20に出てくる鳥籠の中のはし端役の女性たち）さえ思い出せない！ バロック映画を作るうえで、既成の、保証済みのバロック様式を映画化することに甘んじるのは、映画作りの手法としてはお粗末だった。さもなければ、ポルトガル建築\*21についてのどれほど平板な注釈でも、『アーカディン氏』\*22よりバロック的ということになるだろう。バイエルンのルートヴィヒ2世\*23がココ・シャネルと同じ資格で映画の宣伝の肋っ人に呼ばれているのは、単に彼の居城の点からだけでなく、彼の素行の点から言っても、バロック主義の好例である。ただし、ロブ＝グリエがルートヴィヒの素行に1つの意味も見出せなかったのは確かである！ 彼はデュヴィヴィエ\*24のような下らぬ輩の『わが青春のマリアンヌ』\*25に錯乱的な次元を与えられなかったが、それと同じように、『マリエンバート』のために律儀にも現地取材をした人たちの労に報いることもできなかった。このような素材を利用するためには、おそらくすでに自身がある種の開かれた理解力に達していなければならない。ウエルズが『アーカディン氏』の舞台でどのようにゴヤの版画を仮面に複製して利用していたかが思い出される。言わば、素材と同じレベルで仕事をしなければならないのだ。ところで、われわれの見るところでは、非常に意味深長な細部を指摘できる。それは、あの間抜けのロブ＝グリエがあるゲーム（ひょっとして、これは卓抜な演目になっていたかもしれない）を発明しようと思ひ立ち、中学生並みの哀れな抜け目なさで自分では成功したと思ひこんでいるところである。。彼が見出すことのできたものはすべて、サロンですでによく知られているちやちなトリックなのだ。しかも、それが映画の中では間違っって演じられている。

自惚れに満ちた過ちがこんなにも混入しているからには、レネのケースを再検討せざるをえない。したがって、（われわれはそのことを『アンテルナショナル・シチュアショニスト』誌第3号の論説で書くこともできたと思うが）レネが、映画愛好家（シネフィル）の教養しかない

他の「ヌーヴェル・ヴァーグ」の映画監督だちとは逆に現代芸術に精通しているというのは事実ではない。

「映画は、現代芸術の力によって豊かになるやいなや、現代芸術全体を覆う危機に合流する」と、シチュアシオニストたちは『ヒロシマ』について書いていた。レネも野望は持っていたが、今や、彼がTNP〔国立民衆劇場〕と『レ・タン・モデルヌ』の間で、またマチュー\*26の芸術とアクセロス\*27の思想の間で、モダニズムのトリックという環境以外には何ひとつ精通していなかったということに誰もが気づかねばならない。彼は、『ヒロシマ』をめぐる議論の際にアンドレ・ブルトンを参照したにもかかわらず、ロブ＝グリエに一任することによって分の力量のほどを正確に示したのである。

マルグリット・デュラス\*28から、新たな発見があるとは言えないが、まずまずの出来の台本を提供されて（そのデュラスにしても、『モデラート〔・カンタービレ〕』の企画に参加したとき、自らの不十分さ、とりわけ、批評感覚の欠如をはっきりと示した）、レネは自分か追い求めていたものの方向で何かをつくる機会にすでに恵まれていた。それが、言葉に支配された映画であった。

レネは、その短編映画から『ヒロシマ』にいたるまで、言わば、他のさまざまな文化領域に比べて映画が際立っておそろしく立ち遅れていたことに恩恵をこうむって、時間の流れをゆっくりと遡っていた。『ヒロシマ』は映画史の上では異論の余地なく現代の段階に属するものであったが、文化一般の進化に比べるとプルーストのあたりに位置していた。この動きを続けて、レネは最新の映画〔『マリエンバート』〕によって同時代の映画を作らざるをえないと思っていたのである。しかし、ロブ＝グリエに言葉を任せることによって、彼は欺かれた。レネは死んでしまった。彼は自らの文化的虚無を告白している。もう何もわかっていない。

ロブ＝グリエの言語について述べる必要があるなら、その実験はいつそうお里が知れている、と言っておこう。ランドン・アヴァンギャルド出版社の本を読んで高貴にして尊敬すべき退屈に閉じこめられながら、それでもなお彼の散文には「神秘的」なところがあるのではないかと思っていた者たちは、その散文が映画化されると、信じられないほどの空虚さを露呈するのを目の当たりにしたのである。〈眼差し〉派\*29は活版印刷の上でしかその見せ物じみた職務を果たせないのだ。

ロブ＝グリエの文章は、映画に関するレネの構想（言葉（パロール）に支配された映画に関する構想で、『ヒロシマ』ではまったく適切に使われていた）からして、『マリエンバート』の中心要素とならざるをえなかった。だからこそ、もう何もないのである。とは言え、計画は何と魅力的だったことか。〔ロブ＝グリエの〕眼差しのエクリチュールが〔レネの〕言語（ランガージュ）の映画と出会う、あるいは、ほとんど出会うというのだから。

それは反・物質を産み出す。ロブ＝グリエは、小説を破壊するには余りに遅きに失したが、それでもレネを破壊することにはなった。フランス語でものを書いてきた、あるいは、これから書きそうなすべての個人のうちで、ロブ＝グリエがこのような企画にとっては最悪の人間であることにどうして気づかなかったのだろうか。これは、レネがヌーヴォー・ロマンという陰気で間抜けなこけおどしを尊敬していたことの証拠である。そのために彼は芸術家として有罪を宣告されているのである。

『マリエンバート』に、今それよりも好ましい他の映画を対置しようとして、「映画批評」の精神からこれらの批判をしたのではない。そうではなく、これは、ある時までは興味深かった事態の推移が、道をまちがえて時期尚早にも終わりを迎えてしまったことを、悲しみつつ確認したまでのことである。双六になぞらえて言えば、もしロブ＝グリエがこの遊びを発明していたのだったら、レネは井戸に落ちていたところだ。

この〔レネの映画の〕失敗によって、偽のシネマ・ヴェリテ\*30の体系的な欺瞞（『ある夏のクロニクル』\*31の価値が上がるわけではない。客観的なアンケートだと自惚れている全く馬鹿らしい『ある夏のクロニクル』の価値が上がるわけではないのだ。客観的なアンケートであるどころか、実際は、人物、行われた質問、フレーミング調節、最終的なモンタージュ率の低さ、そしてそのモンタージュに意味を与える順序に関して、すでに選別が行われていたのである。このようなシネマ・ヴェリテは、ただ一つのことに関して残酷な真実をもたらすだけだ。彼らが意識していないがゆえに、メイキャップを施してごまかそうと思もしなかったその真実とは、調査をしている社会学者の男友達や女友達のばかばかしい言葉遣いやばかばかしい生活である。

われわれの社会やわれわれの時代がかかえでいる問題系の全体を何ひとつ理解しない人々からは、問題についての、ことのほか明晰な意識を引き出せると期待することは、映画でも他の方法でも不可能である。彼らに知性があれば、それぐらい解るだろう。われわれも、その痕跡が見えたはずだ。

最近の映画界で、常連の専門家や実業家に部分的に取って代わるようになった知識人たちに可能な独創性とは、最大限見積もっても、彼らの格別の愚かさという独創性もどきのものでしかない（ヒッチコックの愚かさが映画の正規の職人たちによく見かける愚かさであるのと回しように）。私の念頭にあるのは、H＝F・レイ\*32の小説に基づいて彼の協力で製作された『スペインの祭』である。この映画には、どこか突飛なところ（食事のときにアメリカ人ジャーナリストらと交わすオデオロジーに満ちた会話）があって、それはフランスで左翼知識人と呼ばれているものの生活様式をかなり典型的に示すものである。この映画——プロダクションの商売人たちによって作られている風には見えない——には左翼知識人の誠実さが見出される。しかし、この誠実さの限界はどこにあるのか。欺瞞と無知という、同じように左翼知識人に典型的なものが始まるやいなや、そうした限界が現れる。彼らはスペイン革命について全く無知である（わが物顔にふるまい、酒浸りでうすのろでサディストの数名のアナキストや、共産主義者たちに反撃する段になるとたちまちボーイ・スカウトごっこをするように思える1人のトロツキストを除いては、共和派陣営での生死をかけた闘争はまったく示されていない）。偽りの愛についての偽りのシネマ。この愛は、放棄（デゼルテ）すべき戦争には事欠かないにもかかわらず、こうした戦争において逃亡（デゼルテ）をそそのかす愛である。そのうえ、その愛が卑しい生活に打ち克つのか、それともブルジョワ化するかを見届けられるメロドラマの常套手段さえ欠いているのである。というのも、映画の出だしからして既にこの愛はブルジョワ化されたものになっていたからである。

したがって、日常生活の現実やスペイン戦争と同じくらい重要な問題について語るのだと言いつける人々も、ロブ＝レネ〔ロブ＝グリエとアラン・レネのこと〕とどっこいどっこいである。ロ

ブ＝レネは彼らよりもずっと退屈だが、何の話もしないだけの力は持ちあわせている。

しかし、われわれ——ここ数年、文化をめぐる続けている公式の議論において、態度決定を有利に運ぼうとする習慣などわれわれにはまったくないが——は本誌で、レネの最初の映画は明らかにスペクタクルの破壊についてのシチュアシオニストの諸テーゼの外で構想されたにもかかわらず、そのテーゼを補強してくれると言っておいた（「現代におけるスペクタクルの根本的な特徴は、スペクタクル自身の廃墟を演出することにある」、『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』誌 第3号）。レネがスペクタクルのなかでも最も大袈裟で最も虫の食ったものに再び陥ったからには、次のように結論せざるをえない。すなわち、以降の展開でレネに矢けていたのは、まさしくそうしたテーゼであるということ、そして、われわれ以外に、現代の芸術家は考えられないということである。

ミシェル・ベルンシュタイン\*3 3

\*1：アラン・レネ（1922-） フランスの映画監督。『ヴァン・コッホ』（48年）、『ゲルニカ』（50年）の短編ドキュメンタリーで映画監督としてのスタートを切り、アウシュヴィッツを扱った『夜と霧』（56年）で衝撃を与える。その後、カットバックやオフの声を多用した実験的な作品『ヒロシマ、わが愛』（邦題『24時間の情事』、脚本マルグリット・デュラス、59年）でカンヌ映画祭国際批評家賞を取り、大きな反響を得る。ヌーヴォー・ロマンの作家ロブ＝グリエの脚本を映画化した『去年マリエンバートで』（61年）は、ベルリン映画祭で金獅子賞を獲得し反響を呼んだが、現在と過去、現実と幻想を錯綜させるその手法はレネ独自のものと言うよりもロブ＝グリエのアイディアに負うところが大きかった。レヘヘごつん。その後の作品『ミュリエル』（63年）、『戦争は終わった』（66年）、『ヴェトナムから遠く離れて』（66年、ゴダール、ヴァルダ、クリス・マイケルらとの共作）などによってレネはヌーヴェル・ヴァーグの監督として分類されることが多い。

\*2：『エル』誌 フランスの女性誌。1945年、フランソワーズ・ジルーが創刊し、編集長を務めた。

\*3：『パリ・プレス』誌 フランスの日報。1944年に創刊され、70年に廃刊。

\*4：ロブ＝グリエ（1922-） フランスの小説家。『消しゴム』（1953年）、『覗く人』（55年）などの小説によってヌーヴォー・ロマンの騎手とされる。アラン・レネ監督の映画『去年マリエンバートで』（61年）の脚本、自らが監督した映画『不滅の女』（63年）によって、映画にも手を染めたが、これらはシチュアシオニストからこっぴどく批判されている。

\*5：『マリエンバート』 レネ監督、ロブ＝グリエ脚本の映画『去年マリエンバートで』（61年、94分）のこと。出演はデルフィーヌ・セーリグ、ジョルジュ・アルヴェルタツィ。

\*6：ジョイスは死後に代父の役を背使いこまされた 『去年マリエンバートで』の宣伝にジョイスが勝手に利用されたことを指す。

\*7：ジャン・コクトー（1889 - 1963年） フランスの詩人・小説家・映画監督。シュルレアリスムから古典派までの多様な作風で多くの詩集（『ポエジー』〈20年〉など）、小説（『ポトマック』〈29年〉、『大股びらき』〈23年〉など）を発表し、音楽、ダンス、映画も手がけた。映画作品としてはギリシャ神話を背景としたアヴァ

ンギャルド映画『詩人の血』（30年）、『美女と野獣』（46年）、『オルフェ』（50年）、『オルフェの遺言』（60年）などがある。いずれも、フィルム逆回しなどのトリック撮影を用いて幻想と現実の交錯を描いた作品である。レトリストだちとも親交があり、イズーのレトリズム映画『涎と永遠のための概論』をカンヌ映画祭で激賞した。

\*8：セーリグ嬢 『去年マリエンバートで』の主演女優デルフィーヌ・セーリグ。

\*9：『モデラート・カンタービレ』 イギリス人ピーター・ブルック監督がマルグリット・デュラスの脚本を映画化した1960年のメロドラマ。邦題は『雨のしのび逢い』。主演ジャンヌ・モロー、共演ジャン＝ポール・ベルモンド、ディディエ・オードパン。

\*10：1つの鐘しか聞かぬ者は1つの音しか聞かない。 「一方の意見は聞いて他方の意見は聞かないまま判断するのは不公平である」という意味。

\*11：泉よと、言うてはならない。 「泉よ、今後お前の水を私が飲むことはあるまいと、言うてはならない」というフランスの諺の一部。「将来、何々のこと——特に結婚——はしませんとみだりに誓ってはいけません」という意味。

\*12：マルセル・レルビエ（1888－1979） フランスの映画監督。第一次大戦後にヒューマニスト的な映画で注目された。1943年にIDHEC（パリ映画高等学院）を創設したことで知られる。映画作品に『エル・ドラド』（25年）、『ドン・ジュアンとファウスト』（25年）などのサイレント映画、『黄色い部屋の秘密』（30年）、『ポンペイ最後の日』（49年）など。

\*13：『アール』誌 1945年にパリで創刊された文芸週刊誌。編集長はアンドレ・バリノー。絵画、映画、演劇、文学を扱い、投書欄もある。

\*14：プジャード主義 南仏の文房具店主ピエール＝プジャード（1920－）が組織したプジャード運動に由来し、プチブル層の生活保守意識に根ざした偏狭で排外主義的な感情的愛国主義意識（ポピュリズム）をさして言う。プジャード運動とは、1953年、プジャードが、税制改革に反対する小売業者を組織してフランス商人職人防衛連合を創設して反税運動を展開し、翌年には、チュニジアを手放したマンデス＝フランスから多国籍企業、哲学者・知識人、外国人まで祖国に背く者をすべて攻撃するファシスト的右派政党にまで発展し、56年の総選挙では52議席を獲得するまでに躍進した運動。

\*15：ミシェル・ビュトール（1926－） フランスの作家、。厳密な時間構成で書かれた小説『時間割』（56年）でヌーヴォー・ロマンの作家として注目を集め、二人称小説『心変わり』（57年）でルノード賞を獲得、一躍有名作家となる。その後、『階段』（60年）、『モビル』（62年）、『サン・マルコの描写』（63年）、『毎秒810,000リットルの水』（66年）などの実験的な小説を発表する一方で、評論・エッセイなども多く書いている。ここで触れられている「オペラの計画」とは、1962年に雑誌発表された『あなたのファウスト』のことと思われる。

\*16：ジャン・ティンゲリー（1925－91） スイス生まれの彫刻家。廃物彫刻、動く彫刻で知られる、回転レリーフ「メタメカニズム」（54年）や自動デッサン機械「メタマティック」（59年）などを経て、60年、ニューヨーク近代美術館で「ニューヨーク讃歌」という名のイベントを行う。これは、騒音を発しながら動く廃品彫刻で、最後には自らの動きによって自己解体するものであった。

\*17：ジョゼフ・フォン・スターンバーグ（1894－1969年） オーストリア生まれの合衆国の映画監督。ギャングスターと運命の女（ファム・ファタル）という2つの新しいタイプの主人公を産み出したことで知られる。代表作にアル・カポネ時代のシカゴを舞台にしたフィルム・ノワールの先駆的作品『暗黒街』（27年）、マレーネ・ディー

トリッヒを主人公にした『嘆きの天使』（28年）、『上海特急』（32年）などがある。ドウボールは映画『スペクタクルの社会』でスタンバーグの『上海ジェスチャー』を「転用」して用いている。

\*18：オーソン・ウェルズ（1915－85年） 合衆国の俳優・映画監督。41年の『市民ケーン』で、映画の物語構造、モンタージュ、背景装置、カメラワークなど多くの点で映画手法に革命の変革を起こしたことで知られる。

\*19：ルイズ・ブルックス（1900－85年） 合衆国の映画女優。カンサス州ウィチタに生まれ、ニューヨークで踊り子をしていたが、25年に映画界に入り、ハワード・ホークスの『港みなどに女あり』（28年）などの作品に出演。これを見たドイツの映画監督G・W・パプストに見出され、1929年にドイツで、ルー・アンドレアス＝サロメをモデルにした『ルル』（原題『パンドラの箱』）に主演、そのエロティシズム溢れる「宿命の女」の強烈な姿で「ブルックス現象」と呼ばれるまでの世界的な名声を博したが、38年に映画界を引退。『カナリヤ殺人事件』（29年）ではルイズ・ブルックスはカナリヤの扮装をして現れる。

\*20：『上海ジェスチャー』 ジョゼフ・フォン・スターンバーグ監督の1941年の作品。ジョン・コルトンの同名の劇の映画化。出演ウォルター・ビューストン、ヴィクター・メイチャー。98分。

\*21：ポルトガル建築 もともとバロックという語は「いびつな形の真珠」を意味するポルトガル語barrocoから来ている。

\*22：『アーカディン氏』 邦題『アーカディン/秘密捜査報告書』。オーソン・ウェルズ監督の1955年の映画。スペインの記憶喪失の大金持ちの過去を調査する任を負ったアーデンは、調査を開始するが、出会った人々が次々と殺されてゆく、というフィルム・ノワールの映画。ドウボールは映画『スペクタクルの社会』でこの『アーカディン氏』を「転用」している。

\*23：ルートヴィヒ2世（1864－86年）若くして父マクシミリアン2世の後を継ぎバイエルン王となった。理想主義にあふれたロマン主義者で、芸術の支援を多く手がけた。特にワーグナーに心酔し、そのオペラに用いられた神話から発想した幻想的な装飾を施した城ノイシュヴァンシュタイン城を建てたことでも知られる。

\*24：ジュリアン・デュヴィヴィエ（1896－1967年） フランスの映画監督。トーキーの到来とともに30年代に全盛を極めたフランス映画の巨匠。代表作に、『舞踏会の手帖』、ジャン・ギャバン主演の『望郷』（共に37年）など。

\*25：『わが青春のマリアンヌ』 メンデルスゾーン原作、ジュリアン・デュヴィヴィエ脚本・監督、マリアンネ・ホルト、イザベル・ピア、ピエール・バネック出演の1955年の映画作品。ドイツの湖畔の古城を舞台に、美しい乙女マリアンネを愛慕するバンサンの思い出を、ドイツ・ロマン派風の神秘的な幻想のなかで描いた物語。

\*26：ジョルジュ・マチュー（1921－） フランスの画家。行家の息子として生まれ、高校の英語教師、ユナイテッド・ステイツ・ラインの広報担当を勤めた後、1947年以来、〈叙情的抽象（アブストラクション・リリック）〉を組織、1950年代前半には、アンフォルメル運動の最も目立った画家として活動。50年代末からは世界各地で展覧会を開く一方で、産業界と行政権力と結び付いた活動（セーヴル陶器、公園・記念碑設計、テレビ放送への協力など）によって「新しいルネッサンス」の旗手とされた。1957年3月、パリのクレベール画廊で、シュルレアリストの画家ハンタイとともにファシスト的教権拡張主義の示威行動を組織するなど、フランス右翼の復活の先頭に立って行動し、またアンフォルメル絵画の公開のアクション・ペインティングに際しては常に黒づくめの服装をしていたことから、「主任司祭」と揶揄されていた。

\*27：コスタス・アクセロス（1924－） ギリシャ生まれのフランスの思想家。第二次大戦期に、ドイツ・イタリア

軍の占領下のギリシャで共産党に入党、レジスタンスに参加。内戦期には、共産党から除名され、右翼政権に死刑を宣告される。戦後、パリに移住し、ソルボンヌで哲学を学び、62年以来、同大学の哲学講師となる。57年から62年まで、『アルギュマン』誌の編集長をつとめ、60年からはエディシオン・ド・ミニユイ書店の〈アルギュマン〉叢書を創設・主宰。著書に、『ヘラクレイトスと哲学』、『技術の思想家マルクス』（共に61年）『遊星的思考へ』（64年）など。

\*28：マルグリット・デュラス（1914－96年） フランスの作家。インドシナに生まれ、そこで過ごした少女時代を、『太平洋の防波堤』（1950年）などの作品に描くことで作家人生をスタート。50年代から60年代にかけてコミュニケーションの不可能を描いた『モデラート・カンタービレ』（88年）などの一連の作品を発表。映画にも関心が深く、『ヒロシマ、わが愛』（59年、アラン・レネ監督）、『かくも長き不在』（61年）などのシナリオを書くほか、『インディア・ソング』（74年）を自ら監督している。

\*29：〈眼差し〉派 ニューヴォー・ロマンの別称。ロブ・グリエの小説『消しゴム』（1953年）や『覗く人』（55年）が緻密な「眼差し」によって事物の細密な描写を延々と行い、物語を無化していることからこう呼ばれた。

\*30：シネマ・ヴェリテ 「シネマ・ヴェリテ」は「映画・真実」の意味。1850年代後半にジャン・ルーシュ、クリス・マルケルなどが試みた新しい記録映画につけられた名称。

\*31：『ある夏のクロニクル』 1961年、ジャン・ルーシュがエドガール・モランと協力して作った映画。シネマ・ヴェリテの手法を現代の都市社会を対象に用いて、カメラによる1960年夏のパリの街での社会学的アンケートを行った。本書第2巻141－142ページを参照。

\*32：アンリ＝フランソワ・レイ（1919－87年）フランスの作家。作品に『ピアノ・メカニック』（61年）、『野蛮人』（86年）など。

\*33：ミシェル・ベルンシュタイン 1957年S I 結成期以来のシチュアシオニスト。S I フランス・セクションで活動し、1976年脱退。

## 次の段階

---

S Iに現れた最も革命的な要素とは何か。最も革命的なというのは、最も多くの未来を孕んでいるという意味だ。さらに、どの方面が最も危機的な点なのか。この問いに答えるために、私はあたかも1人の哲学者と話をするかのように、S Iの綱領を分析することにする。大胆な企て、荒唐無稽な企てだ！ 私は、次の事実のなかに刷新の要素を見る。それは、われわれが「世界内存在」の奇怪さを、またわれわれの綱領の性質——われわれの綱領が、その表現において、現在手にしうる表現および受容の手段と両立し得ることから来る諸帰結——を、以前よりも明確に認識しはじめているという事実である。

S Iの独創的な綱領のうち、何が最も迷惑か、何が最も人の眠りを妨げるのか。この問いに哲学の用語で答えるのは明らかに馬鹿げている。しかしながら、今日の哲学は「哲学の放棄」（「ハンブルク・テーゼ」参照）というテーマの中にすっぽりとはまっているので、われわれにはある驚きを引きおこすチャンスがある。この驚きというものは、あらゆる情報理論家が「大量の情報」の伝達条件として認めているものである。

当初からすでに、シチュアシオニストの計画は革命の綱領であった。それは、世界の変革のための、実践的な、半ば政治的な、客観的な綱領であった。しかも、今現実には起きている変革——物象化を行いつつも、広く一般になされ、官僚機構相互の間でも起きている変革——と結びついてきた。他方で、この綱領は、相互主観的であり、欲望によって、あらゆる者の生活において疎外に根底から（ラディカル）反対するものによって育まれていた。それは湯きの混ざった飲物だったのだ。最初からわれわれは、指導的な管理経営者、社会学者、芸術家からなるトロイカ体制が存在することを意識していた。このトロイカ体制は、あらゆる欲望が誘導できる、あるいは、そうした欲望のエネルギーは1度も欲望にならずに欲求」に転換できるなどと人々に信じさせるために、金で雇われ体制である。指導者たちが、「ある社会が自らのことを考え、自らを自分自身に対して示すときに使うさまざまな道具の総体」を自分たちの目的のために接收することができたのは、単に1回限りの歴史の偶然にすぎないということもまた、われわれは同様に意識していた。この〔トロイカ体制の〕権力は、このうえなく多様な手段〔＝源泉〕に養われ、また、部分的には、スペクタクルや「情報」を伝えるのと同じ回路を通して広められる無知にも養われて、過小評価されているが、それだけにいっそうその効果は増大するのである。要するに、権力は、1人の個人が自分自身ならびに他人とコミュニケーションを行うのに用いるシステムに直結する道を所有するようになったのである（ところで、このシステムにおいてみんなが果たすべき責任は、権力を除いて、みんなにはっきりと認識されている）。これらの基本的事実は最初からすでにS Iのなかに存在していた。この古典的な内容は、革命理論に対するマルクスの古典的な評価基準——主観的側面を観念論者によっていいように活用〔＝搾取〕させないことに呼応していた。

われわれはこのような古典的な段階を乗り越えるところまで乗っている。このことは、他の運動シュルレアリスム、マルクス主義、実存主義などが熱くなりすぎた粟をもてあまして思わず落とすようになるにつれて、より明白になっている（かのヘーゲル主義者、かの哲学者のことも忘れられないでほしい）。たとえ彼の方はその弁証法がもとは主観的なもの客観的なものとの弁証法

であったことを忘れてしまったにせよ)。すでに述べたように、私は、それを乗り越えるものを次の事実のなかに見ている。つまり、われわれが「世界内存在」の奇怪さを、また、われわれの綱領が、その表現において、現在手にしうる表現手段と両立不可能であることから来る諸帰結を、以前よりも明確に認識しはじめているという事実である。「われわれの綱領」だけの問題ではないと、付け加えたい。この「疎外と疎外に対する闘争との極めて複雑な争い」(ルフェーヴル)に賛成するにせよ反対するにせよ、とにかく、誰もが自分に課せられた任務としてシチュアシオニストの綱領に参加してもらいたい。

シチュアシオニストの綱領の論理的な帰結をめぐって行われた議論の当初からすでに、この綱領に添った要求がかかげられ、[具体的な]構築が提案されてきた。だが同時に、これらの[構築の]イメージのいくつかについては、その性格が「空想的」、「ユートピア的」だとされ、要求のいくつかは「マニ教的善悪二元論」の性格があるとされた。出版されたテキストのなかにも、こうした一連の例は容易に見つかる。にもかかわらず、この問題へのアプローチは偶然の色合いが濃く、一時的なユートピアの合法性、それらの要求の革命的価値、物質的手段の必要性、あるいは、それとまったく逆に、初歩的段階で「われわれの理念を共同で充分厳密に考えること」(『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』誌 第2号)の必要性も力説されてきた。

私はこれらの指摘は、ある極の困難をともなっていたとはいえ、根底においては正しかったと思う。しかしながら、私が見るところでは、まさにこの点にこそ、綱領の第1段階に比べてすでに1つの前進があり、将来における大きな進展を期す可能性があるのだ。

アッティラ・コターニ

S I 中央評議会 (CC) は2月10日および11日、パリで開催された。CCの6名の委員 (アンスガー＝エルデは理由があって欠席) とパリにいた他の8名のシチュアシオニストが討議に参加した。イエーテボリ大会以降、ドイツ・セクションの何名かの構成員のS Iへの対立が重大なものとなったこと、そしてとりわけ彼らの雑誌『シュプール』第7号の内容、このグループがドイツの内外でS Iの指令を適用した同志を無視しあるいはそれに敵対したこと、また、ヨーロッパのいくつかの交化指導層と今や異論の余地のないまでに共謀していること、これらのことを考慮し、ドゥボール、コターニィ、ラウゼン、ヴァネーゲムが提出した動議は、CCのドイツ委員のうちの1人、クンツェルマンの除名と、プレム、シュトゥルムおよびツィンマーの除名を要求した。ナッシュは『シュプール』の責任者らの策謀を非難し、その内容を公に取り消す要求を支持したが、除名を主張することまではしていなかった。しかしながら、この問題についての議論の後、ナッシュも除名を支持する側に回ったため、彼らの除名が5対3で決定された。クンツェルマンはCCのすべての批判に自ら同意したが、個人的には非難されている事実のどれにも責任がないと主張していた。だが、彼はその時他の者が実際にS Iに従わないのを放置し、その問題を解決できなかったゆえに、除名者のなかに放置された。この除名はただちにビラ『身体を乗り出すな!』によって発表された。その場にいた人間で、問題とされなかったにもかかわらず、そのとき除名者と立場を共有することを表明した唯一の者は、ローター・フィッシャーである。それゆえ、彼も除名された者の中に数え入れねばならない。

この問題が解決されたので、CCは文化と日常生活の正確な定義について、またスペクタクルと、われわれがここに結集しうる介入の力との間の弁証法的な関係について討議した。理論的な議論が開始されたが、それは今年中にシチュアシオニストの概念を収めた1冊のポケット辞典として首尾一貫したかたちで発表されるはずである。デンマークの「人民大学」を創造的に転用する決定が下された (E・シモン夫人の研究『スカンディナヴィアの国民的覚醒と民衆文化』発売元PUF、を参照)。CCはウーヴェ・ラウゼンにドイツでのS Iの新しい雑誌『デア・ドイチェ・ゲダンケ [ドイツ思想]』の編集を委ねた。

除名に関しては、S Iのメンバーになることが容易すぎる今の状態をより厳しくコントロールし、どんなことにも耐えうる構成員を選別することによって、除名者の数を少なくするのがよいということでCCは合意した。さまざまなシンパが、納得したふりをして何かを手に入れられると思っているようだ (例えば、S Iのスカンディナヴィア・セクションに入るのは「ヌーヴォー・ロマン」の流派に入ると同じくらいたやすいということは周知の事実である)。この合意が適用されるならば、S Iは、あと数十名の除名だけで、すなわち最小の犠牲で、その任務を達成することを期待できるだろう。

『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』第2号は再版中である。コレクションを完全なものにするため希望者にお送する。

\*

本誌前号の一部にかなりの数の訂正\*1が必要である。それらは誤ったまま印刷屋に回ってしまった。細かなことは言わずに、訂正した結果だけを指摘する。30ページ第1行は「警察によって意図的に」、39ページ第10行は「『整備された領土』に残された最後の逃げ場所」、41ページ第2行は「消費と自由な時間の社会は、空虚な時間の社会、空虚を消費する社会として生きられる」、41ページ第13行は「善良な人々をひどく憤慨させたものだった」、46ページ第13行は「偽造された欲求」、72ページ第13行は「疎外に対して行われている闘いのなかに常に再生してくる疎外の可能性を指摘することは正当なことであるが、その場合、これらすべては最も高いレベルの探究（例えば、疎外全休についての哲学）において適用すべきであって、スターリニズム——不幸にもその説明はより粗雑である——のレベルで適用すべきなのではないということを強調しておこう」、85ページ第5行は「宗教ではない。（……）この対立である」、104ページ第10行は「文化的資源を所有する者にとって」となる。

最終的に、『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』第6号のほとんどの部冊は、これらの誤植を訂正して書店に並んだが、その際、さらに2つの誤植を生むことになった。31ページの図版の説明文の最後は「しかも、それは、『ハイクラス』の物質的環境を何よりもまずそれらのモノで構成するために、これらのモノとその他のモノとの間に保ちうる自然な絆を断ち切ることによってなされる」とならなければならない。47ページの統一的都市計画の第2点は、「再建設」〈reedification〉ではなく、「物象化（reification）に使用される」と理解せねばならない。もっともこの場合、コターニィとヴァネーゲムの読者なら確かに自分自身を物象化してしまっているだろうが。

\*

アンドレ・フランカン\*2は、1961年3月以来、ベルギーでの大ストライキの後どのような政治的行動を取るべきかについて大きな意見の相違があったためS1のベルギーの同志から——したがって、他のシチュアシオニストからも——離れていたが、同年9月13日付けの手紙で、彼はS1のあらゆる思想が濁った水のなかで漁をする者の操る戯言だと判断する、もっとも彼自身のテキストに単純に剽窃されたいくつかのもの（本誌第3号、第4号、第5号に発表）は例外だが、とわれわれに知らせてきた。確認しうる最低限のことは、それゆえ、彼がもうわれわれに責任がないのと同じく、われわれももう彼には責任がないということだ。

1961年10月27日、ある回状が回ってきた。そのなかでモーリス・ルメートル\*3と他の2名の古き良き時代のアヴァンギャルドのレトリスト残党は、もはやレトリスト・グループが存在しないことをついに認めているが、ちっぽけな歴史と大展示会の中に「レトリズムが正当な場を占めはじめた今」、相互援助の協同組合のようなものを作り、そのメンバーが〔その書類に〕「レトリスト運動の誰それ、という書き方でそれぞれのサインをつける」ことを提案してきた。既に、他の3頭のよく保存されたマンモスの同意に確信を得て、署名者たちは、レトリズムが爆発した時代のアヴァンギャルドの衝突において彼らとは別の側でそれに参加した4人の人物に呼びかけてきたのである。要請を受けた人物のなかにはドゥボールも含まれていたが、彼は当然それに返事をしなかった。にもかかわらず、11月4日の手紙で、同じ者らが再び同じことを繰り返し、ずっと返事がないのはそれを受け入れたということで、乏しい署名者をすぐにも出版せねばならないが、その際、ドゥボールの名を公表することが許されたものと結論付けると言ってきた。ドゥボールはそこで彼らに電報を打って、「屑どもよ、どんな目的であれ、おまえらには私の署名を使用することは禁じる。気をつけろ」と答えた。彼らは賢明にもそこまでやめておくことにした。だが、彼らの行為はすでに奇妙である。これらの者の誰1人としてシチュアシオニストに近づくたった一つのチャンスも与えられてはいなかったのだから。

この特殊なジャンルのアカデミシャンらは、しかしながら、S Iの立場が彼らとは完全に敵対するものであることを知っている。彼らが限りなく分厚い雑誌（『ポエジー・ヌーヴェル』第13号、1960年10月）を正気の沙汰とは思えないほど激しくS Iの立場への反対に捧げ、われわれもまた彼らの理論を全く評価せず、彼らの多くの者の生に何も付け加えるところがないと声明していた（『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』第4号と第5号で）だけに、いっそうよくそのことを知っているはずである。この事件はそれゆえ、彼らがどんな思想も——彼ら自身の思想も含め——どれほど馬鹿にしているかをよく表している。だがまだ、その日和見主義のためには資金が必要だ。そして、彼らの客引きの巧妙さをみれば、それだけで、待つことさえしないこの不幸な待機主義者の軍団への彼らの志願と再志願の使命とは何なのかは明らかである。ほら、ソーセージを食え。

われわれは、本誌先号で、われわれに対する押収の脅威について触れた。そのせいで、統一的都市計画に関するテキストの選集を掲載した『シュプール』第5号のミュンヘンでの発行が1961年6月にまで遅れていたのである。11月9日、『シュプール』第6号の出版の後、一連の警察の急襲は、ドイツのシチュアシオニストの雑誌の全号について発見された全ての部冊を押収するという事態にまで発展した。シチュアシオニストは全員、長時間にわたる尋問を受け、そのうちの4名が起訴された。翌日、被疑者に連帯する31名の者——その大半がS Iのメンバーだが——の署名のある最初のビラが出され、そのなかでドイツ・セクションは、「1945年以来初めて、芸術家のところに家宅捜索が行わた」ことを強調している。ビラは出版禁止処分、裁判、さらには投獄まで含む下劣な脅迫の策動を暴露し（問題とされた体制転覆活動とは主として反宗教的活動であったようだ）、知識人と芸術家の連帯を訴えたが、そのことがまた司法の人

質となる新たな告訴を生んだ。だが、最終的には、この連帯はドイツでも外国でも実にすばやく表明されたので、押収された雑誌の返還を命ずるまでに当局を後退させた。そして残っていた裁判は機能停止になっている。

ドイツの雑誌『ヴェルニサージュ』が、1962年2月号で、ドイツの多くのシチュアシオニストの除名——それはこの3ヶ月後に突然起きたのだが——は彼らと風紀警察とのいざこざか、彼らの飲酒癖に関係していることをほのめかそうとしたので、現ドイツ・セクションは、残りのS Iの同意を得て、この現代芸術の「内輪雑誌」に3月15日付の手紙で、シチュアシオニストは全員この事件の責任者に今もこれからもずっと完全に連帯し続けると断言し、次のように明確に述べた。「彼らの除名の動機は、まさに、彼らがS Iのラディカルな結論にすべて従うことを拒否したことにある。それゆえ、いかなる場合も、われわれはこれらの同志に対してその行動および芸術の反順応主義を非難したということはありません。われわれは、『ヴェルニサージュ』の編集部の観点——すなわち、諸君の貧しい商店主、召使い、淫売の観点——からすれば、われわれはもっとひどいと主張したいとさえ思っている……」

それに、S Iの恒久的連帯の形式の1つは、2名のドイツ人芸術家をS Iのブラックリストに載せることであった。この2人は、この機会に『シュプール』誌に連帯する者のなかに数え入れられることを望まない主張し、むしろ自分たちの仕事は警察の側に立つことだと感じていることを暴露したのである。

\*

1961年11月、キンドゥ〔コンゴ（現ザイール）東部、コンゴ川（ザイール川）に上流の都市〕での、国連のコンゴ占領軍指揮下のイタリア人航空兵に対する待ち伏せの時にも、また、去る1月のコンゴロでの19名の聖職者への処刑の際にも、パカサ将軍\*4と東部州\*5出身の彼の兵士らの影を見ることができる。不幸にもパカサ将軍はすぐ後に逮捕され、同時に、レオポルドヴィル〔コンゴの首都、現キンシャサ〕のルムンバに適用された一連の粛清のプロセスの開始として——穏健派のギゼンガ\*6を投獄し、スタンレーヴィル大隊のルムンバ派反乱はルンドゥラ将軍\*7によって鎮圧され、多くの部隊が解休され、多くの兵士が銃殺されたのである。

\*

ジャン＝ルイ・ベドゥアン\*8の著書『シュルレアリスムの20年』を称賛するジャーナリストは、それを読んでいないか、シュルレアリスムが実際はモーリス・ナドー\*9の本が出た後も20年間存在し続けて来たことを知らなかったかのどららかだ。そう考えなければ、これほども空っぽの時期をこれほど平凡に記述した本に幸せそうに驚いている彼らの態度はよく理解できない。シュルレアリスムのこの20年間の歴史は、現代芸術の20年間を無視したものである。ベドゥアンが閉じこもっている狭い部門の中でさえ、彼の情報は価値がない。例えば、ヨルンはマッ

クス・エルンストの作品全体から極度に影響を受けたことを一度として隠したことがないのに、（105ページ〔邦訳97ページ〕で）アスガー・ヨルンがマックス・エルンスト\*10のコラージュのテクニックに負っているものが何なのかなぜはつきりと述べないのか。パリではまさにもはや何も起こらなかったのに、3大陸に存在したシュルレアリスト・グループを、パリの遠い郊外にある単なる支店のように公然と取り扱うのはなぜなのか。なぜ、1954年のランボー生誕百年の際の「レトリストたちが共同署名している」『始まりは立派だ』\*11と題したパンフレットのことを引き合いに出しながら（278ページ〔邦訳271ページ〕）、その後すぐに署名者のあいだで起きた論争を隠すのか。この論争はスターリニズムがその敵〔シュルレアリストのこと〕の陣営の中にまでもたらした災禍の極端なケースとして興味深い。このレトリストのフラクション——その一部は最終的にS1の結成に貢献した——は、階級闘争について語ったために、NKVD\*13〔内務省人民警察〕の殺し屋扱いされたのである。『大いなるトリックの常連たち』と題されたシュルレアリストのパンフレットは、彼らに対して、未来のモスクワ裁判に雇われた偽証者の経歴を予告していた。シュルレアリストが、周知のように、これこれの百貨店が炎上するとか、1939年という年が彼らに何かをあらかじめ取っておくというようなことを前もって予告することのできる自動記述（エクリチュール・オートマティック）の行使だけに自らの活動を限らないのは残念なことだ。というのも、論理的な話し方（ディスクール）を用いて彼らは何人かがNKVDに入るだろう——それはまだ起きていない——と予言したが、その年の自分たちの友人、ハンタイ\*14とポーヴェル\*14の現在は、もちろん将来も、彼らには見えなかったのである。

結局、ベドゥアンの散文のライト・モチーフとは、ほとんど各ページで語られる確信に満ちた「若者」、シュルレアリスムに大量に参加してくる「若い人々」であり、一瞬も休まず更新されるシュルレアリストの世代なのである。よろしい。新しい若者たちが、毎年、シュルレアリスムの計画のために立ち上がってきた、そのことは確かに良い兆しだろう。だが、その若者たちは何をしたのか？ この重大な点についてベドゥアンの物語は曖昧なままである。

\*

本誌第3号の論説記事の1つ「芸術の消滅の意味」は、1959年12月に、次のように指摘していた。リュシアン・ゴールドマン\*15が、『弁証法研究』において、社会生活の他の領域から切り離された自律的現象としての芸術は未来において消滅し、そこではもはや「生から切り離され」ないような芸術を構想すべきだということを認めようと望んだのだとしても、彼がそれを予言していたのは空の高みからであり、同時代の表現の中にそれを確証するものを認めることはしなかった。彼はまだ、既にマルクスにおいてあまりに不適切になっていた古典主義とロマン主義の対立に基づいて判断していた。彼の最近の進歩は無視しがたいところがある。『メディアシオン』誌 第2号（1961年 第2季）で、彼は「まったく仮定としての話」（強調はゴールドマン）として次のような考えを構想している。「事物と人物の非本来性は多少は普遍的なものとなったがラディカルな非本来性は存在できない世界において」、「文化創造に少なくとも2つ

の構造的段階、すなわち不在のテーマ的な表現と、より進んだ段階として、事物の徹底的な破壊の意図」を見出すことを期待できるはずだ。彼は遠慮がちにこう付け加えている、「言うまでもなく、前者は、カフカからロブ＝グリエにいたる現代文学の全休を特徴付け、おそらくマラルメやヴァレリーのような作品のなかにも既にその大部分が見いだせた。一方、後者は非具象絵画と現代詩の多くの重要な潮流の起源にありそれらを基礎付けている」。

彼はまた人々が物象化に抵抗している！ ことを発見して驚いている。153ページにはこうある、「今日われわれが一時的だが明確に述べることのできる仮定は次のようなものである。物象化はさまざまに異なるグループをグローバルな社会のなかに解体し、そこに統合する傾向があるが（……）、生物学的（……）現実にあまりにも逆行する性格を持つため、あらゆる個人のなかに、多かれ少なかれ強力にそれに反対する反応、すなわち多かれ少なかれ一般的で、多かれ少なかれ集団的なものとなりうる抵抗（レジスタンス）、創造行為の背景となる抵抗を産み出すのである（……）」。

それゆえ、かくして、1961年になって世界が、まったく変わらぬ状態で、「不在の文学と事物の破壊の芸術を産み出す」のを突然われわれは眼にするというわけだ。確かに、ゴールドマンはそれを知らなかったのだ。というのも、彼は自分の発見したものにあまりにびっくり仰天したために、予期せぬ精神の嵐によって自分か投げ入れられた無人島に、フランスの強制収容所と同じくらい多くの人々が往んでいるとは考えもしなかったからだ。そこで彼を待ち受けていたフライデーの痕跡は、百年前から続いてきたあらゆる文化革命の痕跡である。

したがって、われわれには、ゴールドマンが慎重に結論を述べている次の文章をS1の機関誌にさらに引用することはとりわけ刺激的だと思える。「この指摘は単なる仮説にすぎず、それは当然のことながら、何年もかかる長い集団的な探究作業によって厳密化され検証される必要がある。だがこのままの状態でも、この指摘はわれわれにはかなり示唆的であるように思える。この作業の利益そのものにおいて、それを明確に述べ、議論の素材として提供することは有益だったのである」。それこそが、この研究者がいかなる入物か暴露する、良質の慎み深さである。このことについては、だれもがわれわれに同意するだろう。

\*

本誌先号で問題になったあ美術商オットー・ファン・デ・ローは、1961年8月30日、『シチュアシオニスト・インターナショナル』のある論文についての公開の声明』と題した長い声明を発表した。そのなかで彼は、最終的に、事件についてのわれわれの説明のすべてを、だらだらともたつた言い方ではあるが、細部にわたって確認している。ただし、次の事実だけは別である。すなわち、彼が何人かの芸術家に先ずより気品あるセンチメンタルな言葉使いで圧力をかけた後、彼らと月額1000ドイツ・マルクで和解する契約を彼が電報で申し出たというふざけた行いを誰も疑いえないことを、彼は認めようとしなない。1ヵ月1200「新フラン」で1人の芸術家の生産を保証することが法外なことであるかどうか（とりわけ、1961年8月にはあまりに莫大な金額であるがゆえに「考えられない」この額が、8ヵ月後にはあまりにわずかな額

であるがゆえに再び考えられないものとなったような場合において)は、芸術経済を知るすべての者の判断に任せよう。彼はさらに、自分の否認を裏付けるために、これらの者たちの生産するものは何の価値もなく、誰の興味も引かなかったと述べている。彼自身の規準に従って判断しても、ここで彼は間違っており、嘘をついているが、この主張は、彼がその芸術家たちに興味を抱いていたのは彼らがS Iのメンバーだったからであり、彼らを介してシチュアシオニストの決定に何らかの影響を行使するためであったという事実をはからずも漏らしてしまっている。彼は部分的にはそれに成功したと吹聴している。さらには、それをし続けることができるとさえ言っている。というのも、彼はその声明の中で、今も何人かのシチュアシオニストと親密な個人的関係を持っていると偉そうに述べているからだ。彼は、そのことを論拠に、S Iの機関誌の情報の信憑性を疑問に付しさえしている。それゆえ、われわれは特定の美街商に対してわれわれの意思を表明する——そのようにすれば、われわれは他の美術商との結び付きを求めることになってしまう——べきではないこと、S Iを最高に強固な手段でもって外部の圧力から守ることを強調して、本誌 第6号の主張のすべてをそのまま述べる。そして、その証拠に、この事件に終止符を打つため、ファン・デ・ローが去る8月30日にその親密さと絵はがきとを秤にかけていたこの収集家の一味を構成しえた者全員が、以後、S Iを去らざるをえなくなったことを記しておこう。

\*

3月15日、スウェーデンで、ヨルゲン・ナッシュとアンスガー＝エルデ\*16が突然、シチュアシオニスト・インターナショナルに反対であることを宣言し、スカンディナヴィア・セクションを採算の合う、できればシチュアシオニズムの商標を付けた、いくつかの芸術的商品をすぐにも売り出せる1つの「バウハウス」——まだ1つである——に変えようと試みた。この策謀の展開はおそらく、ナッシュが依拠しようともくろんでいたS I右翼が最近になってSIから除去されたことによって早まった(『シュプール』の周辺では、計画は一種の国家シチュアシオニズムとして明らかになっていた。それは自律的な勢力として組織され、スイスとオーストリアへと拡張しようとして、その拠点を北欧に求めていたのである)。ナシストは、その宣言において、どうしようもなく呆れはてた嘘に訴えることもおそれない。2月10日の最新のS I中央評議会——いわば街頭の圧力の下で開催された!——で、少数派を脅すために、2日前から(いやはや!)パリを覆っていた内戦の雰囲気を利用したと思わせようとする始末だ。彼らは自分たちの企てにさらに1名を加えて、この憐れむべき少数派を大きく見せねばならないとまで考えた。この人物は、彼らが後になってCCのメンバーだったと主張しているが、S Iは全員がもちろんそれが嘘であることを知っている。ナシストのギャングどもはわれわれから何の和解も期待できない。

3月23日、SI中央評議会は、アントワープ大会まで、かつてスカンディナヴィア・セクションがカバーしていた地域(デンマーク、フィンランド、ノルウェー、スウェーデン)において

シチュアシオニスト・インターナショナルを代表するあらゆる権限、直ちに真のシチュアシオニストを再結集させ、反ナッシュ闘争に必要なあらゆる措置を命ずる権限を、デンマーク人のシチュアシオニスト、J・M・マルティンに委ねた。

\*1：訂正 以下の訂正は第6号の初版に対するものである。われわれの翻訳が依拠した第2版では、すでに訂正済みだが、95ページ第6行のみ、訂正漏れが生じ、「この対立」とすべきところを「1つの対立」としたままになっている。なお、ページと行の数字は本書のものに変えて翻訳した。

\*2：アンドレ・フランカン ベルギー出身のシチュアシオニスト。1961年に脱退。シチュアシオニストの活動と平行して『アルギュマン』誌にも協力しており、同誌に「W・ライヒと性の経済」（第18号、1960年）、「党、日常的なもの」（第25-26合併号、62年）などを発表。

\*3：モーリス・ルメートル（本名モイーズ・ビスミュト 1926-）フランスのレトリスト。1949年、イジドール・イズーと出会い、レトリズム運動に参加。以後、ドウボールらがレトリスト・インターナショナルを結成した時には、イズーの側に立ち、以後、終始イズーとともに行動した。50年に発表した著作『イヌとネコ』において、レトリズムに音学的次元を加え、また、より純粋なレトリズムの詩論を完成させるとともに、自ら「ハイパーグラフィック」と名付けた絵文字・象形文字などで構成されたレトリズム絵画や造形詩、「失語詩」と呼ぶ音響詩、『映画はもう始まった』（51年）などの映画まで幅広い作品によってレトリストの最も積極的で革新的な芸術家に数えられる。

\*4：パカサ將軍 ルムンバ派の特車と思われるが不詳。

\*5：東部州 コンゴ東北部の州。州都スタンレーヴィル。

\*6：アントワーヌ・ギゼンガ（1925-）コンゴ（現ザイール）の政治家。60年にルムンバ政府副首相となり、コンゴ動乱の際にルムンバとともにスタンレーヴィルに脱出、臨時政権を樹立。政治的には、当初、運部制を唱えるなど穏健だった。

\*7：ルンドゥラ將軍 反ルムンバ派であるモブツ派あるいはチョンベ派の將軍と思われるが不詳。

\*8：シャン＝ルイ・ベドゥアン（1929-）フランスの詩人、シュルレアリスト。1947年ブルトンと出あい、戦後期のシュルレアリズムの活動に参加する。詩、映画、ラジオ、シナリオ、「ピクトーポエム」と題したデッサン、オブジェ等の作品のほか、ブルトンの評伝、シュルレアリスムウ歴史などを著している。代表作に『アンドレ・ブルトン』（セゲルス書店〈今日の詩人〉叢書、1950年）、『シュルレアリスムの20年——1939-1959年』（61年／邦訳、三好郁朗訳、法政大学出版局）など。

\*9：モーリス・ナドー（1911-）フランスの批評家。1945年発表の『シュルレアリスムの歴史』によって、シュルレアリスム運動を歴史のなかに位置づけたことで知られる。

\*10：マックス・エルンスト（1891-1976年）ドイツの画家、シュルレアリスト。1919年、ケルンでダダの運動に参加し、一連のコラージュ作品やアッサンブラージュ作品を製作。21年にパリでブルトンと出会い、ダリとインドシナを旅行した後、24年、パリに戻りシュルレアリスムに参加。25年にフロッターージュを発見し、20年代から30年代にかけて一連の「コラージュ・ロマン」を製作。第二次大戦期は敵国人として強制収容所に入れられるが、41年に合衆国に亡命し、そこでブルトン、デュシャンらとともにシュルレアリスムの活動を行う。戦後、53年に

フランスに帰国するが、54年ヴェネツィア・ビエンナーレで大賞を獲得したためシュルレアリストを除名される。

\*11: 『始まりは立派だ』 1954年のランボー生誕百年祭で、ランボーの故郷シャルルヴィルへの彫像建設に抗議して、シュルレアリストとレトリスト・インターナショナルが共同で製作したビラ。本書252ページの訳注を参照。

\*12: NKVD〔内務省人民警察〕 1920年代の反革命摘発組織、GPU（統一国家保安部、ゲーペーウー）を1934年に吸収して設立され、30年代のソ連で、スターリンの粛清政策に多大な役割を果たした機関。1941年には、NKVDの任務の多くはNKGV（国家安全人民警察）に引き継がれる。

\*13: シモン・ハントイ（1922-） ハンガリー生まれのフランスの画家。1949年パリに居を構え、戦後期のシュルレアリスムに参加。50年代の半ばに、ポロックを「発見」し、アンフォルメル画家マチューに近づくと共に、その王党派的思想によってブルトンから離反。

\*14: ルイ・ポーヴェル（1920-） フランスの作家・ジャーナリスト。ジャック・ベルジェとの共著『魔術師たちの朝』（60年）で有名となり、61年、ベルジェとともにオカルト・政治・芸術を扱う総合雑誌『プラネット』を創刊。以後、その主幹として、神秘主義的新右翼の論陣を張る。1978年からは保守派の新聞『フィガロ・リテール』の編集長。

\*15: リュシアン・ゴールドマン（1913-70年） フランスの哲学者・批評家。マルクス主義の立場から社会学的方法論を文学批評に適用した。著書に『隠れた神』（1956年）、『弁証法研究』（58年）、『小説の社会学のために』（64年）など。『アルギュマン』の協力者の1人でもある。

\*16: アンスガー＝エルデ S I スカンディナヴィア・セクションのメンバー。スウェーデン国籍。1962年5月、ヨルゲン・ナッシュらとともに、スウェーデンで「バウハウス・シチュアシオニスト」を結成しS Iの分

はじめに

シチュアシオニストの問題提起には、つねに空間の要素が伴ってきたことは誰でもすぐに気が付くことだ。1950年代にドウボールは、すでに『都市地理学批判序説』を発表しているし、シチュアシオニストによる「統一的都市計画」や「心理地理学」といったテーマ設定は、本『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』のペーシを繰ってみれば、次々と発見されることだろう。

ここでは、つねに空間をめぐる階級闘争が提起されているのだ。

空間をめぐる階級闘争とは何か。

「心理地理学」「精神状態に応じたカルチエ」の構築、「漂流」という行動様式…。そこで提起されているのは、空間が人々の情動的な行動様式と密接に関連しているということの指摘とともに、既成＝規制の空間がわれわれから奪い取ってきたものを奪還することの必要性である。それゆえに、所与の空間の構造に絶えず亀裂を入れ続け、それを自らの精神状態に応じた形で再構築し続けることが必要であり、そのためにも、常に固定的な場に自らを置くことなく、空間的諸条件を素早く擦り抜ける「漂流」という実験的技法の開発が問われるのだ。

しかし、本『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』第3巻を読めば、当初からのシチュアシオニストのこの方針が、結果的に既存の都市計画の内に回収され始めたことがよく分かる。前衛的な建築家たちの行政あるいは資本の手になる「都市計画」への参加は、彼らの生み出した新しい技法を、そのまま新たなスペクタクル提供の場作りへと転用させてしまうことになったからだ。当初のユートピア的な「統一的都市計画」の路線は、現実の資本と市場のスペクタクル化の路線の前に、敗北が告げられようとしたのだ。だからこそ、「統一的都市計画」とは都市計画批判なのだ」というテーゼが再確認される必要が生まれたのだろう。

その結果、アンテルナショナル・シチュアシオニストは、改めて、こう語ることになるわけだ。

「S Iの統一的都市計画綱領の言う、実験的生活のために整備された『基地』とは、建物であると同時に、今、われわれが入りつつある歴史的同時代において、すでに日程にあがっているとわれわれの信じる新しいタイプの革命組織の常設の施設である。これらの基地が存在したあかつきには、それはまさに体制を転覆するものとなるだろう。それは未来の革命組織が頼るべきもっとも完璧な手段となるだろう」（本書30頁。一部筆者の改訳）。

アウトノミア——シチュアシオニストのイタリアにおける後継者たち

実際、このような下段としての基地＝空間は、その後の運動によって、さまざまな形で構築されてきた。パリでローマで東京で、あちこちの地区（カルチエ）はバリケードによって封鎖され、大学の建物や工場が占拠された。しかし、こうした空間の構築は、シチュアシオニストたちが予想したようには、「常設」のものとはなりえなかった。つねに、一時的で暫定的なものに止まった（その方が、シチュアシオニスト的ともいえるかもしれないが）のである。

もっとも、対抗的で永続的な空間の設営の試みが、60年代で終焉を告げたわけではない。むしろ、1970年代80年代は、西欧社会においては、この空間の占拠＝占有は、新しい左翼・新しい社会運動のひとつの戦略となったともいえるのからだ。

典型的なのは、空き家占拠の運動だろう。

80年代のヨーロッパで暮らしたり旅行した人々なら（特に、カウンターカルチャーや社会運動に関心のある人なら）、どこかで、この空き家占拠の運動と出会ったことがあるだろう。マドリードでもアムステルダムでもミラノでも、たいてい空き家占拠の運動体があり、占拠された空き家は、さまざまな運動の交流の場になっていた。

筆者自身、1980年代初頭、当時留学中のイタリアで、大学の壁に貼ってある次のような貼り紙をよく見たものだ。

「〇月〇日、午後〇時、〇〇に集合。〇〇の空き家の占拠をするので、家のない学生は結集せよ」。

イタリアにおいては、特に、この空き家占拠運動は、住宅不足問題への左翼からの回答として重要な戦術のひとつだったという印象が強い。実際、占拠されてしまうと占拠者の側に占有権ができてしまい、法律上の所有者といえども、なかなか追い出すことができなくなるのである。

こうした左翼の空間をめぐる政治の発展が、イタリアにおいて最も盛んだったのは、言うまでもなく、1970年代中期から後期にかけてのことだっただろう。日本においても「アウトノミア」の運動を代表して語られることの多い、あの「運動」の時代である。

アウトノミアと空間占拠について、ひとつ面白い例をあげてみよう。1970年代の初期、ミラノでの出来事である。当時ミラノ大学の建築学部を占拠していた学生たちが、住宅難に悩む生活困窮者の家族を大学に招き、そこで住んでもらうという運動を展開したことがある、もちろん、大学側は「関係者以外の立ち入り禁止」ということで、これに強く反発した。ところが、学生の動きを支持する教官たちの援助もあって、この生活困窮者たちは、大学の非常勤講師として扱われることになった。バリケード内部で、彼らを講師に、住宅問題の講演会やシンポジウムが開かれたのである。こうして、しばらくは、講師として生活困窮者家族の生活が大学構内で営まれることになったのである。もっとも、この運動も、そう長くは続かず、数カ月後、機動隊の導入で、解除になるのだが、運動の力もあり、生活困窮者家族は全員、電気・ガス・水道付きのほとんど無料の住宅を提供されるという「人道的」な生活権の保証がされたのである。

このように、アウトノミアをはじめとする、1970年代のイタリアの「運動」は、資本と市場によるスペクタクルの支配に対して、これに対抗的な自前のスペクタクル空間の構築を常に模索し続けた。それは、空間の占拠にとどまらず、自由ラジオの運動などに見られるように、市場

のメディアに抗する自前のメディアの構築という形でも展開されたのである。

アメリカ・インディアン（ネイティブ・アメリカンと呼ぶべきか）の格好で街路を駆け巡り、建物を破壊したり、機動隊と衝突するメトロポリタンのインディアンたちの運動や、あちこちの路上で繰り広げられた街頭演劇・パフォーマンス、思いっきり派手な格好をした学生たちによる自転車デモ…。そこで見られたのは、ガタリの言うように、開放的な運動の分子的な発展であった。

後に、獄中から見せられたメッセージの中で、アウトノミアのメンバーたちは、この状況を次のように語っている。

運動の生み出した〈第2の社会〉は、生産力、科学、技術、知識、豊かな共同性、という点で〈第1の社会〉そのもの、あるいは、それに比肩しうるだけの力をもっていた。闘争の新しい課題は、物質的労働過程とコミュニケーション活動との間で、情報化された工場の現実と、発展した第三次産業という現実の間で、増大する自己確認への要求を反映しており、また、それに先行してもいたのである。

運動は、豊富な、独立した対抗的な生産の源であった。賃労働の批判は、〈自己運営〉、福祉国家のメカニズムにおける下からの運営という形態をとって積極的で創造的な傾向を表現していた。

77年に全局面を占領したこの〈第2の社会〉は、国家権力に対して“対抗的なもの”であった。それは、真正面からの対決ではなくて、逃避、つまり、自由な空間と収入の強化増大への具体的な追及であった。

こうした〈対抗性〉は、運動のもつ貴重な与件であり、それはまた一方で、社会過程がいかに堅固なものであったかをも逆に証明してもいるのである。しかしながら、この対決には時間が必要であったのだ。時間と調停とが。時間と対話とが。

（「アウトノミアとは何だったのか——アウトノミア自身による統括」M・ダルマヴィーヴァ、A・ネグリ他、麻生令彦訳、『インパクション』25号、インパクト出版会、1983年）

しかし、周知のように、イタリアにおいては、77年を頂点として、こうした分子的な運動の発展はテロリズムの時代のなかで急速にその勢いを喪失していつてしまう。

レオンカヴァッロと社会センター運動——シチュアシオニスト／アウトノミアの現代の継承者たち

とはいっても、心理地理学に基づく空間を軸とする新たな政治の動きが、全く息を止められてしまったわけではない。90年代のイタリアにおけるカウンター・ムーブメントの代表である社会センターCentro Sociale運動、特にその典型例であるミラノのレオンカヴァッロの運動は、明らかに、40年の歴史を越えて、シチュアシオニストの空間の政治学の延長線上にあるといえる

だろう。

実は、このレオンカヴァッロ自体、70年代の「運動」の渦中においてその成立を見た基地＝空間＝カウンター・スペースである。今なお全国に30ほど存在するというイタリア社会センター運動の象徴ともいべきレオンカヴァッロが、歴史に登場するのは、1975年10月のことだった。ミラノの運動グループが、レオンカヴァッロ通りにある元医療器具工場跡地の大きな空き家の占拠を行ったのだ。総面積3600平方メートルというかなりの規模をもつレオンカヴァッロは、この後、ミラノを中心にイタリアのカウンター・ムーブメントにとって、永続的な基地＝空間として存続していくことになる。

アウトノミアのグループやロッタ・コンティヌア、アヴァンギャルディア・オペライアなどの左翼党派、アナキストなどの諸グループや個人が参加し、占拠委員会が設置さ牡運営を拒うことになった。皿ハ味深いのは、当初の教育面での活動だ。地域に居住する字の読めない人々への識字教育や労働者の再教育の場として、レオンカヴァッロは、大きな役割を果たしたのだ。労働協約によって保証された労働者への「150時間」教育（コース受講者は時間休暇が保証され、コースの単位によって中卒、高卒などの資格が与えられる社会教育講座。1コースが150時間なのでこう呼ばれた）の面での活躍などにより、不法占拠の場所であったにもかかわらず、当局も、彼らの活動を正式な労働者の社会教育活動として承認するようになった（このあたりがイタリア風なのだが）。

もちろん、ここでは、政治集会、演劇、ロック・コンサートを始め、ありとあらゆる対抗運動の催しものが行われてきた。と同時に、情報の発信と交流の場としてもレオンカヴァッロは、大きな役割を果たしてきた。夜には、どこからともかく多くの若者が集まり、ダベったり、政治論議をしたり、さらには、情報交換をしあった。こうして、イタリア資本主義の牙城たる大都市ミラノの一角に、資本や市場の原理から解放された（「資本から脱領域化」された）対抗空間＝カウンター・スペースが構築され維持されてきたのである。

当時、こうした社会センターは、ミラノ各地に続々と誕生し、70年代の「運動」の拠点として活動し始めていた。この時期に確認されていたセンターの役割には、先ほどよふれたような労働者・民衆教育活動、演劇や映画上映などの文化活動、若者に広がる麻薬に対する反薬活動、政治的活動としての反ファシスト活動、書店の経営なども含む図書館活動、スポーツ施設としての活用をはかるスポーツ教室活動、健康と女性問題についての活動などがあげられる。

当時のレオンカヴァッロのこうした活動は、「資本からの脱領域化の運動でありながら、結局、資本や政行の欠落部分を埋める社会活動として、資本や行政に奉仕している」という皮肉が出るほどに、広範かつ、強力なものだったという。

しかし、70年代後半から始まるテロリズムの時代＝鉛の時代の展開は、レオンカヴァッロを始めとする空間占拠の政治に対しても危機をもたらした。赤い旅団やアウトノミア運動などとの関連で、レオンカヴァッロに対する弾圧が強化されるのである。しかし、対抗空間として巨大な場所を確保してきたレオンカヴァッロにとって、80年代中期に新しい要素が加わる。「85年の若者」と称される高校生を中心にした運動の広がりである。テロリズムの時代の終焉に対応して、若い世代の運動が広がり、それが脱領域化された場所としてのレオンカヴァッロと結びつくことになるのだ。この新しいうねりは、各地で警察や当局の弾圧にあうが、それを実力で跳ね

返しつつ、「10、100、1000の占拠を」というスローガンに示されるように、空き家占拠による新たな空間占拠の運動として、拡大していくのである。

しかし、1980年代後半から90年代にかけて、イタリア経済の中心地であるメトロポリス＝ミラノにとって、レオンカヴァッロは明らかに異物であった。警察からマスコミまで、さまざまな弾圧が、この空間に対して徹底的な攻撃を開始したのだ。警察との衝突による逮捕者が、数十人を数えることも珍しくないような弾圧と反撃の攻防戦が開始される。この事態に対してレオンカヴァッロは、デモの防衛や警察部隊との衝突の前面に立つ、白いコンピュータ組み立て作業着に身を包んだ自衛武装部隊を結成している。

といっても、テロリズム時代の反省からか、暴力の行使については、かなり抑制的なようだ。数年前、ひさしづりにイタリアに滞在していたときのことで。ちょうどこの時期、コリエーレ・デラ・セーラ紙による反レオンカヴァッロ・キャンペーンの騒動が開始されたのだ。「レオンカヴァッロは麻薬の取引場所になっているから取り締められ」というキャンペーンが、連日のように繰り返され、警察の介入が開始されたのである。レオンカヴァッロとしては「麻薬撲滅運動の担い手」としての自負はあるのだが、実際には、さまざまな人間が出入りする解放空間なので、現実取引が行われている可能性も否定はできない。それゆえ、「麻薬反対」の立場（もちろん「覚醒剤追放」であり「マリファナ解放」の立場だが）を堅持するとともに、明らかに弾圧の呼び水となるコリエーレ・デラ・セーラを批判するという展開になった。こうして迎えたコリエーレ・デラ・セーラ本社前糾弾集会の日、メディアは、レオンカヴァッロと警官隊の衝突の可能性について大々的目論陣を張った。しかし、意外にも、レオンカヴァッロは、整然とした集会とデモでこれに答えたのだ。「挑発に乗る事なく、今回の事件を契機に運動の意義をキャンペーンさせてもらった」というのが、この日出されたメッセージの趣旨だった。

おわりに

シチュアシオニストたちは、統一的都市計画の名の下に、新たな空間の政治学を提案した。その提起は、40年の時を越えて、今なお、イタリアにおいて息づいている。

しかし、状況は、シチュアシオニストたちの時代のような（彼らの現状認識は、当時の政治勢力のなかではズバ抜けて先を読んでいたので）解体と漂流の空間政治学を許さないようにも思う。現状を破壊する解体の実践や、漂流という現状をズラし続ける技法とともに、おそらくは、このズレを共有することで、新たなコミュニケーションの場を形成・維持していくためのもうひとつの技法、すなわち「調整」の能力が、今後の空間の政治学のためには問われなければならないのだろう。レオンカヴァッロの運動には、こうした調整への方向性が感じられる。そしてこの方向性は、テロリズムに象徴される破壊と解体の運動の総括から学ん40年の間に積み重ねられた「運動」の歴史的な知恵が含まれているのだろうとも思う。

しかし、シチュアシオニストが提起し、その後のヨーロッパの運動のなかに引き継がれてきた空間の政治学は、日本社会においては、いくつかの例外——たとえば各地の学生寮の運動や学館をめぐる運動、京都大学の西部講堂やキンジ・ハウスの事例など——はあるにしても、十分な広

がりをもって自覚的に運営されてきたとはいえない状況にある。

日本における空間をめぐる政治は、今後、新たな運動のスタイルとして発展しうる可能性をもっているのだろうか。ここでは、ちょっとためらいながらだが、とりあえず、Si（そのとおり）と答えておきたいと思う。